ポケットモンスター
POCKET MONSTERS
The Animation
VOL.2
仲間
小説 首藤剛志
Takeshi Shudo
イラスト 一石小百合
Sayuri Ichiishi
小学館スーパークエスト文庫

小説／首藤剛志（しゅどうたけし）

神奈川県在住。書くことが苦手なくせに19歳で脚本デビュー。以後転々。結局、今もアニメ・小説・芝居などを書きつづける。代表作に『戦国魔神ゴーショーグン』、『魔法のプリンセス　ミンキーモモ』など。

イラスト／一石小百合（いちいしさゆり）

神奈川県出身。アニメ『ポケットモンスター』、『ウェディングピーチDX』ほかのキャラクターデザイン、総作画監督を担当。趣味はボディーボードの水系アニメーター。株式会社OLM所属。

装丁:GORILLA

スーパークエスト文庫

SUPER QUEST
BUNKO

ポケットモンスター
THE ANIMATION

VOL.2

小説
首藤剛志
イラスト
一石小百合

小学館

もくじ

カバー・本文イラスト／一石小百合

プロローグ……二巻のはじまり

森のはずれ……

丘の上から見下ろす、サトシとカスミとピカチュウの前に、ニビシティの灯（あかり）が広がっていた。

サトシが、ふるさとの町、マサラタウンを旅立ってから、どれぐらいの時間が、たったのだろう。

つい、昨日のような気もするが、ずいぶん、昔のような気もする。

いろいろなことがあった。

十歳のサトシには、その三分の一の三年三カ月分ぐらいの事件が起きた気がする。

でも、指折り数えれば、旅立ってから、たった三日目の夜だった。

……三日目！　三日もこんな、ガキっぽい男の子とつきあっているなんて……。

世界の美少女……と、少なくとも自分では思っているはずのカスミは、ため息をついた。

行きがかりとはいえ、こんなに長い間、男の子といっしょにいるなんて、男女共学の小学校でもなかったことだ。

しかも、男の子と二人だけなんて、今まで三十分以上、すごしたことはなかった。
その三十分だって、三年生のとき、友だちの女の子をいじめた男の子を、誰にも内緒で体育館の裏に呼びだして、ちょっとだけ文句を言って、ほんの少しだけ痛めつけたときのことだから、つきあったとか、すごしたとかいう時間じゃなかった。
もちろん、素敵な男の子となら、一時間だって二時間だって、一日中だって、かまわないはずだ。
そんなことを、夢見たこともある。いや、いつも夢見ていた。
でも、断じて、その相手は、サトシのような男の子ではなかった。
もっと、かっこいい……、たとえば、沈没しそうな豪華船の中で、最後まで女の子を抱きしめて守ってくれる……命を捨ててでもわたしを助けてくれる……少なくとも、サトシとは、絶対に違う男の子のはずだった。
だが、今、ここにいるのはサトシだ。
もしかしたらこれは夢かもしれない……カスミは、目をこすってみる。……夢じゃないようだ……だとしたら……カスミと一日中いっしょにいた最初の男の子が、サトシだということになる……ちょっとこれ……あんまりじゃない。悪夢としたってひどすぎる……。
「ピカ……」
そのとき、足もとで、ピカチュウが鳴いた。
ピカチュウは、ニビシティの灯に感激していた。

電気ネズミのピカチュウは夜の灯が好きだ。
夜の月も好きだ。星も好きだ。
でも、やっぱり、電気ネズミは、電気の明かりがうれしい。
カスミはそんなピカチュウを見てうれしくなった。
……そうだわ。ピカチュウがいた。ずっとピカチュウがいたじゃない。……サトシと二人だけでいたんじゃない。……つまり、わたしの夢はまだ守られているんだ……。
「わっはっは！」
カスミは、さっきの悪夢気分を吹き飛ばすように、わざとらしく笑った。
……なんだ？　なにがいきなり「わっはっは」なんだ？……カスミの、わけのわからない高笑いにあっけにとられたサトシだったが、ニビシティを目の前にしたサトシだって、気分はたっぷり「わっはっは！」だ。
ピカチュウも「ぴっぴかぴー」気分で鳴いている。
みんな、疲れてはいたけれど悪い気分ではなかった。

※

で……
わっ、またまた文字がいっぱい。
でも、もう慣れましたよね。

そうです。
この本は、ゲームでもない、アニメでもない、
文章のポケットモンスターなんです。
いちおう、小説のポケットモンスターです。
だから……
漢字がいろいろ出てきて、困っちゃいます。
でも、どうせ、いつかは覚えなきゃならないときが来るのが漢字です。
学校や塾の教科書や参考書で覚えるより、この本で覚えたほうがましかもしれません。
だって、あなたなら……
もう何十匹もポケットモンスターの難しい名前を覚えているあなたなら、この本に出てくる漢字なんか簡単ですよね。
それでも、わからない漢字が出てきたら、大人の人に聞きましょう。
お母さんでも、お父さんでも、学校の先生でも……。
聞いてみるとわかるのですが、大人の人って、意外と漢字を知らないことが多いのです。
いいえ、知らないのではなくて、忘れてしまったのです。
そんなときには、大人の人に辞書を見てもらいましょう。
国語辞典じゃなくて、漢和辞典……漢字の読み方や意味の書いてある辞書です。
すると、またまた意外なことがわかります。

大人って、けっこう、漢和辞典の読み方、つまり、辞書の引き方を忘れているんですよね。
漢字を知らないあなたと、忘れた大人。
どっちが良いとも悪いともいえません。
でも、知らないことより、忘れることのほうが、少しだけ、恥ずかしいかな？
でもね……。
アニメやマンガやゲームに夢中になっている大人を悪くいう人はいても、忘れた言葉を思い出すために、辞書を読む大人を悪くいう人はいないでしょう。
だから、気がねしないで、どんどん大人の人に漢字を聞いてください。
じつは、あなたには、知らない漢字なんかで、とまどっている時間はないんです。
なぜなら……
この小説には、漢字以外に知らない言葉が、かなり書いてあるのです。
その言葉は、国語辞典にも、漢和辞典にも、外国の辞典にも出ていないでしょう。
それは、ポケットモンスターを知っている人の世界にしかない言葉です。
たとえば……
「ポケモントレーナー」という言葉。
本屋さんや図書館にあるどんな辞書にも、たぶん、この言葉は出ていません。
でも、ポケットモンスターのいる世界の辞書なら、どんな辞書にも出ています。
ほら、ポケモントレーナーを目指すサトシの部屋の本棚にある簡単辞書にだって、ちゃん

と書かれてあります。

ポケモントレーナーとは……

「ポケモンをあやつるトレーナーのこと。ポケモントレーナーになるためにはさまざまなルール、方法があるが、普通は野生のポケモンをモンスターボールで捕まえて、強いポケモンに育てていく。近年はトレーナー間の、ポケモン交換（トレード）も盛んである。

公認ポケモントレーナーになる登竜門と呼ばれるポケモンリーグの地区大会に出場するためには、その地区の公認ポケモンジムに挑戦して勝ち、その証拠のバッジを八つ集めなければならない」

そして、今、サトシは、それを目指して旅を続けているのです。

第一章　ニビシティのイワーク

観光ガイド……ニビシティ
ニビシティの街の名がどこからきているのか、確かなことはわかっていません。
しかし、この地域には、色の名前をつけた街の名が多いので、ニビシティも、色にかかわりがあるという説が有力です。
では、ニビなどという色があるのかというと……これは、普通の辞書にも書いてあります。
にび色という古い呼び名の色があるのです。漢字では鈍色と書きます……こいねずみ色。
にぶいいろ。つまりごく普通の石や岩の色のことのようです。
大昔から、ニビシティは石や岩の産地として知られていました。
昔、石や岩は、建物や、記念碑やお墓を作る材料として多く使われていたのです。
とくに美しい大理石という石などは、国会議事堂などの立派な建物や、お金持ちのお風呂や、有名人の彫刻に使われました。昔、ニビシティには、大理石もたくさんあり、当時はマーブルシティとも呼ばれていて、にぎやかな街だったそうです。
マーブルとは大理石のことで、色でいえば模様のある明るい灰色、薄い黄色や薄いピンク

色のことで、けっして、チョコレートのようなこげ茶色のことではありません。

しかし、大理石が掘りつくされ、いつの間にか、マーブルシティの名は使われなくなってしまったようです。

やがて、ほかの石や岩も、コンクリートや新建材などの代理石に取って替わられていきました。

石や岩を使うものといったら、お墓か漬物石ぐらいしかない最近です。

今はもう、ニビシティに昔のにぎやかさはありません。

お漬物もあまり好きじゃないし、とりあえず、お墓にかかわりもなさそうな若い人たちは、どんどん街から出ていき、住んでいるのは、昔ながらに石を掘っているおじいさんやおばあさんばかりです。

街の通りはさびついたようにさみしく、そのうち、街の名もサビシティに変わってしまうかもしれません。……と、観光案内ではさんざんな紹介のされかたをしているニビシティですが、去年、改訂されたガイドブックには、新しく追加された部分があります。

掘りつくされた石や岩の採掘現場あとから、古代生物の化石が発見されたのです。

その化石はニビザウルスと、命名されました。

ニビシティの観光資源になると期待した当時の市長と市役所は、養老院を建てるつもりの予算で、古代生物科学博物館を造りました。

ニビザウルスの化石だけでは、陳列品が足りないので、近所の博物館からあまった化石を

借り、ついでに付近の大学から生物学の専門家を博物館専属の研究員として集めました。

けれども、その専門家たちの研究の結果、意外な事実がわかりました。

肝心のニビザウルスの化石が、世界各地で発見されているオムナイトという名の、ごくありふれた古代ポケモンの化石の破片だというのです。……発見されたオムナイトの化石は栄養不良で、やせすぎだったので、ほかの生物と勘違いされていたのです。

ニビシティ市役所としては、せっかく作った科学博物館だし、いまさら博物館の研究員を辞めさせるわけにもいかず、結局、土曜日曜だけは開館することにしました。

残念ながら、博物館の見どころがオムナイトの化石だけでは、この街を訪れる人も少なく、やはり、街の名前がサビシティに変わる日は遠くないでしょう。

※

ニビシティに入ったサトシとカスミは、ニビシティのポケモンセンターに向かった。

ポケモンセンターは、ポケモンの病院であると同時に、旅をするポケモントレーナー志望者たちのホテルにもなっている。

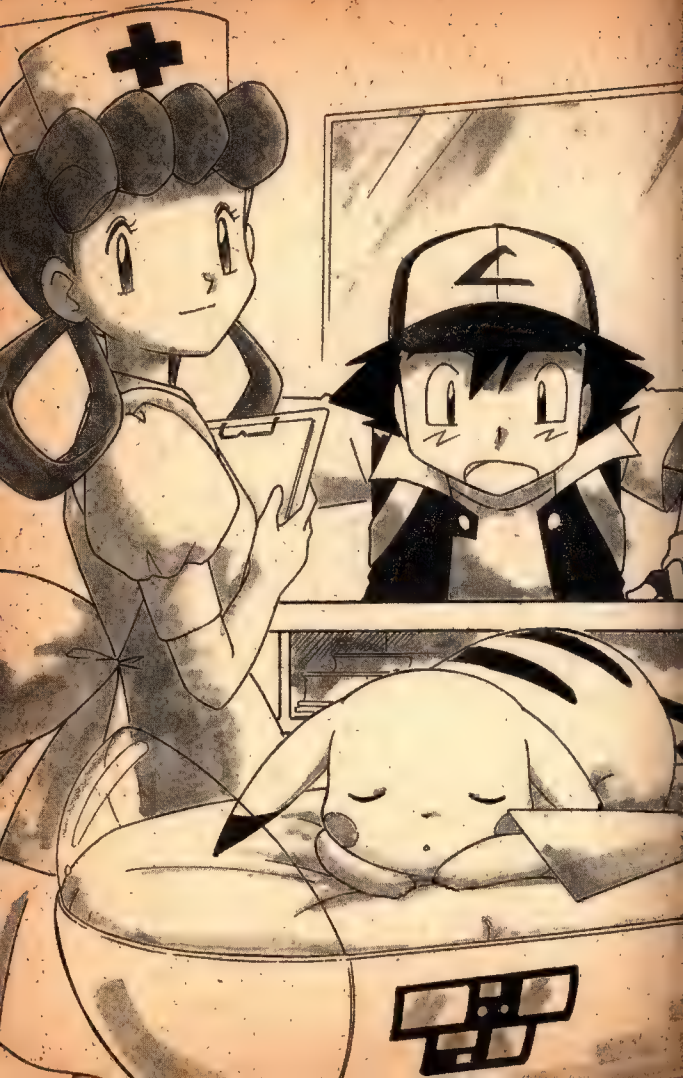
身分証明書代わりのポケモン図鑑を見せれば、無料で泊まれるのだ。

「来たわね。待ってたわ」

ポケモンセンターの女医が、入ってきたサトシたちを見るなりにっこり笑った。トキワシティのポケモンセンターがロケット団に襲われたとき、ニビシティに伝送されたモンスター

ボールを受け取ったのが、この女医だった。
「あ……」
サトシは、女医の顔を見て目を丸くした。
トキワシティの女医とそっくりの顔だったからだ。
女医は、サトシたちの驚きを、あたりまえのようにうなずいて言った。
「似ているって言いたいんでしょう？　トキワシティのジョーイはね。わたしの妹……。わたしの名も、ジョーイ」
ポケモンセンターに泊まり慣れているカスミが、宿泊名簿にサインしながら言った。
「ポケモンセンターのお医者様って、ほとんど名前がジョーイさんっていうのよね」
「そう、みんな、どっかで親戚なのよ。……まぎらわしいから、わたしのことは、いちばんきれいなジョーイさんって呼んでちょうだい」
「ふふ」
カスミが微笑む。
「なにかな？」ジョーイが聞き返した。
「ほかの街のジョーイさんも、みんな、そう言います」
「あらま……。よく言うわね。みんな」
ジョーイとカスミは肩をすくめた。
サトシが、ぽんと手をたたいて言った。

「あ、そうか。それって、カスミが、自分のこと、世界の美少女って言うのと同じことか……」
「なんのこと?」ジョーイが言った。
よせばいいのに、サトシは答えた。
「冗談。でたらめ。カスミが世界の美少女なんて、じょーだん……ですよね」
「なんですって!」
カスミが、サトシに食ってかかろうとするのを止めるように、ジョーイが間に入って言った。
「ともかく、二人とも、妹を助けてくれてありがとう。おかげで、センターのポケモンたちはみんな無事だったわ。でも、あなたたちのポケモンはきっとお疲れよ。お預りしましょう」
ポケモンのことを言われ、カスミはうなずいた。
「あ、そう。そうよね。早くポケモンの疲れをとらなきゃ……」
戦いに疲れたポケモンの体を回復させるのも、ポケモンセンターの大きな役目のひとつだった。
「そうだよ。明日は、ニビシティのジムで戦わなきゃなんないんだ。カスミの相手なんかしてられない」
サトシは、ベルトからモンスターボールを二個出して、ジョーイに渡した。

トキワの森でゲットした、バタフリーとピジョンの入ったモンスターボールだ。
「誰がわたしの相手してくれと言った！」
カスミは、ショートカットの髪を逆立て（さかだ）ながら、それでも、モンスターボールをジョーイに渡した。
「えへん！　わたし、三つね」
サトシより、ひとつ多い。
「オレだって、ピカチュウを入れれば三つだ。な、ピカチュウ」
ピカチュウの声はなかった。
「あれ？　ピカチュウ！　どこに行った？」
「あ、あなたの連れていたピカチュウなら……」
ジョーイが言った。
「とっくにお休み」
センターの奥に、赤ん坊を入れる保育器のような揺り（ゆ）かごがあった。
その中で、ピカチュウは眠っていた。
ピカチュウはもともと夜行性だ。
夜は目がさえる。
しかし、たとえ夜でも、安全な場所では、眠ったほうがいい。
夜は眠る生き物の人間とつきあっていかなければならないピカチュウは、そこが安全な場

所なら、夜でも眠ることに慣れなければならない。
　まして、サトシは明日の朝、ポケモンジムに戦いを挑む気なのだ。
　疲れは、早く取るべきだ。
　もっとも、ピカチュウ自身が、明日の戦いを知っているのかどうかはわからない。
　ピカチュウは、今、ぐっすりと眠っていた。
　まるで、明日の戦いを予感しているようだった。

※

　朝寝坊が得意のサトシだったが、この日だけは違っていた。
　朝を告げるみつごどりポケモン、ドードリオの声を聞くと同時にしゃきっと起きた。
　朝ご飯も食べず、揺りかごの中で眠っているピカチュウを抱き上げ、ポケモンセンターを飛び出した。
　そして、ジムの始まる三時間前から、門の前に並んでいた。
　もっとも、並んでいるのはサトシだけだ。
　ポケモンセンターのホールで見た地図によると、ニビシティのポケモンジムは、街はずれの裏通りにある。
　ニビシティが石や岩の街と呼ばれているわりには、そのジムは今にも倒れそうな古びた木造で……小学校の体育館のような建物だった。

サトシが、門の前に来て玄関をまっすぐ見ようとすると、なぜか、体が傾いてしまう。
サトシの体が変なのではなく、ジムの建物が、ひし形に傾いているのだ。
よく見ると、壁のところどころが、ベニヤ板で、つぎはぎされている。
雨や、風の吹き込まない軒下(のきした)は、段ボールや、ごみ回収のビニール袋でつぎはぎしているところもある。……これが、ポケモンジム？……
サトシは、目をこすって何度も見直したが、確かに、看板には……なぜか、看板だけは大きく立派な大理石でできていて、「創業百年……ニビシティジム」と彫られている。その下には、年中無休。開業時間は、朝の九時より五時まで。十二時から一時まで昼休み……三時から四時までお茶の時間で、小休止……と、しっかり書かれている。
どうやら、ここがポケモンジムであることは確かなようだ。
しかし、開業一時間前になっても、やっぱり、待っているのはサトシだけだった。
……オレだけなのかよ……
ピカチュウは、サトシの足もとでこっくりこっくり、居眠りをしている。
……こんなのありかよ……
いくらさびれた街だとはいえ、ポケモンジムに初挑戦するサトシとしては、拍子抜(ひょうしぬ)けだ。
ふるさとのマサラタウンですら、ポケモン関係では、新しいグッズが発売された日のスーパーにしろ、新着ビデオの来たレンタルビデオ屋さんにしろ、子供たちが押し寄せて並ばない日はなかった。

ポケモンという名前は、サトシにとって、並んで待つものと同じような意味もあった。

……今日は臨時休業なのかなあ……

気がつくと、どこからか、おいしそうなおみそ汁の匂いがする。……腹減ったなあ……ポケモンセンターで、朝定食でも食べて来ればよかったかなあ……

どっかにおにぎり売っているコンビニでもないかなあ……

でも、あたりにそれらしい店は見当たらない。……それに、買いに行っている間に、ほかの奴に並ばれちゃいやだしなあ……

そんなことを、うじうじ考えているうちに、開業時間が近くなった。

しかし、サトシの後ろに並ぶものは誰もいない。

開業時間ぎりぎりになったとき、後ろから叫び声がした。

「あーっ！　こんなとこにいた！　逃がさないわ！」

カスミだった。

「逃げた？　なんのことだよ」

「あら、逃げたんじゃなかったんだ」

確かに、サトシは、カスミの自転車を無断で借りてぼろぼろにこわしてしまった。使いものにならなくなった自転車を、カスミは涙をのんでトキワシティの不燃物置き場に残してきた。

「誰が逃げるか……オレは究極のトレーナーを目指す男だ」

「それがなによ。人並みの子供だったら、誰だってトレーナーになりたがるわ。それと、こわされた自転車の話は別……あなた、朝、ポケモンセンターの食堂にもいなかったし、わたしの自転車を弁償するのがいやで逃げ出したと思うのが当然でしょ」
……朝……食堂？……と、聞いただけでサトシのお腹が鳴った。
「何、食った？」
「え？」
「朝飯、何、食った」
「トースト……ストロベリー・ジャム、たっぷりつけてね」
「ジャムたっぷり」
サトシは気が遠くなりそうになった。
「この街、あまり知られていないけど、石がきイチゴがおいしいんですって。ジョーイさんのおすすめ」
「ピカチュウ……」
さっきまで、うつらうつらしていたピカチュウが、目をしゃっきりさせて鳴いた。
「それから、何食った」
カスミを頭からかじりそうな顔で、サトシが聞く。
「スクランブルエッグ。アンド、カフェ・オ・レ……シュガーレスでね」
「どこの国の言葉だ！」

「あら、知らないの？　どこの国だろうとね、常識的な朝のメニューなのに……あなたのマサラタウンって、田舎なのね……あら、いい匂い」
カスミが、ジムからただよってくる香りに気がついた。
「おみそ汁……ご飯の朝食もいいわよね。お豆腐のおみそ汁にノリにキュウリのお漬物つけてね」
「言うな！」
朝ご飯が食べられるなら、洋食でも和食でも中華でも、ネコまんま（ご飯にカツオブシをかけたもの……ネコが好きだといわれている）でもかまわないサトシがわめいた。
と、「お豆腐もいいけれど、今日のみそ汁はワカメに油揚げ……ワケギ（ネギの一種）を少々……」
そう言いながら、いきなり、サトシとカスミの間に、若い男が割り込んだ。
「だしは煮干しに合わせみそ……今日のお漬物はナスのぬか漬け……今日の天気だと十二時間以上漬けるとナスが漬かりすぎてすっぱくなるから気をつけてね」
若い男……といっても、まゆが濃く、不精ヒゲがちらほら……十歳のサトシと比べたら、ずーっと大人だ。
だが、不精ヒゲがなかったら、男ということがわからなかったかもしれない。
なにしろ男はハートマークのエプロンを着て、ホウキで、さっさと門の前を掃き出したのだ。

どうやら、ニビジムの人らしい。
「あのう……」
サトシが声をかけた。
「あ、キュウリのお漬物なら、もう少し時間をかけても、だいじょうぶだよ」
「ありがとう……」思わずカスミがお漬物の解説の礼を男に言った。
「でも、おじさん……」
サトシが聞きたいのは、ニビジムのことだ。
「おじさんではない！」
きりっとした顔で、男が言った。
「自分はまだ十五歳……ときにお嬢さん……」
エプロンを着た男は、にっこり、カスミに微笑んだ。
「お歳は、いくつ？　あ、女性に歳を聞いちゃ失礼かな？」
まるでサトシを無視している。
「え？　……いいえ……わたし、もう、大人。十歳です」カスミが答えた。
「八年後が楽しみだ……自分が二十三歳。あなたが十八歳。うんうん」
男はマジメな顔でうなずいた。
八年後になんの意味があるかわからないが……十八歳といえば……サトシの母、ハナコが結婚した歳なのをサトシは思い出した。

そんなことは知るはずもないカスミが、男に答えた。
「はあ……確かに八年後は十八歳です」カスミが言った。
「オレだって十八歳だ」サトシが思わず言った。
「キミには聞いていない」
男は、もう一度、きっぱり、サトシを無視して、カスミに言った。
「自分の名はタケシ……ニビシティ、ニビジムのタケシ。だが、自分を呼ぶときには、タケシくん……いや、あなたなら、タケシと呼んでくれていいよ」
「タケシさん！」
クン付けでもなく、呼び付けでもなく、さん付けで、呼んだのはサトシだった。
「ん？　なにかね。ぼうや」
まるで、今、サトシのいることに気がついたように、タケシはサトシを見た。
「オレ、……ニビジムのバッジをゲットに来た！　ジムのリーダーに会わせてくれ」
「ほう、ぼうやがね……いきなり、ジムのリーダーにチャレンジ（挑戦）か？」
タケシは、肩をすくめて言った。
「普通はジムのリーダーにチャレンジする前に、ジムのメンバーと練習試合をして試合慣れしておくもんだけどな」
「オレにはピカチュウがいる。負けるもんか」
「ピカ？」

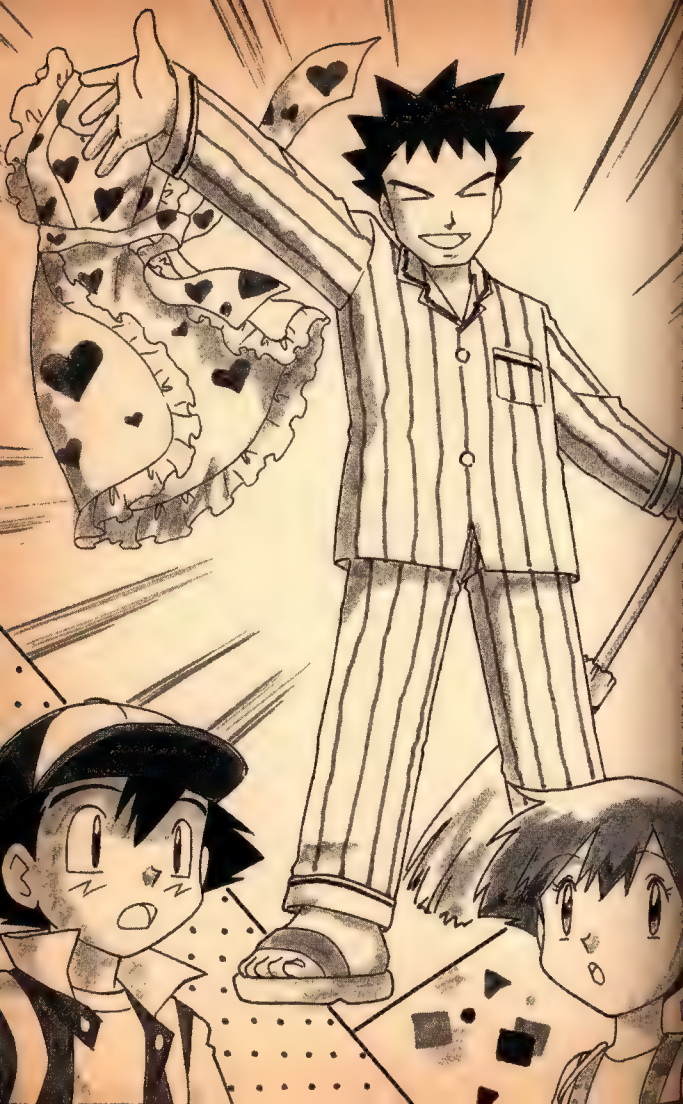
いきなり、自分の名前が出てきたピカチュウは首をひねった。
カスミもあきれたようにゆっくりと首を振った。
「本当にやるつもりなの？……ジムのリーダーは普通のトレーナーと違って強いわよ」
「オレは、究極のトレーナーを目指すんだ……一個目のバッジでぐずぐずしてられないよ」
カスミは、ぽかんと口を開けた。
……調子に乗るのもいいかげんにしたら？……
「ぐずぐずしてられないのなら、とりあえず、わたしの自転車をどうにかしたら？」
カスミは冷ややかに言った。
「とりあえずはニビジムのトレーナーに勝つことさ」
「もう、なにがあっても手伝わないわよ」
「手伝ってもらったことあったっけ」サトシが何気なく言った。
……なんですって……
カスミは怒ってこぶしを振り上げた。
「あったわよ！」
「あああ……」
あるといえば、あったかもしれないと……サトシも思った。
「あるとしても……役に立ったことあったっけ」
……そこまで言う……

カスミとしては、トキワシティのポケモンセンターでも、トキワの森でも、親切にサトシの手助けをしたつもりがある。
それに気がつかないなんて、男の子じゃない……こいつは、ガキだ。ジャリだ。石ッコロだ。オハジキだ。
「もう、知らないわ……」
カスミは、サトシを無視することにして、タケシに言った。
「えーっと、ニビジムの……」
名前を忘れていた。
「タケシです」タケシがすかさず答えた。
「あ……タケシさん。この、オハジキぼうやをリーダーに会わせてやってください……そして、徹底的にやっつけてもらって……」
タケシは、門の前をホウキで掃きながら言った。
「お嬢さん。このぼうやと何があったか知りませんが、女の子は、男の子に対して、それが、たとえ、どんなに変な、どんなにいやみな、どんなにかわいげのない、どんなにジャリっぽい、オハジキぼうやだとしても……」
サトシは、だんだん腹が立ってきた。
タケシはホウキで掃く手を止めずに　ぼそぼそと、つぶやくように言う。
「やさしさだけは忘れないでください。どうせ、そのジャリが勝てない勝負です。やらせな

いでください。こいつがどんなにいやな奴だとしても、無理なことをさせない。それが、女の子です。それがやさしさです。お嬢さんには、そんなやさしさがよく似合う……と、自分は思います」
　言っているセリフの内容は、かっこいい。
　カスミは思わず乗せられてつぶやいた。
「わたしは女の子。でも、まだ、十歳……そんなわたしに、大人のやさしさを求めるというの？」
　カスミは、まるで、アニメの新人の声優がしゃべるような棒読みで答えた。
　ぼそぼそ言うのが、かっこいいと思っているらしい。
　タケシもカスミも、自分の世界を作っていい気持ちになっているようだ。
「いいかげんにしてくれ……オレは、怒ったぞ……」
　いきなり、サトシは、門の向こうのジムに向かって叫んだ。
「オレは、マサラタウンのサトシ。究極のトレーナーを目指す男……そして、最高のパートナー、ピカチュウ……バタフリー……ピジョンで、ニビジムにチャレンジ、願う！　オレの名は、マサラタウンのサトシ……聞いているか？　ニビジムのリーダー！」
　門の前を掃くタケシのホウキが止まった。
「マサラタウン……？　マサラタウンと言ったな？」
「ああ、オレ、マサラタウンのサトシだ」サトシが答えた。

「名前などどうでもいい。マサラタウンと言ったのだな」タケシが、低い声で言った。
「そうとも。マサラタウンの四番打者……サトシはこのオレだ」
「四番打者？」タケシが聞き返した。
「そうとも、四日前、同じ日にマサラタウンから旅立った奴が四人いた。その中で、いちばん強いのが、このオレ、サトシだ！」
自信はなかったが、カスミとタケシが言いたい放題だ。オレだって、これぐらいのことを言ってもいいではないか……と、サトシは思った。
なんだかなあ？……と、きょとんとしているのはピカチュウだ。
三人の人間たちが、気持ちよさそうにしゃべっている。
しかし、ピカチュウは、お腹が減っているのとこれから始まる戦いを予感して、あまりいい気持ちではなかった。
「マサラタウンと言ったな」
タケシがもう一度言った。
その言葉に、ピカチュウは身構えた。
出会ってから今までのタケシの態度に、怖いものは感じなかった。
けれど、今のタケシの言葉に、ピカチュウは怖いを通り過ぎた危険なものを感じた。
怖いものはこちらから手を出さない限り、何も起こらない。
しかし、危険なものは、こちらが何をしようと、たとえ、こちらが逃げようとしても襲っ

てくる。
　ピカチュウはタケシの言葉の奥に、危険を感じた。
「マサラタウンのトレーナーは……三人ともここへ来た」タケシが言った。
「え？」
　サトシは、息を飲んだ。
「いちばん最初に来た奴のポケモンは、何をするにも素早かった。あの速さを止めることは難しい」
　誰のことだろう……。サトシは、同じ日にマサラタウンを旅立った子供を思い浮かべた。
　その答えが、思い浮かばないうちに、タケシが言った。
「二番目の奴のポケモンは、何から何まで慎重で、手堅かった」
　誰のことだろう？
「三番目の奴は、派手な奴だ。応援団を、連れて歩いている。その応援団は、八年後、いや、三年後でも楽しみな女の子ばかりだ」
　タケシがしみじみと言った。
　なんとなくサトシには、三番目が誰だかわかるような気がした。……応援団の女の子を連れて歩いている奴……シゲルに違いない。
　サトシはタケシに聞いた。
「で、そいつは？」

「派手なだけじゃない。奴の持っているポケモンは、速くて、慎重で、なにより、強かった」
……みんな、オレより先を歩いている……サトシは、焦った。タケシに聞きたかった。
……みんなは、バッジをゲットしたのか？……と。
しかし、それを聞く前に、タケシはサトシに言った。
「四番目のお前は、奴らより強いのか？」
「え？……オレ？」
そう聞かれたら、意地でも答えるしかない。
「あたりまえだろ。朝ご飯でも夕ご飯でも、いちばんおいしいおかずは最後に食べる。オレは、マサラタウンの四番打者だ」
タケシはうなずいた。
「ならば、ニビジムのリーダーがお相手するしかないな」
「会わせてくれるの？」
サトシが、叫んだ。
「会っているよ。もう、すでに」
「はあ？」
サトシもカスミもわけがわからず、タケシを見つめた。
タケシは、ホウキを投げ捨てて、エプロンをはぎ取った。

パジャマ姿のタケシがそこにいた。
「自分が、ニビジムのリーダー、タケシだ」
「あんたが……」
「あなたが……」サトシとカスミが、目を丸くしてタケシを見つめた。
と、そこに、ちょこちょこと、小さな女の子が飛び出してきた。
三歳か四歳ぐらいの女の子だ。
「お兄ちゃん。みそ汁のお代りいらない？」
「みそ汁……あまったのか？」
タケシは女の子に聞いた。
「うん。一杯の半分……少しだけ……。でも、みんながお兄ちゃんに食べてもらえって」
タケシは女の子に言った。
「ありがとう。でも、みそ汁はみんなで分けなさい。お兄ちゃんはこれからジム戦だ」
「ジム戦？」女の子が聞き返した。
タケシは、サトシを見ながら女の子に言った。
「この人はマサラタウンから来たチャレンジャー（挑戦者）だ。挑戦は受けなければならない」
「マサラタウン？」
女の子は少しだけまゆを曇らせた。

女の子は、とことことサトシの前に来た。
「マサラタウンの人?」
「うん」
サトシは答えた。
次の瞬間、サトシのヒザに激痛が走った。
「いててて!」
女の子が、サトシの足をけっ飛ばしたのだ。
そして、女の子はサトシをにらみつけて言った。
「お兄ちゃんに勝ったら、これだけじゃすまないから」
「なんだよいきなり?」
タケシが女の子を押さえ付けて言った。
「これは自分の妹だ。すまん。しつけが悪くて……ともかく、中に入ってくれ」
タケシは、女の子を抱き上げて、そそくさとジムの裏口に消えた。
「今、玄関開けるからな……」
ジムの中からタケシの声がした。
ごごごご……
地響きをあげながらニビジムの玄関が開いた。
木造の玄関のくせに、音だけは巨大な石の門が開くようなおおげさな音だった。

※

おおげさなのは見せかけではなかった。
建物の中はマサラタウンのサトシの学校の校庭ぐらいの広さがあった。
天井には、テレビ局の照明のようなランプがずらりと並び、灯（あかり）が次々ともっていく。
外側から見た印象と違い、かなり広い。
ジムというよりむしろ体育館だ。
だが、よく見ると建物の壁はところどころはがれていて、けっして、手入れが行き届いているとはいえない。
なにしろこの建物には、床がなかった。
土のグラウンドで、ところどころ、大きな岩がむき出しになっている。
「こんなとこで戦うの？」
サトシはいささかたじろいだ。
サトシの手持ちのポケモンといったらピカチュウとピジョンとバタフリーだけだ。
お世辞（せじ）にも大型のポケモンとはいえない。
こんな大きなグラウンドではサトシが一周ランニングするだけでもかなり疲れそうだ。
「待たせたな。朝ご飯の後片付けに手間取った。自動皿洗い機があれば楽なのだが……」
ひときわ大きな岩の上に、戦闘服を着たタケシが現れた。

所帯じみたことを言っているが、その顔は、きりりと引き締まっていて、笑みなどみじんもない。
「あらためて言おう。自分がニビシティ、公認ポケモンジムのタケシだ」
さっきはエプロンを着ていてよくわからなかったが、がっちりした体格で背も高い。
太いまゆ毛、細い目、その奥からサトシを見据える瞳……ポケモンのジムのリーダーにならなくても、ボクシングやレスリングなどの、人間の格闘技でやっていけそうな男だ。
「なんか、強そう～」
つぶやくサトシにカスミが、「もう、おじけ付いたの？　あの人とケンカするんじゃないのよ。あの人のポケモンと勝負するんですからね」
「わかってらい」
サトシは岩の上のタケシを見上げて言った。
「あらためて名乗ろう。オレはマサラタウンのサトシだ」
「マサラタウンから来た前の三人も言っていたが、ジム戦はここが初めてなのか？」
「う？　でも、森で修業中のトレーナーや、ロケット団と戦った経験は充分ある」サトシは胸をはった。タケシは肩をすくめた。
「ジムの試合は、素人やごろつきのケンカとは違う。政府・文部省推薦、文化庁・環境保護庁、通産および厚生病院省、大蔵銀行省、合併前の郵政省と自治省と警視庁、全国ポケモン学会ならびに全世界ポケモントレーナー組合公認の試合だ」

『なんかややこしいんだな』ポケモンについては、サトシよりもずーっと詳しそうなカスミも首をひねった。

「そうなに公認されてんだ。……でも、文部省はともかく、何で、大蔵省や通産省が公認しなきゃなんないの？」

「よくは知らん」タケシはあっさり答えた。

「ともかく、いっぱい公認されていると、偉そうには聞こえる。ポケモンのケガの治療は当然だが、万が一、トレーナーがケガをすれば、治療費も入院費も健康保険で全額払われる。これは、ありがたいことだ。しかし、そのかわり、試合にはちゃんとしたルールがある」

「面倒くさいんだな」

「マサラタウンとやらで、いくら、いちばんのポケモン使いといわれていようと、ジム戦が初めてのチャレンジャーは初心者とみなされる。初心者の使用ポケモンは二体……ただし、この室内グラウンドの中ならどこで戦ってもかまわない」

「どこで戦ってもいいのなら……」サトシが聞いた。

「なんだ？」

「もう少し、グラウンドが狭くなりませんか？」

「それぞれの街のジムには、それぞれの特徴がある。そのひとつひとつを克服することもポケモントレーナーの資格になる。ここは、岩と石の街。だから、キミは土と岩と石の世界で、戦わなければならない。さあ、戦う二体はもう決めたかな」

ザトシは悩んだ。といっても、ポケモンは三匹しかいない。

バタフリーは、昨日、トランセルから進化したばかりだし……なじみの深いものから使うしかないと、サトシは思った。

「オレのポケモンはピカチュウとピジョンだ」

タケシは、ピカチュウを見下ろして言った。

「お前、そのピカチュウをどれぐらい訓練したのかな」

「なぜそんなことを聞くんだ」

「ポケモンは普通モンスターボールに入っているもんだ。お前の言うことを聞かないのか？」

「違うわい。オレは、ポケモンとのびのびつきあいたいんだ」

「ものは言いようね」カスミはあきれた。

タケシがサトシに「のびのびつきあいたいなら、試合はやめておけ。ピカチュウは確かにかわいいポケモンだ。しかし、強いポケモンじゃない。手のひらに乗せてペットにでもしておけ」

「なんだと、オレのピカチュウは手のひらに乗るほど小さくはない！」

確かに、ピカチュウの身長は四十センチほど、両手で抱くことはできても手のひらには乗りそうもない。

タケシの口元が少しだけ微笑んだ。

「かわいいものは大切にしておけ……というたとえだ」
「オレのピカチュウをなめるなよ。なめたらぴりりと感電するぜ」と、サトシはタンカを切る。
ださい！　カスミはサトシのセリフにげんなりした。しかし、サトシはしゃれを言ったつもりはなく、真面目な顔をしている。だとしたら、もっとださい！
タケシは、静かにうなずいた。
「仕方ないな。ジムトレーナーとして、申し込まれた試合は受けて立つ」
タケシは、岩から飛び降りた。
「時間無制限！　試合開始だ！」
と、そのとき、ジムの観客席に子供たちが飛び出してきた。タケシとたいして変わらなそうな歳の男の子を筆頭に、最年少は、さっきサトシの足をけっ飛ばした三、四歳の女の子まで、あと、カスミが指で数えきれないほどいた。ざっと見て二十人近くいた。
そろいもそろってエプロンを着ている。
男の子が叫んだ。
「お兄ちゃん。時間無制限って言ったって、電気代が馬鹿にならないんだからね」
「わかっている。もう、洗濯は終わったのか？　すすぎ洗いは二回で止めたか？　水のむだ使いはするなよ」と、タケシが答える。
なんなんだよ……これから……勝負だっていうのに……

サトシはいささか、こけた。
男の子が叫んだ。
「それより、お兄ちゃん。油断すると、前の三人のように負けちゃうよ！」
「わかっている！」
待てよ？……前の三人って？
「ちょっと待って」サトシはタケシに聞いた。
「前の三人って、マサラタウンの三人……負けたの？　あんた」
タケシはくちびるを嚙みしめた。
「同じ町出身のお前たちだ。自分が黙っていても、いずれ、お前の耳に入るだろう。確かに不覚をとった。一人目は、あまりに田舎の町から出てきた奴なので、手加減し、弱いポケモンで相手をしたのがあだになった。二人目は、試合が長くなると電気代がもったいなくて、いささか焦って、勝負を急ぎすぎた。三人目は、応援団の女性たちが多すぎて、気が散っているうちに負けていた」……応援団の女の子といったらシゲルに違いない。
「だが、同じ町出身者に、四人もたて続けに負けては、ニビジムの名にひびが入る。試合中の電気代も底をついた。今度は負けるわけにはいかない。電気代を思えば、勝負に時間もかけられぬ。さいわい、いっしょに付いてきているそのお嬢さんも、わたしが気をとられるには子供すぎるし……」
カスミは、いきなり自分のことが話題になってきょとんとしたが……

……わたしが子供すぎるですって……？

むかーっ！

「サトシ、このおじさんをやっておしまい！」

きっぱり命令口調で叫んだ。

タケシは首を振った

「そうはいかない。今回、自分は自分の持つ最強のポケモンでお相手しよう」

タケシはモンスターボールを取り出した。

「そんな電気ネズミ……三十秒で片付けてやる」

「ピカ？」

ピカチュウは、タケシの言葉を聞いて不機嫌な顔になった。

人間の言葉はよくわからなくても、悪口や軽蔑されていることはなんとなくわかるのだ。

「オレのピカチュウは、テレビのCMタイムじゃない。負けてたまるか！　いけ！　ピカチュウ」

ピカチュウは……やってやろうじゃんか……とでも言いたげに、肩をゆすって、前に出た。

タケシは、そんなピカチュウに一瞬だけやさしいまなざしを送ったが……

「弱い者いじめのようで不憫だが、これも、ジムの名誉のため。わが家族のため……許せよ」

そして、モンスターボールを投げた。

「行けっ！　いわへびポケモン……イワーク」
タケシのモンスターボールが閃光とともに割れた。
ここまでのモンスターボールは誰のボールもいっしょだ。
だが、中から出てきたポケモンを見た瞬間、ピカチュウは立ちすくみ、ぽりぽりと額をかいた。
そいつは、ピカチュウの十倍以上あった。
丸い岩の固まりを数珠つなぎにして巨大なヘビにしたようなポケモン。イワークだ。
もちろん、サトシが今まで見たこともないポケモンだ。
ポケモン図鑑で調べる気もしなかった。
どう考えても、相手は大きくて強そうで、ピカチュウが勝てる見込みはなさそうだった。
サトシがぼう然と言った。
「ほかの三人のポケモンも、こいつと戦ったのか？」
タケシは首を振った。
「こいつは、自分のとっておきだ。今回、勝つためにあえて出した。あの三人に出しておけば、負けるはずがない」
「そんな。ずるいよ。オレのときだけ」
「だから、許せと言った」
「許せなんて言葉は、そっちの負けそうなときに言ってよ……なあ」

と、ピカチュウに同意を求めようとすると、もう、イワークの前にピカチュウはいない。
「あれ？　ピカチュウ？」
気がつくと、足もとにピカチュウがいて、……どうしようもないよ……とでも言いたげに肩をすくめている。
「戦う前からあきらめるなよ」
あわてて、サトシはピカチュウを前に押し出した。
「やる気だな」タケシが言った。
「イワーク。体当たり攻撃だ」
イワークがとぐろを巻いていた体を伸ばした。
そして、ピカチュウに倒れかかってくる。
グラウンドの岩が、石が、砕け飛び散る。
ピカチュウは逃げるしかない。
逃げるのはピカチュウだけではない。
飛び散る石や岩の破片をよけて、サトシとカスミも逃げるしかなかった。
「なんとかしなさいよ」
カスミが叫ぶ。
「逃げてりゃ三十秒ぐらいは持つかな」
「逃げっぱなしじゃ、試合放棄とみなされてどうせ負けよ」

「と言ったって……」
サトシの頭には、もう一匹出すつもりだったピジョンが浮かんだ。
ピジョンがいくら羽ばたき攻撃をしても、イワークはびくともしないだろう。
それに、天井のある室内グラウンドの中を飛び回っているだけでは、逃げることさえできず疲れるだけだ。
そのときだ。
「きゃっ！　ピカチュウが！」
カスミの悲鳴がした。
イワークのしっぽの部分が、ピカチュウの体に巻き付いたのだ。
イワークはピカチュウをぐるぐる巻きにして、ぐいぐい締めつける。
「かわいそうだが、締めつけ攻撃」
タケシが、つぶやく。
かわいそうとか、申しわけないとか……いちいち断りながらイワークに指図しているのが、サトシには頭にくる。
だが、怒っている暇はない。
イワークに締めつけられたピカチュウは、身動きができない。
このままでは、つぶされるのを待つだけだ。
サトシは、ピカチュウが今、できる最高の技を叫ぶしかなかった。

「ピカチュウ！　電気ショックだ！」
……言われるまでもない……ピカチュウにとっても頼れる技はそれしかない。
「ピカッ！」
全身を震わせて電撃を放射する。
だが、しかし、イワークはびくともしない。
タケシはもがくピカチュウを見つめながら言った。その言い方は、どこか辛そうだった。
「育てが足りない……それぐらいの電撃攻撃では、岩系ポケモンには効果がない……いいか、岩や石、鉱物には電気を通すものもあるが、絶縁するものもある。そんな鉱物がさまざまに入り交じっている岩系ポケモンの体には、普通の電気では通用しない」
「オレのピカチュウは普通じゃない」
ピカチュウは、苦しみながらも二度、三度と電撃を発した。
タケシが言った。
「むだだよ。電気を使えば使うほど、ピカチュウの体は消耗する。そして、電気を使い果たせば……」
「え？」……サトシはぼう然となる。
「最後まで言わすな。ジムの電気がなくなれば、停電ですむ。しかし、生き物のピカチュウの電気が完全になくなれば……それが、何を意味するか？　わからぬお前でもあるまい」
サトシは言葉もない。……確かに、ピカチュウは電池で動くおもちゃとは違う。生き物だ。

すべての動きが止まったら、新しい電池を入れ換えたからといって再び動きだすとは限らない。

タケシがきっぱりと言った。

「戦いをやめろ。ピカチュウにこれ以上、電気を使わすな」

次第に、ピカチュウの電撃の閃光が鈍くなる。

明らかに弱っている。

「サトシ……このままじゃ」カスミがつぶやいた。

「ピカチュウは、オレのピカチュウだ！　カスミなんかの指図は受けない」

サトシは叫ぶ。

「止めさせんか！　戦いを！　ポケモンに無理な戦いをさせるトレーナーは、ポケモンをいじめているにすぎない」

タケシが怒鳴った。

サトシだってわかっていた。

だけど、悔しい。タケシからそれを言われるのが悔しい。カスミから言われるのも悔しい。

でも……

サトシはピカチュウを見つめた。いや、もうこれ以上、見ていられなかった。

サトシは叫んだ。

「もう、いい」

サトシは、がっくりとヒザをついた。
「止めてくれ。もう、止めてくれ！」
タケシが、ため息をついて言った。
「試合放棄するんだな」
「するよ。オレの負けだ」
「わーっ！　兄ちゃん。やった！」
観客席の子供たちが歓声をあげた。
サトシのヒザをけっ飛ばした女の子が、鐘を鳴らした。
「イワーク。もういい」タケシが叫んだ。
イワークは、ピカチュウへの締めつけをほどいた。
ピカチュウは、立ってすらいられなかった。その場に気を失って倒れた。
ピカチュウに駆け寄ったのは、サトシよりタケシのほうが早かった。
タケシは、ピカチュウの胸に耳を押し当てると、ふーっと息を吐いた。
「だいじょうぶ。息はある」
そして、駆け寄ったサトシに言った。
「早くポケモンセンターで治療を……」
「うん」
そう言いながらも、倒れたピカチュウを抱きしめるサトシにタケシは怒鳴った。

「試合は終わった。早くしろ。お前の大事なピカチュウだろう」
気を失ったピカチュウを抱いて、サトシはポケモンセンターへ走った。
とても、惨めだった。そして、ピカチュウが心配だった。
走るサトシの頬に涙が、止めようとしてもほとばしり出た。

※

「さすが、ニビジムのリーダーだわ。ピカチュウをこんなふうに倒せるなんて」
意識のないピカチュウを診察しながら、ジョーイが、つぶやいた。
「え？」
サトシは、自分の耳を疑った。……こんなときにピカチュウを倒したタケシを、ほめるなんて……ひどいじゃないか。
だが、そんな気持ちを、口に出したのはカスミだった。
「ひどーい！　どういうことですか？　それって」
口の早さは、いつもカスミにかなわない。
食ってかかるようなカスミに、ジョーイは微笑んだ。
「安心して……このピカチュウはだいじょうぶよ……」
「そんな、どういうことですか？」……どこがだいじょうぶなんだ！　オレのピカチュウは倒れてからまるで動かないっていうのに……今度は、サトシが食ってかかるように言った。

「あなたのピカチュウは……どこも傷ついていないわ。ただ、疲れ果てて眠っているだけ」
「眠っているだけ？」
サトシは聞き返した。
「エネルギーの電気はかなり減っているけれどね。この程度なら、自然に回復するわ。眠らせておくことね。ま、一日、何もせず眠れば、明日は元気にお目覚め……朝の食事が、きっとおいしく食べられる」
ジョーイは、ピカチュウを、昨日眠っていた揺りかごにそっと置いた。
「あの……充電するとか……なにか手当てはしないんですか」
カスミが聞いた。
「人間だってそうでしょう？　疲れたときに、下手な薬や、ドリンク剤を飲むと、かえって体に負担がかかり病気になることがある。今のピカチュウに、人工の強い電気を与えると、頬にある電気袋を痛めるだけ……ここは、自然に任せたほうがいいの。医者の仕事は、病人を薬漬けにすることじゃない。自然に回復できるなら、それが最高。本人がどうしても回復できないときだけ、薬や治療で手伝ってやればいいの」
「こんなピカチュウがだいじょうぶなんて信じられない」サトシは、まだ、心配だった。
「ほんと……」カスミも同じ気持ちだ。
「ニビジムのリーダーに感謝することね」ジョーイが微笑みながら言った。
「え？」

「このピカチュウの状態をよく観察して、体までは傷つけないで、倒した。理想的なポケモンバトルだわ」
「理想的なポケモンバトル……相手のポケモンを傷つけずに勝つ……か」
カスミはうなずいた。
「確かにそうよね。とっくにバトルに勝っているのに、つい、やりすぎて、相手を痛めつけるってことあるものね」
「相手を食べる目的でない限りは、普通、生き物の戦いって、どちらが強いかわかれば、その瞬間で終わるものなの。それ以上、弱いものを傷つけたりしない……徹底的に相手を痛めつけたり、殺したりするのは人間だけかな」
そう言ってからジョーイは肩をすくめた。
「ともかく、ピカチュウがやられていないなら、明日、また挑戦だ。オレはやるぜ！」
サトシが叫んだ。
「サトシ君……キミ……もうちょっと勉強したほうがいいんじゃないかな」
ジョーイがやさしく言った。
「わたしもそう思う……あなたは育ても足らなきゃ、勉強も足りない」カスミがうなずく。
「なんだと？」
「一度負けた相手に、二度も三度も戦いを挑むポケモンがどこにいるの？……どうせ負けるとわかっていて戦うのは、人間のおばかさん。命令されたポケモンはいい迷惑……」

サトシはもう一度、……なんだと？……とカスミに言いたかったが、……何度でも言うわよ……と、言い返されそうでやめた。
「じゃあ、どうすりゃいいんだよ」……そう言ってしまう自分がちょっと情けない。
「ほんと、おばかさんね。ジムはこの街だけじゃないわ。ジムのある街はこのブロックにいくつもあるわ。そのうち八つのジムに勝てばいいんでしょ」
カスミはお姉さん気取りの口調で言った。
「下手なテッポウも数撃ちゃ当たる……か」サトシは最近、覚えたばかりのことわざをつぶやいた。
「でもね……」ジョーイが、しみじみと言った。
「次がある。次がある。で、工夫もなしで渡り歩いていると、ひとつも勝たずに二度も三度もこの街にやって来る人もいるわ」
ジョーイが、センターのロビーの窓際を見た。
イスにじっと座ってアンパンをかじっている老人がいる。
「三日前からここにいるあのおじいさんはね、センターの記録によると、この街は四度目。前にここへ来たのは二十年前なの」
「二十年前……」サトシの年齢の倍である。
「もちろん、私も生まれていないわ」ジョーイが言った。
「あのおじいさんは、八十歳以上。ポケモントレーナーを目指す限り、センターで、ベッド

とお食事はお世話するわ。でも、いまだにトレーナーを目指して、いろんな街を回っている。あのおじいさん……健康診断をしたのだけれど、もう、トレーナーを目指す体力はないの。診断の結果を、わたしは、あのおじいさんになんと言ったらいいのか……」

「言ってないんですか？」カスミが聞いた。

「言ってはいないけど、あのおじいさんは、聞かなくても結果に気がついているわ」

「え？」カスミが聞き返す。

「連絡が入っているの。あのおじいさんは、行く先ざきの街のポケモンセンターで、健康診断をしてもらっている。そして、どこの街でも結果は同じ……」

「だめ？」サトシが聞いた。

ジョーイはうなずいた。

「今は、あのおじいさん。街を訪れても、ジムには行かない。それでも、街を回るのは、どこかのセンターの健康診断で、ポケモントレーナーをやれる体力があると、言ってもらいたいだけなのかもしれない。でも、わたしも、それは言えない」

イスの動く音がした。

老人がゆっくりと、カウンターの前にやって来る。

……別に悪口を言っていたわけでもないけれど……

サトシとカスミは思わず硬くなった。

「ジョーイさん。ちょっと散歩に行ってくるよ」老人は言った。
「はい。ごゆっくり」ジョーイが答えた。
老人は黙って、玄関を出て行った。
なんとなく緊張がとけたサトシとカスミはふーっと息を吐いた。
「なんだか、寒い……」カスミが言った。
「トレーナーの化石だよな」サトシが言った。
「化石といえば……」気分を変えるようにジョーイが言った。
「この街には科学博物館があるの。ちょうど今日、土曜と日曜は開いてる。行ってみたら？」
「でも、オレはピカチュウの看病が……」
「明日の朝まで静かに眠らせてあげなさい。安静が必要なポケモンに、素人(しろうと)の看病は正直いって邪魔なときが多いの。ピカチュウはわたしがしっかり預かります……それに、あの博物館。たいしたものはないけれど、勉強不足の人には、参考になるかも」
ジョーイはにっこり笑った。

（二章に続く）

（……お急ぎの方は二章にお進みください。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれない情報が書かれているかもしれません）

……ポケモンに関する参考文献3……

ポケモンの生物としての特異点（とくに変わっている部分）について。
現在、百五十一種類が確認されているとされているポケモンですが……（この数は正確と思われる筋の報告書で確認されているというだけで、本当は、そのポケモンの骨や化石が発見されていないものもあります）。
たとえば、幻のポケモンといわれるファイヤー（世界各地に残る火の鳥の言い伝えによく似ています）、フリーザー（氷の鳥の言い伝え）。
伝説のポケモンといわれる（これは、東洋の竜の言い伝えに似ている）ハクリューやカイリューも、百五十一種類の中に入っていますから、百五十一という数はあてになりません。ファだいたい幻のポケモンと伝説のポケモンという呼び名の差もはっきりしていません。ファイヤーとフリーザーが英語的な呼び名だから幻のポケモンで、リュー（竜）という呼び方が

東洋的だから伝説のポケモンなのだという、もっともらしい解説もありますが、よく考えてみるとわけのわからない分類法であります。たとえば、ドラゴンという名前なら幻で、竜なら伝説とでもいうのでしょうか。

……バドなら西洋でキリンなら東洋……でも、ビールには違いない、というほうがよっぽど説得力があります……（おっと余計なおしゃべりですね）わたしが言いたいのは、百五十一種類いるといわれるポケモンの中の、そんな珍しいポケモンではなく、もっと身近なポケモンの中にも、生物としては、とても異様なポケモンがいるということです。

この世の中のものはいうまでもなく生命的機能を持つ有機物と、空気、水、鉱物などの生命機能のない無機物からできています。

有機物と無機物の差を詳しくいい出すと、千ページ以上の本が何冊も必要になりますので、ここでは省略させていただきますが、普通、生物はいうまでもなく有機物からできています。

どんな生き物も、基本になるのは有機物であるたんぱく質の組み合わせでできています。……いわゆる生物の遺伝子もたんぱく質の組み合わせ情報を持った物質だといっていいでしょう。それが、動物だろうと植物だろうと、生命には、有機物であるたんぱく質が必要なのです。

ところが、ポケモンの中には、このあたりまえの生物学上の常識をくつがえすものがあります。

たとえば、岩系のポケモン、イシツブテ、ゴローン、イワークなど、いうまでもなく体は

鉱物でできています。

……じしゃくポケモンのコイルやレアコイル。磁石にいくらNとSがあってお互い引きあったり、反発したりするからといって、その動きが生き物とはいえません。あくまで、磁力を持った鉄や銅などの鉱物です。

……第一発見場所が兵器倉庫だったことで知られるどくガスポケモンのドガース。ガスが生き物だったら、私たちは、お湯を沸かすたびに生き物を殺していることになります。お風呂を沸かしたら大殺戮です。安心してください。ガスは無機物です。しかし、ドガースは生きている。

……今や、街の工場廃液汚染地区では、普通に見られるようになったヘドロポケモンのベトベター……ヘドロには生き物に危険な無機物が含まれているから、ベトベターの発生は、街で大騒ぎになるのです。

いずれにしろ、この世界には、体のどこにも有機物がないポケモンが、かなりの数存在します。これは、明らかに生物学上、生命学上、地球上ではありえないことです。

しかし、現実にはイワークもドガースもコイルも、ポケモンという生物としてこの地球に存在しています。

無機物が生物になることはありえない。

この常識を、無機物のポケモンたちはいとも簡単に打ち破ってしまいました。

無機物が、生命を持ってもいいじゃないか。そうむきになって否定しなくてもいいじゃな

いか……という楽天的な学者もいます。

しかし、無機物が生物になるとしたら、大昔からＳＦ（科学空想）小説やＳＦ映画などに出てくる生命を持ったロボットやコンピュータ、心を持った機械が、発見・発明されても不思議はなくなります。

これではＳＦ（科学空想）が空想でなくなり、ＳＦ作家は失業し、それ以上に危険なことが起こります。たとえば、人形やおもちゃは無機物でできており、どんなにかわいがっても、命を持って動きだすことはありませんでした。アニメやマンガは、映像であり、絵です。ゲームのキャラクターが、どんなにかっこよく動いても、生命の宿った生き物ではありません。

しかし、数百年前から、人形やおもちゃやアニメやゲームのキャラクターを、生き物と思い込んで、自分の友だちや、恋人と思う人々が増えてきました。

子供の間はいいのですが、大人になっても相変わらずその気持ちを捨てず、それどころか、生物よりも無機物を愛するようになった人が、今や、全人類の三十パーセントをしめているといいます。その人たちは、無機物を愛していますから、大人になっても人間同士の結婚はしないし、子供も産みません。

このままでは子供が生まれてきませんから、人類はそのうち、滅びてしまうとなげく人もいます。

そこに、無機物のポケモンが登場してきました。無機物に生命が宿るなら、かわいがって

いる無機物のキャラクターにも生命が宿るかもしれません。
この事実は、無機物を愛する人々を勇気づけました。
戦闘機や戦車など武器が大好きな、ある人は、兵器工場からどくガスポケモン、ドガースが発見されたとき、小躍り(こおど)して喜んだといいます。
もしかしたら、戦闘機ポケモンや戦車ポケモンが生まれて、お友だちになり、本物の戦争ごっこをしてくれるかもしれないのです。
ピストルポケモンや刀ポケモンが生まれたら、親友になり、自分の代わりに、いやな奴をこらしめてくれるかもしれません。
兵器や武器の大好きな人はそうはいないでしょうが、人形やアニメのキャラクターを好きな人はいっぱいいます。
もしも、それが、人形ポケモンやアニメポケモンになって生まれてくれれば、僕は、ポケモンの研究などせずに、大好きな人形ポケモンやアニメポケモンをたくさん友だちにして、一生、楽しく暮らすでしょう。
おっと、少し、私情が混じってしまいました。すいません。
無機物に生命は宿るのか？　の問題に戻ります。
二十世紀の中ごろ以降……生命に対して、ユニーク（独特）な学説が生まれました。
無機物に生命はともかく、心のようなものが生まれてもいいという学説です。
この考え方の代表が、ライカモ・ワトソン博士です。

断っておきますが、名探偵ホームズのお友だちのワトソンさんではなくて、本物の学者のワトソン博士です。

その説を簡単にいえば、こういうことです。

たとえば、みなさんも経験したことがあるでしょうが、昔、なくしたと思って忘れていたものが、ある日突然、思いもかけないところから見つかることってありませんか。

たとえば、部屋の隅から、なくしたと思い込んでいたボールペンや鉛筆が何年もたって見つかること……その部屋の隅は、今まで何回も掃除し、そこにボールペンや鉛筆が見つかるはずのないところです。

たとえば、何年ぶりかで掃除した押し入れの中から、子供のころ、捨てたと思い込んでいた人形が見つかったことはありませんか？

その押し入れだって、今まで、何回も整理したはずです。でも、そのときには見つからなかった。

では、なぜ、忘れたところに見つかったのか？

ワトソン博士は、仮説をたてました。それは、見つかったのではなく、忘れられたものが、見つかりたいと思ったからではないか。

あなたが、昔、愛していたもの、愛用していたものが、あなたに会いたくて、自分から出てきたのではないか。

つまり無機物にも、心とはいわないものの、それに近いものが生まれる可能性があるので

はないかというのです。

ゴルフに、ホールインワンというのがあります。ひと振りで、ゴルフボールが目的の穴に入ることですが、プロのゴルファーでも、奇跡的ともいえるほど珍しいことです。

でも、その奇跡が、アマチュア（素人）のゴルファーにも起こります。

ホールインワンの確率は、プロもアマチュアもほとんど変わりありません。

ゴルフのうまい下手にかかわらず、奇跡はしばしば起こるのです。

なぜでしょう。

こうは考えられませんか？

ホールインワンは、ゴルフをするものにとって、一生の夢です。

その夢をかなえるため、ゴルフボールが穴に入ってくれた。

ゴルファーのうまさではなく、ボールが穴に入ってくれたのです。

こんな例は、ほかにもいくつもあります。

たとえば、考古学者が、遺跡の土の中から大昔の石器を発見します。

土器の破片を発見します。

普通の人が見ただけでは、ただの石ころとしか見えません。

それでも、土や石ころの中から土器や石器は発見されます。

考古学者は、どうやってただの石ころと石器や土器を見分けたのでしょう。

考古学者の多くが、こう語っています。

「そこにあるかなと思ったら、自然に見つかった」
見つけたのではなくて見つかったのです。
大昔、人間に使われていた石器や土器は、見つけたいと思って探している人に、見つけられたいと思って出てきたのではないか。
いいえ、思うという表現は、あまりに生き物的です。
けれど、それに近い力が、無機物である石や土器の破片に働いたのではないか……。
その力を、有機物ではない無機物に生まれた生命とは呼べないのだろうか……
この説を、とんでもないと言う人もいましたが、かなり多くの人々に指示され、生命学としてだけでなく、人間をよりよく知るための哲学として、今に至っています。
どんな生命学も生物学も、結局のところ、人間という自分自身を知るために役立つのです。
岩系ポケモンも、どくガスポケモンも、無機物でありながら生きています。
ほかの有機物系のポケモンも、もちろん生きています。
無機物系のポケモンをよく調べることが、有機物系のポケモンの謎を説く鍵にもなり、しいては、人間という生き物がなんであるかも知ることになると、僕は、信じています。
……オーキド博士とはなんの関係のない、名もないポケモン研究家……
第九十八回全世界携帯獣学会に参加したポケモンアナリスト（分析家）

ソネザキマサキに送られたインターネット・メールよりばっすい

ソネザキマサキによる注

文中のライカモ・ワトソン博士とは、おそらく生命科学者ライアル・ワトソン博士の間違いであろう。

二十世紀後半のニューサイエンスという分野で著名な人物である。

こんな初歩的な名前の間違いをされては、このメールの信ぴょう性（信用度）は、かなり落ちる。いいかげんな知識で、余計な名前を出さなければいいのに……残念である。

ニューサイエンス……科学を物質の進歩だけでなく、心の問題としてとらえようとする考え。わかるかなあ？

第二章　ゲット・グレーバッジ

古代生物科学博物館は、ニビシティの街のはずれにあった。
土曜とはいえ、訪れる客はほとんどいなくて、場内はがらんとしている。
たいしたものはないとはいえ、陳列品は、さまざまな生き物の化石だ。
いかにも地方都市の博物館らしく、陳列品の足りない部分は地面の中から見つけたものならなんでも、それこそ、水晶から石炭までかたっぱしから展示してある。
それでもサトシにとっては見たことのないものばかりだった。
けれど、今のサトシは、化石のことなど、どうでもよかった。
「わっ、きれい」
カスミが琥珀の前で立ち止まった。
琥珀は松の木から出てくる脂が土の中で固まったもので、昔は宝石のように大事にされた。
今は宝石というより、脂に誘われて脂の粘りから抜け出せなくなった何千万年も昔のいろいろな虫が、そのままの形で閉じこめられていることで注目されている。
けれど、今のサトシには琥珀のことなどどうでもよかった。

いや、何も目に入らなかった。
サトシは、その場にカスミを残しどんどん歩いていった。
サトシはぶつぶつとつぶやいていた。
いやだ！　いやだ！　絶対いやだ！……カスミはニビジムをあきらめろと言うけれど……
マサラタウンから来た三人は、バッジをゲットしている。たとえオレがほかの街で八つのバッジをゲットしても、ほかの三人はニビジムのバッジを持っているんだ。ほかの三人のときに、イワークは出てこなかったらしい。でも、それを言っても、ほかの奴にはいいわけにしか聞こえないだろう……それよりなにより、生まれて初めてのジム戦を負けてあきらめるなんて……いやだ！　オレはいやだ！
やりきれなさが、ふくらんで、サトシは、いつの間にか走りだしていた。
博物館の床に、サトシの靴音が響いた。
いきなりがつん……「あいて……痛いじゃんか！」
前をろくに見ずに走っていたサトシは、誰かにぶつかった。
が、相手ももろかった。サトシを抱き止めるようにして、しりもちをついた。
「痛いのはこっちもじゃ……博物館の中は走ってはいかんことになっとるのを知らんのか？」
「あ、すいません」
サトシは、あわてて飛び退いた。

「ん？　お前さんは、ピカチュウを持っていたぼうやじゃな」
それは、ポケモンセンターの片隅に座っていた老人だった。
「どうしてオレのことを？」
老人は、よろよろと立ち上がりながら言った。
「ポケモンセンターのカウンターで、あれだけ騒いでいれば、誰にでも目に付く。ニビジムでは、さんざんだったようじゃな」
サトシは、くちびるを嚙みしめた。……ろくにつきあったこともない、こんなおじいさんにまで言われたくない。
「オレ、急いでいますから」
サトシは、老人を無視して歩き出した。
「待ちなさい。わしとて、何度もニビジムに挑戦した。一度も勝てなかったがな」
「え？」
サトシは振り返った。
「……こっちに来るがいい」
老人は、部屋の隅にある陳列ケースの前にやってきた。
ガラスケースの中に、石ころが飾ってあった。
「雷の石」と書かれてある。
別に雷のように光っているわけでもなく、どこにでもありそうな石だ。

「ただの石に見えるが、これは雷の落ちた場所から、見つかる石でな、この地球で、ほかに同じ成分を持った石はない」

……その石が、どうしたというんだ。今のオレとなんの関係があるんだ。

サトシはわけがわからなかった。

老人はかまわず話し続けた。

「おそらく、雷の電気エネルギーが、前々からそこに転がっていた普通の石の成分を、変化させてできたものだろう。だからといって、さほど珍しい石ではない。雷なんぞは、夏ともなれば、いくらでも落ちてくるものだからな。その気で見つけようとしたら、この石など、ここに陳列(ちんれつ)しておくほど珍しいものでもなんでもない」

……珍しくなければ説明しなければいいのに……。

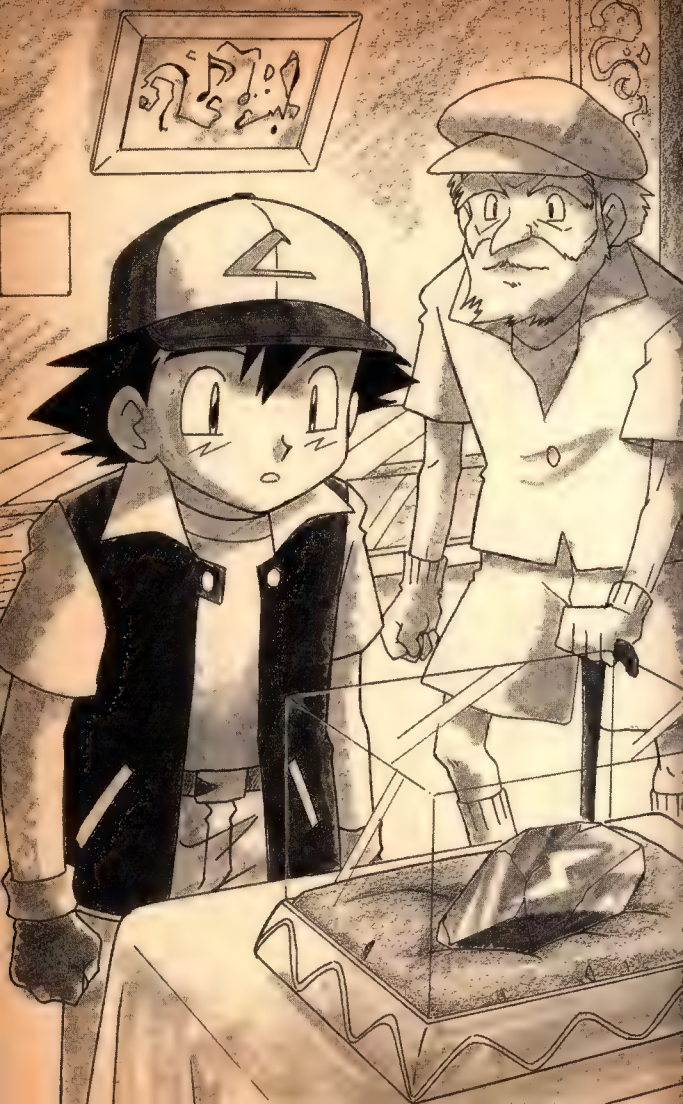
「だったら、オレ、先行きます」

「まあ、待ちんしゃい。最近は話し相手もいなくてのう。も少し相手をしてくれんか……この石はのう。雷の石と呼ばれるくせに、別に電気を持っているわけでもない……なんの役にも立たないちっぽけな石じゃ」

サトシは、じりじりしてきた。

だが、老人のひとことが、サトシの気持ちを変えた。

「……この石には、ある種類のポケモンを進化させる力がある」

「進化？」

サトシは思わず聞き返した。

進化……その言葉にはいろいろな意味があるが、ポケモンの進化といえば、力が強くなってある時期になると、別のポケモンに変わることだ。

たとえば、いもむしポケモンのキャタピーが、さなぎポケモンのトランセルになり、ついには、バタフリーになったように……旅に出てわずかの日数しかたっていないサトシですら、目の前で経験したことだ。

そして、今、サトシがいちばん強くさせたいポケモンは、なにかと聞かれたら……決まっている。

「この石で進化するある種のポケモンって、まさか……」

老人はうなずいた。「ピカチュウはこの石で進化する」

「ピカチュウが進化し……ピカチュウが進化し……ピカチュウ、進化する……ピカチュウ、進化するとき、ピカチュウ進化すれば……ピカチュウ、進化しろ……」

サトシは、呪文のようにつぶやいた。

……ニビジムのイワークに勝てるかもしれない。この石があれば……

サトシの目が輝いた。

だが、すぐにため息をついた。……まさか、このケースをこわして盗むわけにはいかないし……。

老人は、サトシの気持ちを見すかしたように言った。

「雷の石はどこにでもある……この博物館の出口のおみやげショップにもな。キーホルダー、ペンダント……琥珀のおみやげなんぞに比べたら百分の一もしない」
「ありがとう。おじいさん」
サトシは、今すぐ、おみやげショップへ行こうとした。
「待たんかね」
老人はのんびりした声で呼び止めた。
「おみやげショップで買わんでもわしが持っている。あげるよ」
ポケットから、小石を出してサトシに見せた。
「探せば、どこにでも転がっている石だ」
「いいんですか？」
「わしは今までピカチュウをゲットしていない。小石の持ち腐れじゃ」
「あのう、お金は、おいくら払えば」
「いらんよ。ただでいい」
母のハナコからいつも言われている言葉がある。……ただほど高いものはない……ただの接待、予約絶対……（ただで相手からごちそうされたときは、必ず、こちらも相手に約束しなければならないことができる……結局、ただでしてもらうことは、高くつくことになる）。
だから、聞いた。
「おじいさん。どうして、見ず知らずのオレに……」

「わしは今まで、三度、ニビジムに挑戦した。今回、四度目の挑戦のつもりでここに来たが、今回は、どうやら、あきらめねばならぬようじゃ。こんなわしには、ぼうやが人ごとに思えんのじゃ。わしの代わりになってニビジムのバッジを手に入れてくれれば、わしもうれしい」
サトシは、老人からもらった小石を握りしめて言った。
「おじいさん。オレ、マサラタウンのサトシ……オレ、おじいさんの分もがんばるよ」
老人は、マサラタウンの名前を聞いて、ひくっとまゆを動かした。
「マサラタウン……すると、ぼうやも、この街のジムが最初の挑戦か……」
「どうしてそれを？」
「マサラタウン出身のトレーナー志望は、だいたいこの街を最初に目指す。わしもそうじゃった」
「おじいさんもマサラタウンの人なの」
「ん？　いや、遠い昔に通りかかったことがある。小さな町だが、一軒だけ食堂があっての」
老人は、遠い昔よりも遠くを見つめる目だった。
「今も一軒だけだけど……」サトシは答えた。
「あすこの女将（おかみ）さんは、美しい人じゃった」
「おかみさん？」

「奥さんのことじゃよ」
……ママのことか……このおじいさん、ママを知っているのかな。
「美しいかどうか知りませんけど、元気でいます」
「うん。うん。で、お子さんは元気かな」
「え？　お子さんって　オレのこと？　マサラタウンの食堂ってオレんちだけど」
「え？　え？　え？」
老人は、ため息と驚きの混じったような声を、三回もらした。
「馬鹿な……あそこの娘は、かわいい女の子だと噂に聞いたが……」
「オレ、女の子に見えます？」
「いかにわしが、歳を取ったとはいえ、ぼうやが女の子に見えるようだったら、もはやお墓に入ったほうがまし……そうか、この街は、墓石が名物だったな……」老人はがっくりうなだれた。
「勝手にがっかりしないでください。オレ、ママの一人息子だし、ほかに女の子の兄弟なんていないよ」
老人は、サトシをまじまじと見つめて言った。
「ぼうや。いくつかな？」
「十歳……」サトシは答えた。
「十歳……」老人はサトシの歳をくり返してから……「そうか、そうじゃよな。……わしが、

マサラタウンにいたのは六十年以上も昔……ふぉっほっほ……」
老人は、笑った。さびしそうな笑い声だった。
「六十年前の女が、十歳の子を生むわけがない……ぼうやは、その人の孫か、ひ孫か、ひ孫の子かもしれんな。その子が、男の子であっても、ちっとも、不思議ではない」
「はあ、ってことは……おじいさんは、オレのおばあさんか、ひいばあさんか、ひひばあさんを知っているわけ？」サトシが、聞いた。
老人は、むっとした顔で、言い返した。
「ヒヒばばあではない。ひいひいばあさんだ。いずれにしろ、ぼうやはあの人の血を引いているわけじゃ。だったら……ふーっ」
老人は、大きなため息をついた。
「だったらなんなの？」
「もう少し、ぼうやは、頭のよさそうな顔をしていてもいいはずじゃがな……」
「……ほっといてください。オレ、行きます。オレ、早くピカチュウをライチュウに進化させたいんだ」
「ちょっと待て……」老人は、サトシをもう一度止めた。
「まだ、何か？」
「ぼうやが、あの食堂の子だとしたら、わしも、まんざら知らん仲でもないということになる。だから、もうひとつ忠告をしておこう。たぶん、雷の石は役に立たんよ」

「え？　じゃあこれ、にせ物なの？」サトシは、小石をまじまじと見直した。
「にせ物ではない。しかし、ピカチュウをライチュウに進化させても、ニビジムの戦いに勝てる見込みはない」
「どうしてだよ。ピカチュウはライチュウになって強くなるんだろう？」
「強くなっても、ピカチュウ、ライチュウの属性は電気系だ。電気系は岩系に弱い。いうまでもなく、石の街のニビジムのポケモンは岩系じゃよ」
「ピカチュウは強くなっても勝てないっていうの」
「負けないかもしれない。しかし、勝てもしないじゃろう。ぼうやは水系のポケモンは持ってはいないのか？」
「水系？」サトシは聞き返した。
「水の一滴は小さいが、ぽつりぽつりと何年も続けば、やがて、石に穴を開け、岩をも崩す。コイキング、恋の涙も、百年泣けば岩に穴……という」老人が、古いことわざをつぶやいた。
「なにそれ？」サトシは聞き返した。
「コイキングは、なんの力もない、役立たずと呼ばれて、嫌われている弱いさかなポケモンじゃ。恋をしても、女の子は誰も相手にしてくれんじゃろう。でも、そんなだめな奴でも、百年も愛し続けていれば、岩のように固い女の子の心を溶かすことができる。つまり、水は岩に強いということじゃ」
　聞けば聞くほどわけがわからなくなってくる。

「おじいさんの言っていること、よくわかんないけど……つまり、水系のポケモンなら、岩系のポケモンに勝てるってこと？」
「……かもしれない。勝負には絶対はないからの。しかし、電気系のポケモンを使うよりははるかにましじゃ」
「水系のポケモンかあ……」
いうまでもないが、ピカチュウのほかにサトシが持っているポケモンはバタフリーとピジョンだ。チョウチョウと鳥の違いがあるにしても、飛行系の二匹である。……陸地と空では、試合にならない。おまけに、万が一、重い岩系ポケモンに押さえ込まれたら飛ぶことさえできなくなる。そのとき、サトシの頭に、女の子の顔が浮かんだ。
「……あ、あいつ」
カスミのことだ。
サトシは、カスミが釣りが好きなこと、きんぎょポケモン、トサキントという水系のポケモンを持っているのを思い出した。
あいつなら、強い水系ポケモンを持っているかもしれない。
いや、せめて、水系ポケモンについて何か教えてくれるかもしれない。
だが、サトシは首を振って、カスミの顔を、頭の中から消した。……あいつの世話なんかになるもんか。自転車のことでも、これだけつきまとわれるんだ。頼みごとなんかしたら一生、恩に着せられるぞ……

「あら、こんなとこにいたんだ」
琥珀に見とれていたカスミが追い付いてきた。
サトシはカスミを無視して、老人に言った。
「勝負に絶対はないんだよね……だったら、オレ、電気系にこだわってみる。じゃあ」
サトシは、走り去った。
「なんだあいつ？」カスミは肩をすくめた。
「あんたぼうやのなんなんじゃ？」老人が聞いた。
「はあ？」カスミが聞き返す。
「たとえば、ガールフレンドとか許嫁とか」
「いいなずけ？」カスミが聞いたことのない言葉だ。
「つまり、結婚を約束した仲だとか……」
「結婚……！　わたしまだ十歳ですよ」
「じゃが、二人は、われなべにとじぶた。ニドリーナにニドリーノに見えるがな」
「はあ？」なんのことかわからない。
ニドリーナとニドリーノはどくばりポケモンの、仲のいい雄と雌の名だ。
「つまり、ぼうやとお嬢さんは、なかなか似合っとる」
カスミの顔が真っ赤になった。照れているのではない。怒ったのだ。
「じょじょじょじょ……冗談じゃないわ。誰がそんなスキャンダルを……あ、あいつね。あ

いつが言ったのね」カスミは老人に食ってかかった。
「いや、ただ、わしは、二人の仲がよさそうだったので……」
「許しません。絶対そんな結婚。親が許しても、本人のわたしが許しません……許さないわ。サトシ！　待てっ！」
カスミはサトシを追って走っていく。
取り残された老人はつぶやいた。
「サトシというのか、あのぼうや……まっこと、女の子に追われるうちが花じゃ。だが、逃げまくっていると、いつか誰も追ってこなくなる。気がつけば、花も枯れ、恥ずかしくてふるさとにも戻れない。そして、いつまでも昔を引きずって歩かねばならん」
この老人が、サトシの母の食堂、マサラタウンハナコに何かの関係がある人だとしても、……仮に、サトシのひいひいおじいさんだとしても、もう二度と老人は、サトシの前に現れるつもりはないだろう。
この国では、親と子の関係はあっても、子供が独立して家を出れば、別々の生き方をしてあたりまえだった。
この国でいちばん大切な人間関係は、妻と夫の夫婦の関係だ。親子関係や兄弟関係よりずっと大事と思われている。
だから、もしも夫婦が離婚や家出で別れたら、それは、人間関係のいちばん大切なものをこわして別れたことになる。

そんな犠牲を払ってまで別れた以上、別れる前の親子の関係や兄弟の関係が薄くなって当然だ。
サトシのパパもグランパ（祖父）も、ポケモントレーナーを目指し、家を出ていったきり帰ってこない。
ポケモントレーナーになることが、夫と妻といういちばん大切な関係を捨てるほど、魅力的なことかどうかはその人次第だ。
だが、サトシのパパとグランパのやったことを、ひいおじいさんがやっても、不思議ではないし、同じようにひいひいおじいさんが、マサラタウンから出ていったとしても、仕方ないのかもしれない。
そんなひいひいおじいさんが、いたかどうかは、たぶん、ママのハナコも知らないだろう。
けれど、それを知っても、……家系は争えないわね……家計が大変なのは女の人だけど……と言って肩をすくめるだけだろう。
この世界では、夫だって、妻だって、子供だって、家庭から旅立って一人歩きを始めたら誰も文句は言わない。
そのかわり、夢が破れて、家庭に戻ってきても、もう、自分の居場所は残っていないだろう。
一度、一人歩きを始めたら、自分の責任は自分で取らなければならない。
それが、この世界の不文律（ふぶんりつ）だった（不文律とは法律に書かれていない約束事のこと……た

とえば、ナイフで人を傷つけてはいけない。学校でいじめをしてはいけない……こんなことは法律に書いていなくても、人間として生きていくならあたりまえの約束である)。

だから、ポケモントレーナーになると言って出ていった以上、トレーナーになれずに家に戻ってくることは、サトシのような初心者でもかなり恥ずかしいことだった。

まして、結婚していながら妻や家族と別れて出ていったトレーナー志望者だ。

一度、出ていった家や町に戻ってくることなど、ほとんどなかった。

だから、たとえ、この老人が、サトシのひいひいおじいさんだとわかっても、サトシにはなんの感激もないだろうし、むしろ、こんな老人にまでなって、まだ、マサラタウンの近くをうろついていると知ったら、がっかりされる恐れもある。

老人は、ため息をついた。

「こんな街には長居は無用じゃな。墓石を作ってもらうことはできても……それを埋める場所もない」

老人は、博物館の出口に向かってゆっくりと歩き始めた。

※

もっとも本当のところ……この老人が、サトシとどういう関係があったか、そのあとも、はっきりしたことはわからない。

ただ、その夜、老人はポケモンセンターに戻ってこなかった。

たとえ、戻ってきても、ニビジムで、戦うことはできなかった。

七十五歳以上の老人は、健康診断の結果が悪ければ、ジムに挑戦はできない約束事があった。

これも不文律だ。

ポケモンを指図するトレーナーに、年齢や健康が関係するのか？　……あるとき、七十五歳以上の政治家たちが、この約束事に文句を吹っかけ、国会が、もめたことがあった。

そして、国民投票の結果、この約束事は守られることになった。

健康状態が悪いと、老人はとくに気力が落ち、判断力が悪くなり、無謀な戦いをして、自分のポケモンや相手のポケモンにむだな傷を負わせることが多かったからだ。

老人になると、自動車の運転や、小さな画面のゲームがやりにくくなるのと同じだと、その当時いわれた。

だったら、十代前半の判断力のない無謀な若者に、自動車の運転や、ナイフを持たせていいのか？　という議論も起きたが……それは、また別の機会にお話ししよう。

※

「ピカ……」

次の日の朝……

ピカチュウは、揺りかごの中で、うっすらと目を開けた。

体が軽い。頰の電気袋も、空気中の自然な電気イオンを吸い込んで、充分回復している。

だが、軽く伸びをしたピカチュウは、次の瞬間、頰の電気袋にしびれるような刺激を感じた。

それは目には見えない波長だった。いやな感じではない。むしろ、甘く眠りを誘うような……自分を失ってしまうような快感があった。

だが、それだけに危険な予感のする波長だ。

この波長はどこから……？

ポケモンセンターのカウンターを見ると、サトシとジョーイが話している。

「この石が、本物なら、オレ、ピカチュウをライチュウに進化させたいんです」

サトシは、雷の石をジョーイに見せていた。

波長は、明らかにその石から伝わってきた。

ジョーイは、カウンターに置いてある小型の電子顕微鏡に雷の石を置いて、モニターを見た。

「確かにこれは雷の石だわ。この石をピカチュウの頰の袋に当てると、十秒でライチュウに進化できます」

「ほんとに、できるんですか」目を輝かせてサトシが聞いた。

「できます」ジョーイの顔は笑っていない。

「でもあなた、あのピカチュウとどのくらいいっしょにいるの……？　一カ月？　半年？

一年？」
「え？　あの……」
サトシは、少しだけ多めに言った。「一週間ぐらいかな？」
ジョーイはその嘘を見抜いていたが、それには触れずに言った。
「あまりおすすめはできないわ」
そして、サトシに何も言わせないように、早口で話した。
「この石があれば進化するのは簡単です……でもね、形や電気の力だけライチュウになっても、その力をうまく使いこなせなければ、かえって体に悪いの。ライチュウの力を使うには、ピカチュウのときに、それなりの成長と経験をしておいたほうがいいのよ。たとえば、ライチュウの電撃は、ときとして十万ボルトを超えるわ。でもね、いきなり十万ボルトを出したら、自分の電気で気を失ってしまうでしょうね。いえ、最悪の場合、心臓が止まってしまうわ」
「心臓が止まってしまう……？」
この言葉はサトシにずしりとこたえた。
「そう、この近くは石の産地でしょう。だから、雷の石も見つけやすいんでしょうね。このポケモンセンターにも、ピカチュウからライチュウになりたてで、心臓の止まった新米ライチュウがずいぶん運び込まれてきたわ。手当ては、電気ショックで心臓を動かすしかない。自分の電撃で心臓が止まり、センターの電撃で動かしてもらう。なんだかなあ……よね。ど

ちらも、体にはすごくきついわ。で、運よく生き返ったにしても、電撃が怖くなって、二度と使えなくなるライチュウが多いの」
「電撃が使えないライチュウ……」
「手術のできないお医者様よりはましかも……無理に手術すると人を殺してしまうもの。でもね、電撃が使えないのに、体には電気が必要なライチュウもそうとう悲しいわ。やがて、電気を吸うのもいやになり、体が電気を受け付けなくなる。こういうのを拒電症というの。元は、ふっくらしていた体が、がりがりにやせてしまう。ちょうど、そうねえ。ライチュウの体格って大きくしたピカチュウによく似ているわ。あなたのピカチュウがしぼんだ風船のようになった姿を考えられる?」
サトシはピカチュウを見つめた。
骨と皮のようになったピカチュウなど、見たいはずがなかった。
「それでもライチュウに進化させたい?」
そのときだった。
「話は聞いたわ。あきらめることね」
サトシの後ろからカスミがしゃしゃり出てきた。
「もともと、電気系のポケモンで、いわポケモンに勝とうとするのが常識外れなのよ。ジョーイさん。でんきポケモンで、ニビジムに勝てた人なんているんですか?」
「ほとんどいないわ」

「でしょう？　すると、ポケモンセンターはニビジムで負けたピカチュウやライチュウでいつもいっぱいってわけですよね」
「そんなこともないわ」ジョーイが答えた。
「もともと、でんきポケモンでニビジムにチャレンジする人は、ほとんどいないわ」
カスミが何度もうなずいて言った。
「なるほどね。戦うでんきポケモンがいなければ、ケガするでんきポケモンもいない。当然よね」
「わかったよ。ピカチュウをライチュウにするのは止める！」
たまらず、サトシは怒鳴った。
サトシは、揺りかごの傍にやって来て、ピカチュウの頭をなでた。
「いいよ。ピカチュウ。無理しなくて……お前はオレの最初のポケモンだ。大事に育てるぜ」
ピカチュウには、サトシの言葉の内容がはっきりわかりはしない。
あの甘い刺激を持った不思議で危険な石を使わないことはわかった。
昨日、負けた戦いをあきらめたこともわかった。
けれど、ピカチュウにとって、それはおもしろいことではなかった。
確かに、巨大なイワークを見せられたときは、逃げ腰になった。
けれど、数は多くなくても、今まで、いくつか経験した戦いで、危険はあったものの、電

撃で負けたことはなかった。
イワークのときも、電撃を使って負けたと自覚する前に、気を失ってしまった。野生のポケモンの多くは、一度負けた相手とは、勝つという絶対の自信がない限り戦おうとはしない。
だが、このピカチュウは野生育ちではない。
つい四日ほど前まで、マサラタウンの研究所で育てられた世間知らずだ。
しかも、なぜかモンスターボールに入ろうとしない、変わりものだ。
人に指図されることが嫌いで、負けず嫌いなのだ。
ここ数日の戦いで、自分は意外と強いという自覚があった。
それだけに、昨日の戦いが我慢ならなかった。
ポケモンにプライドのような感覚があるとしたら、ピカチュウはまだ、電気ネズミとしての誇りを捨てる気はなかった。
ピカチュウの揺りかごに、カスミもやって来た。
サトシのことはともかく、ピカチュウの具合は気になるらしい。……この、無鉄砲のくせに、鉄砲は数撃ちゃ当たる方式のぼうや……もしかして、ピカチュウを、また、イワークに挑戦させるかもしれない……と、でも思ったのかもしれない。
「あのさ、サトシ。ピカチュウの代わりに、わたしの水系ポケモン、貸してあげてもいいよ」
「誰が、借りるか!」サトシは叫んだ。

「どいつもこいつも、オレを馬鹿にしやがって……オレはオレのやり方でやる」
といっても、やり方があるわけでもない。
思わず愚痴が出た。
「あーあ、せめて、ピカチュウに水系ポケモンの力があったら……」
もう一度、書こう。ピカチュウはサトシの言葉の意味はよくわからない。だが、今のピカチュウに失望していることはわかった。
ピカチュウの頰にかすかに火花が散った。怒っていた。……そうか、このピカチュウがそんなにあてにならないというのか？　ならば、力を見せてやろうじゃないか……
「ピカ！」
ピカチュウは、するどく鳴いて、揺りかごから飛び出すと、ポケモンセンターの外に飛び出していった。
「あ……ピカチュウ。どこに行くんだ」
後ろをサトシが追う。
そのあとを、カスミが追った。
「待ちなさい。逃げる気？」
サトシを追うカスミのそれが最近の決まり文句だ。
ピカチュウはニビシティの表通りを走りながら、考えていた。
いうまでもなく、イワークに勝つ方法だ。

ピカチュウは今までの戦いを思い出していた。

嵐の大雨の中、襲いかかるオニスズメの群れをたたき落としたときのこと……トキワシティのポケモンセンターで、センターごと、ロケット団を吹き飛ばしたときのこと……どれも、ピカチュウの電撃がものをいった。だが、本来のピカチュウの電撃には、そこまで強い力はなかったはずだ。

何かがピカチュウの電撃に作用したのだ。

あのとき、ピカチュウの電撃に何がプラスしたのか……。

ピカチュウは表通りを曲がると、ニビジムの前にやって来た。

昨日と同じように、エプロン姿のタケシが門の前をホウキで掃除していた。

ピカチュウを見るとタケシはいかつい顔のわりには、人なつっこい笑いを浮かべて言った。

「あ、お前、昨日のピカチュウだな。その様子を見るとダメージはたいしたことなさそうだ。よかったな」

ピカチュウは、やさしい言葉をかけられても、タケシをじっとにらみつけている。

いかにも、挑戦的だ。

後ろからサトシとカスミもやって来た。

タケシは、ふっとため息をついた。

「また、やる気なのか?」

「え? オレは別に……」

サトシはあきらめる気だった。だが、ピカチュウを追ってきたらここに来てしまったのだ。
「少なくともそのピカチュウはやる気だね」
「そんなことがわかるの？」カスミが聞いた。
「ジムを長くやっているとね。相手のトレーナーのやる気より、そいつの持っているポケモンに戦う気があるのかどうかが気になる。昨日のピカチュウより今日のピカチュウはやる気満々だ。きっと体調がいいんだろう」
そして、タケシは、サトシとカスミに言った。
「ところで、君たちのお腹の具合はどうなの？」
「え？」
「昨日、キミは朝飯抜きだった。お嬢さんは、スクランブルエッグ。アンド、カフェ・オ・レ……シュガーレスだったよね」
どこからか、こうばしい香りがしてきた。
とたんに、サトシのお腹が鳴った。
香りに誘われて思わずカスミが言った。
「いえ、今日はまだ……わたしの自転車泥棒が、急に逃げ出したものだから……」
サトシが叫んだ。
「オレは逃げちゃいない！　ピカチュウが飛び出したんだ」
「まあ、まあ。事情は知らないけれど、朝っぱらから、ケンカをすることもないんじゃない

か。君たちがまた来るような気がしてね……今日は、みそ汁じゃなく、おいしいコーヒーを入れたんだ。パンはバターたっぷりのクロワッサンを焼いた……タマゴはプレーンオムレツ。サラダもたっぷり。お嬢さん好みのブレックファストだ。朝飯、食べていかないか」

「敵のオレにごちそうしてくれるって言うのか？」

「試合が始まるまでは敵じゃない。それに腹が減ったら、イライラしていいことないぜ」

タケシは、入れよとでもいいたげに、親指を立てて門の中を指さした。

「なんか調子、変だなあ」と首をひねりながらも、サトシとカスミはコーヒーの香りに誘われるように、ニビジムに入っていった。

ピカチュウだけが真剣な目付きで、今も勝つことを考えていた。

※

「ここが、台所……」

サトシとカスミは目を見張った。

タケシが台所と言った広間は、片隅に小さなキッチンセットのあることをのぞけばホテルの大宴会場のようだった。

広いテーブルがいくつも並び、一度に百人は食事ができそうだった。

「昔、この街は、石の街としてとても栄えていたそうだ」テーブルに案内しながら言った。

「当然、このポケモンジムにも人が集まった。ひいじいさんのころは、お弟子さんが何百人

もいたそうだ。おかげで、このジムは、とてももうかって、ほら、その証拠に、この建物は、石の街だというのに、全部、木でできている。石の街では、材木がぜいたく品ってわけさ」
　確かに壁も柱も天井も、ほこりこそたっぷりかかっていたが、よく見れば細かい彫刻をほどこされた木造建築だった。
「あんた、こんなジムのリーダーだったのか。偉いんだ」サトシが目を丸くして言った。
「ひいおじいちゃんのときまでさ。世の中で石が使われなくなってから、落ち目いっぽう。誰もいなくなった。今は、一カ月に一人か二人、キミのような、トレーナー志望が、チャレンジに来るだけ……残っているのは、ぼろぼろで、押せば倒れそうな木の建物と室内グラウンドだけさ」
　天井には木造建築には似合わない鉄の管が、網の目のように張りめぐらされている。
「あれは何かの飾り？」天井を見上げているカスミが聞いた。
「あれは火事を防ぐ水道管さ。百年ほど昔に、ニビシティで大火事が起きてね、木でできた建物が、ほとんど焼けたらしいんだ。……木は火事に弱いからね。それ以来、この街の木造建築には、消火用のスプリンクラーが義務付けられたんだ………昔からできあがっている天井にあとから付けたから、見た目はみっともないけど、火の用心のためだ。仕方ないよね。それに、こんな使い道もあるにはあるんだ」
　タケシは、広間の中央に立っている大きな柱を人さし指で押した。
　ぐいーん……

不気味な音を響かせて、天井や壁がゆっくりと揺れた。
天井を駆け回るスプリンクラーの水道管がねじれる。
しゅーっ……
水道管のつなぎ目のいたるところから、霧のような水がもれた。
が、天井が元に戻ると、つなぎ目がぴったり戻り水もれが止まる。
「乾燥した日なんか、たまにこうやると、建物の中が適当に湿って、木にはいい。ちょっとした加湿器代わりさ」
「わっ……今の、本当に倒れそうだったわ」カスミがすくみ上がった。
「だいじょうぶ。こうやって揺れるから、地面の振動を吸収して、地震が起こっても、ほかの石の建物のように倒れずにすんでいる。でも、いつまで建っていられるかなあ」
タケシは肩をすくめてから、広間の向こうに声をかけた。
「さあ、みんな、今日の朝ご飯はお客さんつきだよ」
タケシの声を合図にしたように、ぞろぞろと子供たちが出てきてテーブルに座った。二十一人いた。
「いいか、九歳以下はコーヒーはまだ早い。ミルクかイチゴジュースだ」
「いただきまーす」
子供たちは食べ始めた。
「サラダも食べなきゃだめだぞ。栄養、考えているんだからね」タケシが子供たちに言った。

「あのう、お弟子さんが集まらないから、保育園でもはじめたんですか？」カスミが聞いた。
「みんな、自分の弟や妹です。十五歳がいちばん上で、三歳まで二十人います」
「なんだか計算が合わないけど」カスミが指を数えながら聞いた。
「ふたごが、八組……父親も九人違う」
「どういうこと？」サトシにはさっぱりわからない計算だ。
「オレの母親が、このジムの跡継ぎだったんだ。このジムを続けるために、ジムリーダーの資格のある人と、次々と結婚しちゃ逃げられて……とうとう九人。逃げたくなるのかなあ？こんなに子供が増えだしてくると……みんなかわいい奴なのに……オレにはわからないけどね、で、オレがジムリーダーの資格を取ったら、今度は母親が書き置きを残して家出しちゃった」
「あらま……」カスミが思わずつぶやいた。
「書き置きにはこう書いてあった。跡継ぎはたっぷり残しました。わたしの役目は終わりましたので、今後は、わたしだけの人生を楽しもうと思います。だってさ」
「苦労したんだ」サトシとカスミが同時に言った。
「うん。母はとっても苦労したんだ」タケシがうなずいた。
「お母さん（ママ）じゃなくて、あなた（あんた）が……」サトシとカスミがハモって言った。
「オレは苦労じゃないです。子供を育てるのは嫌いじゃないですから。ただ、本当は、いろ

いろな人が研究して育て方がある程度わかっている人間より、わからないことの多すぎるポケモンを育てたい。育て方の勉強がしたい。それが、ちょっと残念かな」
食事はおいしかった。一人っ子のサトシには、学校の給食ではない、家族の朝ご飯が楽しかった。
子供たちの間に笑い声が飛びかった。
だが、ピカチュウはその間も、考え込んでいるようだった。
イワークに勝つ方法に違いなかった。
そして、サトシとピカチュウがニビジムに再挑戦する時間がやって来た。

※

「弟や妹の食事の相手をしてくれてありがとう。だが、ジム戦の勝負は別だ。手を抜くつもりはないからそのつもりで……」
タケシの顔から微笑みが消えた。
「望むところだ！」サトシも叫んで答えた。
しかし、内心では少しだけ思っていた。……本当は勝ち目のない勝負なんて望んでいない。でも、ピカチュウはやる気で燃えている……オレもやるしかない。
カスミにも、どちらが勝つかの見当はついていた。
ピカチュウに応援したかった。でも、タケシや子供たちと食事をしたあとは、タケシにも、

応援したかった。
　だから、ポケモンに神様がいるのなら、心の中でお願いしたかった。……どうせピカチュウが負けるにしても、どうか、昨日の試合のようにケガがありませんように……と。
「いけっ！　ピカチュウ！」
　サトシの声が室内グラウンドの木の天井に響いた。
　ピカチュウは、タケシめがけてまっしぐらに駆けていく。
「受けて立て！　イワーク」
　タケシがモンスターボールを投げた。
　イワークが飛び出した。
　客席の子供たちが歓声を上げる。
「ピカチュウ、電撃だ！」サトシが叫ぶ。
　いわれるまでもない。ピカチュウの体から、昨日一日中眠って休養たっぷりの電撃がほとばしる。
　しかし、巨大な体にまんべんなく電撃を浴びても、イワークはびくともしない。数珠（じゅず）つなぎの岩のしっぽが、ピカチュウを狙って打ち降ろされていく。
　ピカチュウは、今こそフットワークも軽くかわしているが、電撃が通用しないのでは、やがて疲れるのも時間の問題だ。
　しかし、ピカチュウがイワークに電撃を浴びせたのは、ある種の確認にすぎなかった。

……やはり、電撃はイワーク本体には通じない。……だったら……
ピカチュウは動きを止めた。
イワークのしっぽが頭上から迫る。
「ピカチュウなにをしている！　逃げろ！」サトシが叫んだ。
しかし、ピカチュウは動かない。そして、頰の電気袋を思いっきりふくらませた。
電撃を放つ。
だが、それは、襲いかかってくるイワークに対してではなかった。
電撃の焦点は、イワークの向こう、天井のランプだった。
ランプに当たらなければ、ほかの電気設備のあるところでもよかった。
電気の通っているところなら。
イワークのしっぽが、ピカチュウの頭上に叩き付けられる瞬間、ピカチュウは飛び退いた。
電撃は止めない。
天井に、壁に、ピカチュウの電撃がはじける。
電撃は、サトシやカスミの頭上もかすめる。
「わーっ！　ピカチュウ、目標を見定めろ！　むだな電気を使うな」
「ヤケになっちゃったの。さっき、おいしいクロワッサン食べたけど、わたしがトーストなんかになりたくない」
頭を抱えてしゃがみ込んだカスミがぼう然としてつぶやいた。

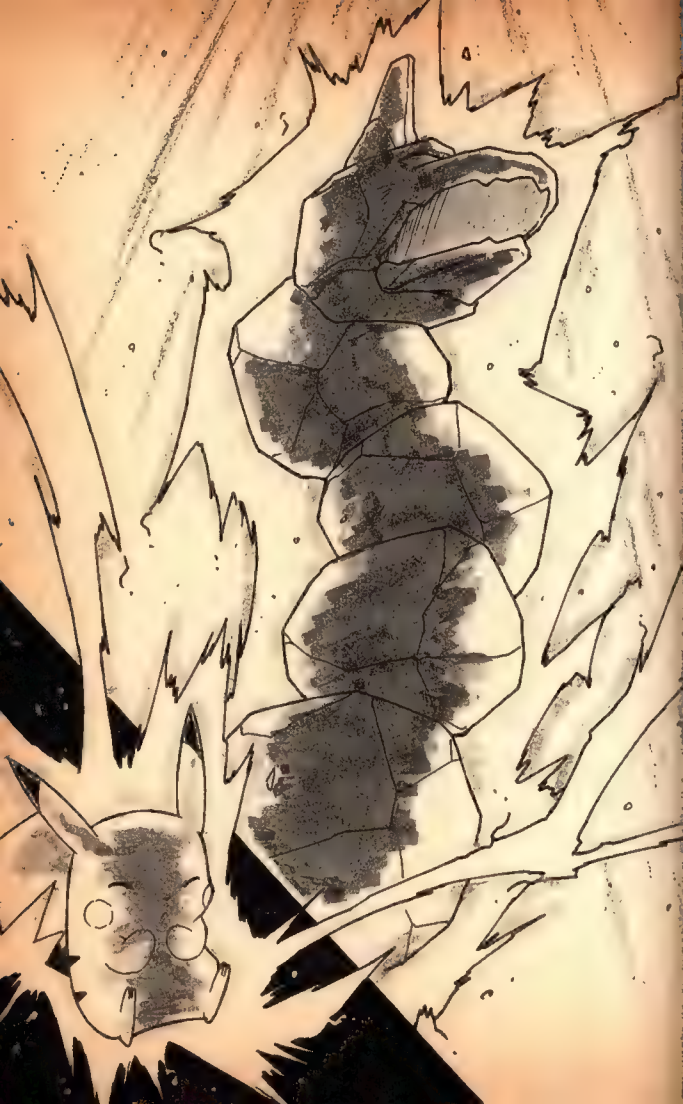
「かわいい子の焼いたトーストなら、ぜひいただきたいが……」タケシが言った。
電撃はタケシや観客席の子供たちの頭上にさえ、降りかかった。
さすがにタケシはあわてた。
「やめろ。サトシくん。ピカチュウに電撃を止めさせてくれ」
いわれるまでもない。ピカチュウの相手はイワークだ。
サトシは叫んだ。
「ピカチュウ！　落ち着け！　オレの言うことをよく聞け！　止めろ！　相手をよく見ろ！」
ピカチュウは、電撃を止めない。
「聞こえないのか！　ピカチュウ！　切れないでくれ！」
ピカチュウにサトシの声が聞こえないわけではなかった。
別に、切れたわけでもなかった。
しかし、自己防衛の意識と、相手に勝ちたい意識が、このむちゃくちゃな電撃を止めさせなかった。
……どうしようもないな……
タケシが、首を振ってサトシに言った。
「トレーナーの言うことを聞かないポケモンなら……悪いが、サトシくん。こちらも防衛のためだ」

「え？」
「イワーク、全力で戦え。手加減するな」
「手加減だと！　今までのは手加減だったのか！」サトシは叫んだ。
「ジムはチャレンジャーの実力を見て、相手に応じた戦いをする。チャレンジャーのポケモンをむだに傷つけたくないからだ。だが、キミのピカチュウはチャレンジャーとはいえない。トレーナーの言うことを聞かない乱暴狼藉ポケモンだ。危険な乱暴ポケモンはどんな手を使ってでも追い払っていい」
「オレのピカチュウが乱暴ポケモン……？」サトシは立ちすくんだ。
返す言葉はなかった。
よく考えてみれば、今までピカチュウが、サトシの命令を素直に聞いたことはなかった。
今まで、ピカチュウとともに、危険をくぐり抜けてきて、その結果がよかったから、気にならなかったが、モンスターボールに入らないこと自体がトレーナーの言うことを聞かないポケモンの証拠のようなものだ。
いっしょにいるからといって、けっしてカスミとサトシが仲がいいとはいえないのと、同じかもしれない。……だからって……オレのピカチュウはオレのポケモンだ……。
「ピカチュウ！　よせ！　勝手はやめてくれ！」サトシは叫ぶしかない。
「イワーク！　乱暴者をたたき出せ！」
数珠つなぎのヘビのようなイワークは鎌首を持ち上げ、口を開けた。

へビなら相手必殺の体勢だ。
マングースとコブラの対決なら絵になるが、体長八メートルを超えるイワークと、背丈四十センチのピカチュウでは、絵を描くにも構図に困るだろう。イワークの大きな口の中に、ピカチュウなら五匹は入りそうな差があるのだ。
「ピカチュウ、逃げろ！」サトシは、もう、それしか言えなかった。
しかし、ピカチュウは電撃を続ける。相変わらずその標的はイワークではない。
天井のランプが次々に火花を放って割れる。
グラウンドの配電盤がはじける。
一瞬、グラウンドが暗くなる。
停電……？
かすかに、明るい場所が見える。
グラウンドの配電盤だ。
火花を散らし、かすかな炎を出して燃えている。
「なに？」タケシのうめきのようなつぶやきが聞こえた。
ピカチュウはその炎に向けて電撃を集中させた。
トキワシティのポケモンセンターで、どくガスポケモン・ドガースを爆発させたのは、火花と炎だった。電気は、火花を呼び、火花は炎を呼ぶ。
ピカチュウは体験で学習したことを忘れていなかった。

配電盤のコードが燃え上がる。
警報が鳴る。
火災警報だ。
次の瞬間、天井のスプリンクラーから、水が吹き出す。
一カ所だけではない。次から次へと天井すべてのスプリンクラーが水をまき散らす。
あっという間に、サトシもピカチュウもイワークもタケシも、グラウンドのすべてがびしょぬれだ。
ピカチュウの体を、今にも口の中に入れようとしていたイワークの動きがぴたりと止まった。
イワークの体に、降りかかった水がしみていく。
数珠つなぎの体の継ぎ目にも、大きく開けた口の中にも、水は入り込んでいった。
「しまった！　イワークは水にもろい」
タケシの声が、いささかあわてていた。……しかし、それだけでイワークは倒れない。動きが鈍くなるだけだ……だが……
タケシは、ピカチュウを見つめた。
ピカチュウは、イワークをにらみつけている。
そして、頬の電気袋が次第にふくれていく。……大雨の中……ピカチュウが空を覆い尽くすようなオニスズメの群れをたたき落としたのは、雷の電撃を誘ったこともあったが、雨が、

電気の通りをよくしたからだ。……理屈はわからない。だが、ピカチュウは、水に対する電撃の有効さを知っていた。
ピカチュウは一度体験した学習を忘れるようなポケモンではなかった。
いや、ほとんどのポケモンは、身をもって学習したことをめったに忘れない。とくに、危険な目にあったときの学習は、絶対忘れない。
生き物の中で忘れることができるのは、人間だけの特技かもしれなかった。
ピカチュウは、イワークの口の中めがけ、全精力をふりしぼった電撃を放出した。
イワークの頭から、しっぽまで、青白い光が走った。まるで、レントゲンで見るヘビの体のように、暗闇に、イワークの内部が浮かび上がった。
骨は見えなかったが、ところどころ、細かい筋のようなものがことさら白く光っている。
岩の中には、電気を通す物質と、通さない絶縁物質が交じりあっている。
白く光っているのは、電気を通す部分だ。そして、イワークの体にしみこんだ水が、絶縁物質に電気を通じさせた。今や、イワークの体の頭からしっぽまでが、電気の通る道だった。
ピカチュウの電撃が、電気の通る道をあっという間にかけめぐった。
イワークは数珠(じゅず)つなぎの糸が切れた首飾りのように、一瞬ばらばらになりかけたが、かろうじて元の体に戻り、グラウンドに倒れた。
イワークに立ち上がる力はなかった。
タケシはぼう然と立ちすくみ……立ちすくんでいるのはサトシもカスミも観客席の子供た

ちも同じだった。
少しだけ、イワークを倒した電撃がもれだしたのだろう。
誰の髪の毛も一本一本が逆立って(さかだ)いた。
火の気が消えたのか、スプリンクラーの水が止まった。
「イワーク!」
タケシが髪の毛からしたたる水をぬぐおうともせずイワークに駆け寄った。
ポケットから聴診器を出し、数珠(じゅず)つなぎの五番目の岩あたりに当てた。
そして、ふーっと息を吐いた。
「よかった。命に別条はない」
「だいじょうぶかい?」サトシが聞いた。
「しびれているだけだ。明日の朝まで物干しで干して、水気が抜ければ元に戻るだろう」
「ごめんよ。火事まで起こしそうになっちゃって……」
「負けたよ、見事な作戦だった……」タケシが言った。
「作戦?」サトシが聞き返した。
「ピカチュウを乱暴ポケモンに見せかけて、岩系ポケモンに弱点の水をかけた。そして、本来は不利である電気系ポケモンの能力を十二分に引きだした」
「あれは、単なるアクシデントだよ」サトシは頭をかいた。
「謙遜(けんそん)するな。与えられたグラウンドの条件を目一杯活用する。教えられたよ。木の建物を

守るつもりのスプリンクラーが、岩系ポケモンの弱点になろうとは、今の今まで気がつかなかった」

タケシはポケットからグレー色をしたバッジを出した。

「これを持っていけ」

「これは？」

「ジムリーダーを破った証拠のバッジだ」……のどから手が出るほど欲しいバッジだった。

だが、やせがまんもサトシの性格だった。

それに、これが勝利だとしたら、ピカチュウの勝利であって、なんの指示もできなかったサトシが勝ったと喜べるものではなかった。

「あれは、あくまで、アクシデントだよ。オレ、勝っちゃいない。次のチャンスに正々堂々と勝ってやる」

……かっこつけちゃってまあ……これじゃあ、一生、バッジは無理ね……

カスミは、口に出かかったセリフを、やっと我慢した。

水が降りかかった勝負に、これ以上、水を差すこともないと思ったのだ。

「本当にあれはアクシデントだったのか？」タケシが聞いた。

「ああ、オレは予想もしなかった」

「それ、困るよ」

いきなり、タケシの後ろから男の子の声がした。タケシとひとつ違いの少年だ。

「兄ちゃん。兄ちゃんは負けたんだ。同じ町から来た奴に四連敗。ジムリーダーとして失格だ……こんな兄ちゃんに、このジムを任せておくわけにはいかない」
「次郎、お前……本気でそういうのか？」
次郎と呼ばれた少年はうなずいた。
「こんな弱い兄さんにはついていけないよ。なあ、みんな」
次郎が、子供たちに聞いた。
「そうだ。そうだ。そうだよ」
なんだか、芝居がかったわざとらしい声で子供たちが口々に言った。
「このジムのリーダーは、オレがやる。お兄ちゃんは、どこにでも消えてくれ」次郎が言った。そして、少しだけ、鼻をぐしゅんと鳴らした。
「オレを追い出すというのか」タケシが聞いた。
「そうだよ。兄ちゃんは修業をしなおすのもいいし、兄ちゃんが好きなポケモンの研究をするのもいい。このジムはおれたちに任せろよ……そのためにも」
次郎は、タケシの手にあったグレーバッジを、サトシにつきだした。
「このバッジを受け取ってくれ」
「え……」
「受け取って……受け取って……受け取ってください」
子供たちがすがるようにいった。

「受け取れって言ったって、タケシさんはオレに負けちゃいない」サトシは首を振った。
次郎がタケシに言った。
「兄さん、負けたと言って。オレたち、兄ちゃんに充分世話になった。もうだいじょうぶだ。兄ちゃんにはこれから先、好きなことをしてほしいんだ」
「お前たち……すまん」タケシは細い目をもっと細めた。少しだけ涙がにじんでいた。
「だけど、次郎、本当にだいじょうぶなのか？」
「オレがだめになったら、三郎がいる。な、三郎」
「任せてよ。兄ちゃん」
三郎と呼ばれた少年がうなずいた。
「三郎ちゃんがだめになったら、わたしがやる」
長女のタケコが、にっこり笑った。
「二十人もいるんだ。当分、だいじょうぶさ」次郎が言った。
「最後になったら……」三郎が言った。
三つぐらいの女の子が、ちょこちょこと出てきて、言った。
「わたち、つよいひと、おむこさんにもらう。だから、だいじょうぶ」
「わかったよ。お前たち……」
タケシは、ぐしゅんと鼻をかんだ。そして、サトシに向き直った。
「サトシくん、オレの負けだ。バッジを受けてくれ」

「だから、オレ、勝ってないって……」サトシは手をひらひらさせて断った。
子供たちは困りきった表情だ。
「サトシくん……」後ろからカスミの声がした。
「ん？」振り返るサトシの頬（ほお）に張り手が飛んだ。
「いいかげんにせんか！」
「なにすんだよ」
「こっちへ来い！」
カスミは、サトシを引きずるようにしてグラウンドの隅へ行った。
「あのコたちは、今まで苦労をかけたタケシさんを自由にしてやりたいのよ。そんな気持ちもわからないの？」
「そうだったの？」
「あんた、ポケモントレーナーを目指してんでしょう？　あの人たちの気持ちもわからないようじゃ、ポケモンの気持ちなんて、とうていわからないわ。こんなことじゃ世界一のポケモントレーナーなんて、なれっこないわ」
「お前から、そんな説教、言われたくないわい」
「お説教じゃなくて、じゃあ、わたし、お願いするわ。サトシくん、バッジを受け取ってあげて……みんな、それを望んでいるの」
「そうか？……みんなが望んでいるんじゃ、しょうがないかな」……バッジが欲しい気持ち

も、確かだし……
サトシはタケシに言った。
「グレーバッジ……ありがたく、ゲットさせていただくよ。ほんと、ありがとう！」
「わーっ」子供たちが歓声を上げた。
これが、勝ちだとしたら、勝った相手の兄弟からこんなに喜ばれるなんて……なんだか、変な気分だった。
そして、ふっとピカチュウを見た。
ピカチュウは、人間たちのことなど、まったく気にせずに、濡れた体をぶるぶる震わせて、水気を取っている。
そして、サトシの視線に気がついて、振り返ると「ピカチュウ！」と一言鳴いた。
まるで……ゲットだぜ……といっているようだった。
サトシの……ゲットさせていただくよ……より、よっぽどすっきりした鳴き声だった。
サトシは思った。
スプリンクラーの水は本当にアクシデントだったのだろうか？
それとも、ピカチュウが計算してやったことなのか？
ピカチュウはそれに答える人間の言葉は持っていなかった。
それに、ピカチュウにとっては、計算であろうが、アクシデントであろうが、本当はどうでもよかった。

イワークに勝てたこと。その喜びと興奮で満足だった。

※

その夜も、ニビシティのポケモンセンターに泊まったサトシとカスミは、次の日の朝、ポケモンセンターの朝食……カスミは、カフェ・オ・レとバターたっぷりのトースト……サトシはノリと卵つきの納豆定食……をたっぷり食べていた。
ピカチュウも、たっぷり眠って、電気充満していた。
サトシとカスミはジョーイに別れの挨拶をした。
「お礼はいらないわ。これがわたしたちの一族のお務めですもの。次の街のジョーイに会ったらよろしく言っといて。どこの街のジョーイもわたしほどは美人じゃないけど、そこそこ、かわいいから、すぐわかるわ」
同じ一族とはいえ、どこの街のジョーイも、お互いをかなり意識しているらしい。
センターを出る前に、門の側の公衆電話に気がついたサトシは、マサラタウンの母ハナコに電話をしてみた。
留守番電話だった。
きっと食堂のキッチンで昼定食の仕込みの最中なのだろう。
調理の時間に手を抜かないハナコは、仕事中には絶対電話には出ない。
「ま、いいか……」

留守番電話は、ハナコが元気に働いている証拠だといっていい。
サトシは、安心して受話器を置いた。
少し離れて、カスミがそんなサトシを見つめていた。
「お母さんに電話か……ふん。いまだにおむつの取れないぼうやなんて、気持ち悪い……」
と、つぶやきながら、カスミの目はさみしげだった。

※

昼定食の仕事が、一段落したハナコは、留守番電話のボタンを押した。
「ママ……なにやら、かにやらあったけど、ニビジムのバッジはゲットした。じゃあ、また」
電話の向こうのサトシは、照れ臭そうにそそくさと電話を切った。
いたずらを見つかったときのサトシと同じだ。
「そうとう、なにやら、かにやらあったのね……」
ハナコは微笑(ほほえ)んだ。
学校のかけっこで、小学校を通じてたった一度だけ一等になったときも、わずか十〜二十秒ほどの五十メートル走の様子を、興奮して、夜の夜中まで十時間もかけて話し続けたような子だ。
すんなりバッジをゲットしたなら、「やったやった」と大騒ぎするはずだった。

サトシの電話の様子だと、苦労したらしいことが見え見えだった。

「ま、なんであれ、バッジをゲットしたならいいことよね。盗んだわけじゃあるまいし……ここから行方不明になりさえしなければね……」

サトシのパパもグランパも、ニビシティのポケモンセンターを訪れたことだけは宿泊記録に残っている。だが、それ以降は、どこの記録にも残っていなかった。もちろん、ニビジムのバッジをゲットしたかどうかもわかっていない。

「あなたのパパやグランパと比べたらずーっとまし。がんばりなさい。サトシ」

ハナコは、夕定食の用意をしにキッチンに戻った。

ハナコにとって、サトシのひいひいじいさん……ハナコにとってひいじいさんに当たる人のことなど意識もしなかった。

家を出ていっただめなポケモントレーナー志望を心配するのは、夫と、まだ母のお腹の中にいる間に出ていった、記憶にも残っていない父親だけで充分だった。

※

「やあ、よかったらいっしょに行かないか？」

ニビシティのはずれにさしかかったサトシに、タケシが声をかけた。

「オレはポケモンの育て方を研究したい。より多くのポケモンに出会いたいのは、トレーナー志望のキミと同じだ。無理やりにゲットして傷ついたポケモンや、ゲットに失敗したポケ

モンたちの様子も知りたいしね。だいいち、モンスターボールに入りたがらない、ポケモンの心理状態も研究したいしね」
　もちろん、ピカチュウのことだ。
「それっていやみですか？」サトシは口をとんがらかした。
「いや、本心から研究したいんだ。それに、スープやみそ汁は一人より三人分作ったほうがおいしい」
「三人？」
「あのお嬢さん、いっしょじゃないのか」
　後ろを見ると、カスミがいる。
「いっしょじゃないわい」
「いっしょよ。自転車、弁償してもらうまではね」
「しつこいぞ。お前」
「しつこいわよ。あんたみたいにあてにならないぼうやは、目を離せないわ」
「なんだと！」
「ストップ！」二人の間に、タケシが割って入った。
「何があったか知らないが、この先、旅は長い。むだなケンカは疲れるぞ。やっぱり、君たちには、オレのような大人の仲裁役が必要なようだね」
　サトシもそれもそうかなと思う。なにより、タケシの作ったというみそ汁の香りは最高だ

った。みそ汁だけなら、ママより上手(じょうず)かもしれない。
「勝手にしてよ」サトシは言った。
「それもそうよね」カスミもうなずいた。
「ぼうやの相手は疲れるわ」
なにより、タケシのコーヒーとクロワッサンはおいしかった。いつも買うコンビニのパンとはケタ違いだ。
「タケシさんがいっしょ、わたし、文句はないわ」
「決まりだ。ではでは」
タケシは、リュックをかついで歩き始めた。
「お兄ちゃん、がんばってね！」
後ろから小さな女の子の声がする。
振り返ると道の向こうにタケシのいちばん下の妹がいる。
「がんばれ、兄ちゃん！」
二十人の子供たちが、手を振って見送っている。
「ああ、がんばるよ」
タケシは、一回だけ手を振ると、すたすたと歩き始めた。
二度と後ろを振り向かなかった。
せっかく、送りだしてくれた弟や妹たちに涙を見せたくなかったのだ。

「おい待ってくれよ」

サトシもカスミもピカチュウも、足早にニビシティを出ていくタケシを追いかけていた。

（三章に続く）

二章のふろく

（……お急ぎの方は三章にお進みください。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれない情報が書かれているかもしれません）

参考資料

ポケモンジムの歴史と現在（文部省ポケモンジム白書よりばっすい）

昔は、引退したポケモントレーナーが、長年つちかったトレーナー術を教えるために始めた道場のようなもので、事実、昔は道場と呼ばれていた。

創始者には名人も多く、それぞれの得意分野から草系のポケモンでは、裏表草星流の二派、水系ポケモンでは裏表水滝流の二派、電気系ではプラス・マイナス、アンペア流、岩系では裏表がんがん流など、今も名門といわれるジムも多い。

注意…ニビジムの創始者は、裏がんがん流の師範代だといわれている。

流儀や格式を大切にするジムは、いつしか、親から子供に継がれる世襲制となり、今もそれが、各地のジムのしきたりになっている。

だが、ポケモントレーナーブームが起こると、街々に道場やジムが林立……もうけ主義の怪しげなジムも増えてきた。

そこで、文部省は、ジムや道場を認可制にして、児童一万人の街に一軒の割合で許可することにした。

児童一万人以上の都市は学区制とし、したがって大都市にはいくつもジムがある。

だが、家庭の少子化で、子供の数が少なくなると、大都会に人が集まり、地方との格差がひろがり、地方によっては、割り当ての児童が一万人を割るジムも増えてきた。

弟子が少なくなると、月謝も少なくなる。ジムの暮らしは楽ではない。

そこで、ふるさとにひとつジムの運動が起こり、子供が少ない地域に限り、経費は国家持ち。ジムリーダーは、地方公務員となった。

だが、公務員になったジムリーダーは収入が安定したためか、修業をおこたり、時代とともに質が落ちてきたことは否定できない。

おまけに、公務員の給料はけっして高くない。

親のあとを継いでジムリーダーになるより、有名になってスターになれば収入も多い、優秀なポケモントレーナーを目指し、ジムを出ていく後継者も多かった。

さらに、生徒側も、ひとつのジムだけで修業したのでは、水系ポケモンの扱いはうまいが、ほかのポケモンはまるで使えない、得意不得意の目立つポケモントレーナーが生まれてきた。

ポケモントレーナーの理想は、どんなポケモンでも心を通わせて使いこなせるポケモンマスターである。

全世界のどこの国も、一人でも多くポケモンマスターを育てることを国の目標にした。

なぜ、世界の国々が、互いに競うようにしてポケモンマスターを育てようとしているのか、それは、それぞれの国の最重要国家秘密である。

いずれにしろ、わが国でも、優れたポケモントレーナーの育成、ポケモンマスターのより多き誕生は、国家的事業として最優先されねばならない。

そこで、わが国では、教育機関としてのジムの質を守るためと、トレーナー志望者のかたよりのない健全な育成のため、バッジ制度がつくられた。

すなわち、トレーナーを目指す者は、その地区内にあるさまざまなジムに挑戦し、ひとつのジムに勝てば、バッジを与えられ、それを八つ集めれば地区リーグに出場できる。

弟子が少なくなっているジムも、バッジを求めて旅するトレーナー志望を相手にすることで、公務員の給料を、ろくな仕事もしないまま受け取りっぱなしというむだも避けられる。

トレーナー志望者も八つのジムを回れば、当然、さまざまな系統のポケモンと戦うことになり、得意不得意のない、オールラウンドなポケモントレーナー術を身に付けることができる。

そして、ジムリーダーは、四つ以上のバッジを連続して失えば、その資格を、後継者にゆずらなければならない。
これによって、挑戦者の少ない地方のジムトレーナーも、日ごろの練習を休むわけにはいかないはずである。
こうして、五十年以上も昔から始まったジムバッジ制度であるが、問題もある。
代々続いたジムを守るため、そのジムの子供たちは、得意の系列のポケモンしか操れなくなる。
ジムの子供たちも、ジムリーダーとしてだけでなく、ポケモントレーナーとして育つべき、人材の一人である。
また、ポケモン関係だけでなく、ほかの道に進みたい少年少女もいるはずである。
全体的に見て、地方のジム経営はけっして楽でなく、児童がほかの道に進みたいと思っても、その余裕はないといっていい。
万が一、現在のジムリーダーが四つ連続して試合に負け、後継者を探さねばならないとき、後継者が親族にいない場合、長年続いたジムを、赤の他人にゆだねねばならない。
それを避けるためには、跡継ぎを多く用意しなければならない。
そのため、ポケモンジムは、この子供の少ない時代にしては珍しく、子だくさんにならざるを得ず、それが、ますます、彼らの生活を苦しくしている。
地方によっては、ジムとは名ばかりで、ほかの内職を余儀なくされているジムリーダーも

多い。
また、四回の連続敗北をごまかすために、三度負けると、四回目には、ポケモントレーナーを金銭にて買収し、故意に負けてもらうこともあるという。
明らかに不正行為であるが、告発するには、あまりに気の毒な状況のジムも多い。
ポケモンジム……それも、入門者の少ない地方のポケモンジムには、児童手当だけでなく、国の強力な援助が必要である。

注意…ニビジムの場合……タケシが一人いなくなることで、生活費が減ることも確かだった。
だが、タケシの弟や妹たちが、それを望んでいたかどうかはわからない。
タケシが毎日作ってくれるおいしい料理と、生活費が軽くなることと、どちらを選ぶかといえば、答えは決まっていた。
ジムリーダーの生活から自由になってほしい。それが、弟や妹たちの、本当の気持ちだ。

参考資料　ぼくのゆめ

ぼくのうちは、水けいのポケモンジムです。
ひとつきに二、三にん、ちょうせんしゃがやってきます。
ジムリーダーのパパは、まけたりかったりいろいろです。

かったときは、お肉のすきやきですが、まけたときは、コイキングのウロコでとっただしでにたおこめのおかゆです。

ぼくは、コイキングがきらいではありませんが、コイキングのおかゆはすきじゃありません。

まけた日のパパは、コイキングのヒレをおさけに入れてのんでは、きょうあくポケモン、ギャラドスのようにあばれます。

その次の日は、まけたうわさががっこうでひろまっていて、

「お前のジムはコイキング……やくにたたないコイキング」といわれて、いじめられます。

そのほかの日は、がっこうからかえると、パパから、いじめじゃないけどれんしゅうでしごかれます。

ぼくは、三つのときから、ジムリーダーになるれんしゅうをつづけています。

水のなかで、三ぷんかんは、いきをしないでいられます。

ぼくが、ジムリーダーになったら、ひとつきに二、三回、お肉のすきやきをたべたいです。

出典　ある水系ポケモンジム家庭の少年（八歳）の作文より

第三章　ハナダシティの四姉妹

相変わらずの山道だ。
サトシたちがニビシティを出てから、二週間がたっていた。
何度か、野生のポケモンを見つけてゲットしようとしたが、どれも失敗した。
タケシが作ってくれる野宿の食事は、確かにおいしかったが、それだけの楽しみで、延々と続く山道を歩き続けるのは、おもしろくない。
いつもは憎まれ口をたたくカスミも、悪口を言うネタがないのか、最近、無口だ。
ピカチュウは、目を閉じて歩いている。
あたりに危険を感じないから、うつらうつら居眠りしながら足を動かしているだけだ。
道は、岩山の峠にさしかかる。
道は二又になって、山を下りていく。
「この道を下れば、ハナダシティに出る」タケシが地図を広げながら言った。
「あっちの道を行けば、別の街よ」カスミが、もうひとつの道を指さした。
「ジムのある街がオレの行く先さ」サトシが答えた。

「ジムがあるといえば、ハナダシティだな」タケシが言った。
「決まった！」サトシは、歩き始めた。
「ちょっと、待った」カスミが、サトシの襟首をつかんだ。
「あんた、あれから一匹もゲットしていないじゃない。それで、新しいジムに挑戦するなんて、十年早くない？」
　カスミの言うのも、もっともである。
　ピカチュウを入れて、サトシの手持ちのポケモンはピジョンとバタフリーだけ。しかも、ろくに戦わせてないのだから実力がついているわけでもない。
　だが、それを言うのがカスミだけに、サトシにとっては忠告に聞こえない。
「早いか早くないか、やってみないとわからないだろ」
「きっと負けるわ。悪いことは言わないからおやめなさい」
　やめろと言っても、わざとけしかけているようにしか思えない。
「ジムのバッジを集めるのが、オレの使命だ。やめてたまるか」
　サトシは、カスミを振り払って道を駆け降りていった。
「あいつを止めるには、逆のことを言うしかないよね。行くなと言いたけりゃ、行けっ！てね」
「だって、本当に行きたくないんだもん」カスミがつぶやいた。
「え？」

「わたしが行きたくないの！　ハナダシティなんか！　だけど、わたしも行かなきゃ、あいつ、自転車のこと、とぼけて逃げちゃうだろうし……もう、サトシの奴……許せん！」
カスミは、サトシのあとを追って駆け降りていった。
カスミは、サトシのジム挑戦より、ハナダシティという街自体が気に入らないらしい。
「そりゃあまあ、若い女の子に評判のいい街とはいえないけどな」
タケシは、地図についている観光ガイドを、読み直した。

観光ガイド……ハナダシティ
花と水の街……カントー地区ではアッタミ温泉と並ぶ温泉街として有名です。
休火山、フルハナダ山のすそのにあり、古くから湯治場として知られていました。さらにこの地を有名にしたのは、温泉の地熱のせいで年中温かく、花が咲き乱れていたということ。いうまでもなく、ハナダシティのハナダは、花の田んぼという意味だと思われます。
また、ハナダ色という色の名前もあり、ピンクや赤い色を想像しがちですが、じつは、紫や青に近い色であることも、覚えておくとどこかで役に立つかもしれません。花の色はさまざまです。ともかくハナダは花と切っても切れない街です。
事実、ハナダシティには、お米の田んぼも野菜の畑もなく、街の周りは、花畑だらけです。現実をいえば火山灰で埋め尽くされたハナダの土地では、花以外は、お芋ぐらいしか作物が育たなかったのです。

有名な悪口歌

……ハナダシティは花の町
娘で目立つは、鼻（花）ばかり
花のほかには、芋ばかり
ハナダシティにゃ、ご用心

おまけに、柔らかい火山灰地を流れるハナダ川は、年中、流れを変え、洪水をおこし、安心して、田んぼや畑を作っていられないという事情もありました。

……ハナダシティは川の町
娘もしたたる、水のよう
だけど嵐にゃ、大暴れ
ハナダシティにゃ、ご用心

それでも、年がら年中流れを変え、いたるところに新しい沼や支流や自然の運河を作るハ

ナダ川と、花のあふれるハナダシティの美しい景色は、全国に知れわたり、つい最近までは、カントー地区の新婚旅行の名所として栄えました。

最盛期は、近隣の大都会から鉄道が引かれ、花柄をボディペインティングしたフラワー・ロマンス・カーという汽車まで走っていました。

しかし、観光地の宿命というか、数百年前から、観光客のお金を狙ってゲームセンターや、得体のしれない見せ物小屋や飲み屋さんが、続々と建てられ、得体のしれない人たちが、大勢、流れ込んできました。

いつの間にか、ハナダシティは、若い新婚カップルが、二人っきりで歩くには、危険な街になってしまいました。

今でも、悪く言う人たちは、ハナダシティを、高い、まずい、ぶっそうな温泉と呼ぶ人もいます。

※

ハナダシティには、古い温泉宿が多い。

いくら、高い、まずい、ぶっそうな……といっても、これだけお客が少ないと、中には、安くて、まずくて、本当にぶっそうな宿もある。

温泉には、お風呂に入ってのんびりするほかに、温泉に含まれた成分によっては、病気や傷を治す効き目がある。

それが目的で、ハナダシティに来たお客さんは、安い宿に鍋や釜を持ち込んで、自炊しながら病気や傷を治す。
ハナダシティのはずれの、そのまた奥にあるカレオバナナホテルも、そんな宿のひとつである。
ひとつというよりも、飛び抜けて値段の安いホテルだった。
安いだけに、屋根は傾き、壁はすきま風ぴゅーぴゅー、電気さえも通っていない。
夜はロウソクかランプが明かりという、いつもは、泊まり客などほとんどいないホテルだが、珍しいことに、二週間前から、その宿泊名簿に、ミヤモトという名と、ササキという名の泊まり客の名が書かれていた。
姓が別なのに、夫婦と書かれてあり、子供が一人……その名もニャンタロー……。
客のほとんどが病気やケガを治しに来る人だし、人目につかない宿だけに、悪いことをして、ケガや病気になった客もいる。
どんな客がこようと、カレオバナナホテルの支配人は驚きはしないのだが、今度の客だけは、いささか目を丸くした。
なにしろ、その客は二人とも、いや、おまけについてきているような子供まで、頭の先から足の先まで包帯でぐるぐる巻き……まるで、ミイラか透明人間のような格好だったのだ。
おまけに、一日中、部屋に閉じこもりっぱなしで、出てくるのは、真夜中……それも、お風呂に入るときだけ……廊下の足音を聞けば、どうやら、三人別々に、三回に分けて入って

いるようだった。

客の事情を深くは聞かないのが、ホテルの支配人の心得だし、宿屋の支払いは一週間ごとに前払いでもらっていたので、別に文句はなかったが、どうにも、気味の悪い客だった。

そして、今、閉め切った部屋の中で、ついに、その包帯がほどかれようとしていた。

※

夜……ロウソクに浮かび上がった鏡の中に、包帯だらけの二人が写っている。

一人が包帯の下から、女の声で言った。

「なんだかんだと聞かれたら……」

「誰も聞いてニャー（ない）」

二人の足もとで、やはり包帯で体をぐるぐる巻きにした子供が言った。

子供というより、ほとんど、毛糸の玉のようである。

「うるさい！」もう一人が、毛糸玉をけっ飛ばした。男の声である。

「なんだかんだと聞かれなくても……」包帯だらけの女が言い直した。

「答えてあげるが世の情け」男が答えた。

「世界の破壊を防ぐため」女の包帯が頭からほどかれていく。

「世界の平和を守るため」男の包帯がほどけていく。

「愛と真実の悪を貫く」女が少し力む。

「ラブリー・チャーミーな敵役(かたきやく)」男が柔らかく受ける。
「ムサシ」包帯の下から、女性の顔が現れる。
カスミほど若くはないが、サトシのママと同じ歳(とし)ぐらいといえば怒りだすかもしれない。
「成人式は、少しだけ昔のことだわさ」ムサシは、怒る前に付け足した。
「コジロウ」サトシやタケシほど若くないが、オーキド博士ほど歳はとっていない。
「美しいのは、少年だけではない」コジロウは、わけのわからない付け足しをした。
「銀河をかけるロケット団の二人には……」
はらり……ムサシの全身をおおっていた包帯がマントのように落ちる。
包帯の下はロケット団のユニフォームである。
「ホワイト・ホール。白い明日が待ってるぜ」コジロウの包帯が落ちる。
ムサシとコジロウが自慢にしている特別注文で作った白いユニフォームだ。
どうやら、ユニフォームの上に包帯を巻いていたらしい。
二人は、ぴったりと、ポーズを決めた。
ついでに現れたのが毛糸玉のような包帯を取り払ったニャースだ。
「にゃーんてな」
と、とどめの決め文句を言ったつもりで、招きネコのポーズをとった。
ユニフォームこそ着ていないが、額(ひたい)の小判は光っていた。
鏡の中の顔を見つめてムサシはにっこり微笑(ほほえ)んだ。

「お肌、すべすべ……わたしってやっぱり美人……」
「やっぱ、ここの温泉はお肌にいいんだよね。う〜ん。いい男」コジロウは、自分の顔に見とれている。
「にゃーはニャースだ。ネコじゃないけど玉の肌はいいもんだニャー」ニャースは、目を細めた。
玉は、昔、ネコの名前によく付けられた名前だ。
「たまじゃないわ。いつもよ。わたしの肌はぴっかぴか……でしょ？」
「さあね？　でも、ボクは完全復活！　ぴっかぴかでしょ？」
「さあにゃー？　けど、にゃーの小判もぴっかぴかにゃー？」
それぞれ、鏡の中の自分の姿に大満足だ。
なにより登場だけでも、きれいに決めたいロケット団……ムサシ、コジロウ、ニャースである。
トキワの森で、どくばちポケモン、スピアーに刺しまくられたロケット団のムサシ、コジロウは、毒ではれ上がった顔や体をさらすことができず、ここ、カレオバナホテルに隠れ、必死で自主治療していたのだ。
しかし、今、傷は治った。
二人と一匹は、互いの復活ではなく、自分だけの復活を喜んだ。
だが、元に戻れば、やっぱりロケット団の二人組と一匹である。

「愛と真実の悪を貫く……いよいよそのときは来た……」ムサシがこぶしを握りしめた。
「ときは来たって……まだ、夜……お休みの時間だよ」コジロウが肩をすくめた。
「今夜はお月さまも出てないにゃー」部屋の窓を開けてニャースは夜空を見上げた。
「もとどおりになったことをお祝いして、今夜は、温泉に入って、のんびりしようよ」コジロウは、手ぬぐいを肩にかけて、廊下に出た。
「お待ち！　あんたたち、傷は治ったかもしれないけど、元どおりになっていないものもあることを……もしや、忘れていないだろうね」
　ムサシが、すごんだ。
「そうだったにゃー」ニャースはしみじみとうなずいた。
「なんだっけ……？」コジロウが首をひねった。
「わからんにゃー！（わからんか！）」
　いきなり、ニャースは、コジロウの顔をひっかいた。
「あわわ……せっかく治った顔なのにぃ」
「だまれにゃ！」ニャースはもちろん黙れと言ったつもりである。
「お前は、あのピカチュウにやられたロケット団のプライドを……ほこりを……ねずみポケモンなどに負けたばけねこポケモン……このニャース様の悔しさを……もはや、忘れたというのにゃー？……」
「あ……それもあったわよね」ムサシが思い出したようにつぶやいた。

「にゃにー？　忘れたって、それのことじゃにゃいのか？」
「忘れないのは、おサイフの中身よ……こんなホテルに、前払いで泊まっちゃったから、からっぽでしょ……」
「あ……」ニャースとコジロウはぼう然と立ちすくんだ。
「給料は、前借りしちゃったし……ほこりがあっても、なんにもなんないわよ」ムサシは、ポケットから取り出したハート型のピンクのサイフをひっくり返した。
出てきたのは、やっぱり、ほこりだけである。
「どうしよう……」コジロウが、うろたえて言った。
「ときは夜……月も出てにゃー」ニャースが夜空を見上げた。
「やることをやるしかない……仕事にゃー！」
ムサシとコジロウはうなずいた。
ロケット団の大切な仕事のひとつに、泥棒があった。

※

その夜、ハナダシティのポケモンセンターに泊まったサトシは、次の日、朝食を食べるとさっそくハナダジムへ向かった。
ハナダシティと呼ばれるだけあって、街角のいたるところに花壇がある。
道の両側にずらりと並んだホテルのテラスにも、花が咲き乱れている。

「きれいなもんだな。さすがにハナダシティというだけはある」
タケシが、思わずつぶやくと、カスミはつっけんどんに答えた。
「造花よ。プラスティックの花。わたしの嫌いな虫もよりつかないわ」
「ふーん。そんなには見えないけどな」
首をひねるタケシに、カスミは食ってかかるように怒鳴った。
「見えるわよ！　タケシさんはね、岩や石ばっかり相手にしていたから、本物の花がわかんないのよ」
タケシは、カスミの剣幕に目を丸くした。
「おいおい、オレはサトシじゃないんだよ。そんなに、カッカしなくてもいいじゃない」
「おんなじよ。サトシもタケシさんも……こんな街に来たがるなんて……こんな街がきれいなんて……つきあえないわ」
先を歩いていたサトシが振り返って言った。
「おいおい、もめないでくれよ。オレはジムに行きたいんだ。花が本物だろうが造花だろうが、ジムのポケモンと、渡してくれるバッジが本物ならそれでいいよ」
「知らない！　ポケモン異常愛好者となんかつきあっていられないわ」
「難しい言葉を使うな。だいいち、つきあってほしいなんて、誰が言ったよ」
早くジムへ行きたいサトシはいらいらしながら言い返した。
「なんですって！　この、ポケモンオタク……相手になるなら誰でもいいの？」カスミは食

って返す。
　あわてて、タケシが間に入った。
「おいおい、もめているのはオレとカスミちゃんじゃなかったのかい？」
　と、そのときだ。
「はいはい、君たち。もめているそこの三人……」
　いつの間にか、後ろにパトカーがいた。
　パトカーに乗っているのは若い婦人警官だ。
「女の子一人に、男の子が二人……朝っぱらとはいえ怪しげだなあ」
「え？　いえ、自分たちは知り合いでして……」
　あわてて答えるタケシの目が婦人警官の顔を見て輝いた。
「あのうお名前は……」タケシはすかさず婦人警官に聞いた。
　カスミに話している声と違って、どこか上ずっている。それに、顔が真っ赤だ。
　……なに照れてんだか……
　カスミは、意味もなくシャクにさわった。
「名前を聞きたいのはこっちよ」
　婦人警官がタケシに答えた。
　タケシの代わりにカスミが答えた。
「わたし、この二人とはなーんの知り合いでもありません……わたし、忙しいんで……じゃ

あ……」

すたすたと逃げるように行ってしまった。

「ふーん。怪しいよな」婦人警官がタケシとサトシを交互に見た。

「あれーっ？」

婦人警官の顔をまじまじと見ていたサトシが、ぽかんと口を開けて叫んだ。

「お巡りさん。トキワシティの白バイさんですよね」

確かに、トキワシティで、傷ついたピカチュウをポケモンセンターに運んでくれた白バイのジュンサーにそっくりだ。

「ん？……ああ、トキワシティなら私の義理の妹……同じ名前だけどね」

どうやら、ポケモンセンターの女医がジョーイ一族だったように、この街の警官もジュンサー一族という親戚同士らしい。

だが、仕事がら、ジュンサーはジョーイほどやさしくはない。

「ちょっと、待ってよ。私の妹を知っているってことは……」

そうつぶやくと、いきなり、パトカーから飛び出した。

あっという間に、両手でタケシとサトシの腕をひねりあげると、二人の手に手錠をかけていた。

手品師のような早業（はやわざ）だった。

「あのう、これ」

わけがわからず手錠を見つめる二人に、ジュンサーはきりっとした声でいった。
「抵抗はだめよ。キミ、さっき、妹と知り合いだって言ったね……」
「え？　知り合いではあるけれど……」サトシが、おどおどと答えた。
「警察とお知り合いっていうのにはいろいろあってね。道をたずねるとか、お財布を落としたとか、悪いことをした犯人さんとかね」
タケシが相変わらず、上ずった声で答えた。
「きれいです。巡査さん」
「ありがとう。みんなそう言うわ」ジュンサーは、にこりともせずに言った。
「道もわかってますし、お財布も持ってます。悪いこともしていません。でも、お知り合いにはなりたいです。自分はタケシ……この街には、昨夜来たばかりでして」
「昨夜来たならなお怪しい。それに、犯人は犯行現場に戻るというしね」
「自分の顔が、悪いことをするように見えますか？」タケシは笑い顔を作って見せた。
ジュンサーも、笑い顔を作った。
「いいえ。その手の顔は、おめでたそうで、とっても悪いことをしそうにないわ。でも、最近は、悪いことをしそうにない顔が、悪いことをするの」
「そんなあ……でも、巡査さんの笑顔はきれいです」タケシが、真面目な顔で言った。
「なに言ってんだか……」タケシの様子にじれたサトシが、ポケモン図鑑を開いた。
「これ、見ても信じてくれませんか？」

「なるほどね……どこで盗んだの？」
「だから、オレの図鑑ですって……トキワシティのジュンサーさんは信じてくれたよ」
「ハナダシティはあんな田舎じゃないもん。キミのものはオレのもの。オレのものはオレのもの。……が、泥棒さんの常識ね」と、言いながら、パトカーの運転席にあるパソコンに図鑑の番号を打ち込んだ。パソコンの画面に、ＯＫの文字が出た。ジュンサーはあっさりうなずいた。
「はい、確認」
図鑑をサトシに返すと、タケシに言った。
「でもって、あなたは？」
「でもって、自分は……ニビシティの元ジムリーダーでして……」
「身分証明！」ジュンサーは、きっぱり言った。
あわててタケシが証明カードを出す。
「警官に何か聞かれたら、まず最初にそれを出すことね……ごちゃごちゃ言っているから、手錠なんか、かけられちゃう」
ジュンサーは、タケシの証明カードをパソコンで確認してから、手品のような手付きで、二人の手錠をはずした。
「でも、あなたたちが妹の知り合いだなんて……あいつ、趣味が悪いなあ」
思わずつぶやいたジュンサーの独り言をものともせず、タケシが言った。

「ですが、自分はあなたと初対面……これも何かの縁。これを機会に、いろいろお互いのことを、お話ししたりして……」
「ありがとう。でも、今、お会いしてお話ししたいのは、昨日の夜に起った事件の犯人となの」
「どんな、事件ですか？」
タケシが、すかさず聞く。
「街の水道局から、大きなホースと大きな吸水エンジンを盗んだ犯人……ついでに、冷蔵庫の中から、局員が三日前に食べ残したお弁当の残りも三人分消えていたけど、これは、小さなことよね」
「それは、興味深い事件ですね。いっしょにお話ししましょう」
「お話ししたい気持ちはわかるけど……忙しい女性に話しかけても、嫌われるか、逮捕されるのが落ち。さっきのお嬢さんみたいにね」
「逮捕……巡査さんの言葉で聞くと、なんかいい響きだなあ。自分が犯人なら、うれしいなあ……」
タケシは真面目(まじめ)な顔で言う。
その顔に、ジュンサーは思わず笑った。……ったく、もう……
サトシは、しびれを切らした。このままここにいて、本当に逮捕されたらたまらない。
……確か、警察の邪魔をするのは、公務執行妨害って罪があるんだ……

サトシは、昔、見たテレビのニュースを思い出した。
やることがなく暇を持てあましたおじいさんが、交番の巡査さんと世間話がしたくて、一週間も交番の前から離れず、とうとう警察に捕まったという事件があった。
その罪が、公務執行妨害という名前だった。
テレビのニュースキャスターは、ご老人を大切にすべきだと盛んに怒っていたが、「刑務所に入れれば、話し相手がいっぱいいそうで、楽しみです」などと、本人のおじいさんは、喜んでいたという変な事件だ。
そのおじいさんと、タケシは違うだろうが、変な事件には巻き込まれたくない。
「オレ、先に行くから……地図、貸して」サトシはタケシからひったくるように地図を取って歩き出した。
「いいとも！」タケシが明るい声で答えた。
そこから先……タケシに何があったのかサトシは知らない。
でも、その夜、ハナダシティのポケモンセンターに戻って来たタケシは、しばらく口癖のように言っていた。
「ジュンサーさん、素敵だな。オレがもう五歳、年上だったらなあ……」
ともかく、タケシが、逮捕されなかったことは確かである。

※

……ここがハナダジムかあ？……
サトシはハナダシティの海辺に来ている。
地図には、ハナダジムがあると書いてある。
しかし、サトシの前にある体育館のような建物には、派手な看板がかかっている。
「美人三姉妹、水中レビュー。どきどきときめきの夢をあなたに……」
その看板は、昔、マサラタウンのお祭りにやって来た小さなサーカスの絵を思い出させた。
ときめきというよりは、なんとなくどきどきのほうが似合っている。
入り口には誰もいない。自動販売機があって、切符を売っている。
発売中のランプがついているから、建物の中では何かをやっているのだろう。
サトシは、切符を買うと、建物の扉を開けた。
いきなり、歓声が聞こえた。
「サクラちゃーん！」
「いいぞ！　アヤメ！」
「ボタンちゃん、待っていました！」
扉の向こうに客席があった。
よく、スケート場で聞くようなワルツ系の音楽が流れている。

だが、中は、スケート場というより、たとえれば映画館に似ている。
ここが、映画館だとしたら、写っている映画は、真っ青な海の底だった。
けれど、スクリーンのように見えるのは、よく見れば、ガラス張りの水槽だった。
そのガラスに、十人ほどのおじさんたちが、へばりつくようにして、水槽の中を見ている。
さっきの歓声は、このおじさんたちだった。
……なんだ……？　こりゃ……
いきなり水槽の中、それも上のほうから、水の泡に包まれながら何かが降りてきた。
さかなポケモンかな？　とっさにサトシはそう思った。
足の部分に、水かきのようなものが見える。体が、きらきら光っている。海草のようなものがゆらゆら流れるようにうごめいている。
それにしては、ずいぶん大きなポケモンだなあ。
ニビジムのイワークよりは小さいけれど……
サトシは、イワークのほかに、人間より大きなポケモンの実物を、見たことがなかった。
イワークは、いわへびポケモンだから、動きさえしなければ、大きな岩のつながりに見える。
岩の肌は、山や野原で見慣れたものだ。
でも、今、水槽の中にいる何かは、水の中で青白く見えるが、なんだか妙に生暖かいものを感じる。

こんなポケモンいたっけなあ……
そのとき、女性の声の場内アナウンスが聞こえた。
「みなさん。まだ、お昼前だというのに、わざわざ三姉妹水中レビューに、おこしいただきありがとうございました。さあ、フィナーレです。まず、ボタンちゃん、ご挨拶(あいさつ)……」
おじさんたちが歓声を上げる。
水中の泡が消えて、さっきの何かが手を振った。
よく見れば、それは、光る水着を着た女の人だった。足に付けているのは、潜水用の水かきだ。
長い髪の毛がピンク色で、体にまとわり付いていたので、人間に見えなかったのだ。
……なんだ。人間かあ……それも、ちぇっ、女の人だ……
サトシは、がっかりした。
サトシは、ママも含めて、女の人は苦手だ。
カスミと出会ってから、とくにその気分が強くなったのかもしれない。
よく見れば、水の中の女の人は泳ぎがうまい。
でも、あんなにくねくね体を動かさないでもいいのに……もっとしゃきっと泳げないのか
……これじゃ、なにかのポケモンと間違えても仕方がないじゃないか……まぎらわしいなあ
……男の人ならきっとかっこいいのに……サトシは残念だった。
足もとにいるピカチュウは、昨日と同じように居眠りをしている。

夜型のピカチュウは、そこに危険がないと感じると、昼間はやっぱりうとうとしてしまうのだ。

アナウンスが続く。

「ハイ、次は、アヤメちゃん……」

今度は、紫色の髪をした女の人が、飛び込んできた。

……紫色の髪の人間なんかいるもんか……だから女の人っていやなんだ。

サトシは四歳のころ、ママのハナコが黒い髪を茶色に染めたときのことを思い出した。

……あのとき、サトシはひきつけを起こし、それ以来、ママは髪を染めるのをあきらめた。

「次は、私こと長女、サクラ……なお、お帰りには、この素晴らしい思い出をおみやげに……パンフレット、記念バッジ、私どもの生写真など……売店の自動販売機で絶賛好評発売中です。よろしくね」

アナウンスが終わると、金色の髪をした女の人が水槽に飛び込んできた。

ピンクと紫と金色の女の人たちは、手をつないで客席に頭を下げた。

おじさんたちは、拍手かっさい……大喜びだ。

水槽の前に、幕が下りてくる。

場内に「ホタルポケモンの光」という、曲が流れた。

ホタルポケモンなどというポケモンが実在するかどうかはわかっていないが、ともかく、曲名では、そういう名前の歌があり、ゲームセンターや劇場の閉店時間に流されるのをサト

シも知っていた。

いかにも、録音されたことがわかるアナウンスが聞こえる。

「アンコールはありません。次回は三時からです。おみやげは売店の自動販売機です。よろしくね」

おじさんたちは、ぞろぞろ帰っていく。

だが、サトシは帰るわけにはいかない。

……これってなんなの……ポケモンジムはどうなってんの……

サトシは、下りてきた幕の裏をのぞいてみた。

水槽と幕の間に、すき間がある。

女の人のしゃべり声が聞こえる。

「ボタンちゃん、ちょっと手抜きじゃない」

「そういうお姉さんだって」

サトシは、すき間の向こうを見た。

狭(せま)い通路があった。

声はそこから聞こえてくる。

サトシは、通路をのぞき込んだ。

※

「しょうがないわよ。お客が少ないんだもの」
ため息をつきながら、金色の髪の女の人が、自分の髪の毛をはいだ。
幕の陰から見ていたサトシは目の玉が飛び出しそうだった。
「お客の多いのは、夜の回……そのとき、がんばればいいのよ」
ピンクの髪の女の人が髪を取った。
「けど、いつもがんばってないと、いざというとき、失敗するわ。みんな、いいかげんなんだから……」
そう言って、紫の髪の女の人も髪をむしった。
髪の下から、黒い髪が見える。
ピンク、紫、金の髪はカツラだった。
三人とも本当の毛は黒い髪の女の人だった。
ほっとしたサトシの気持ちが、思わず声に出た。
「なんだ。カツラかあ……」
女の人たちが振り返った。そして、三人いっしょに言った。
「見たなあ!」
サトシはぞーっとした。

けれど、金色の髪だった女の人は、サトシを見ると肩をすくめた。
「別に見られたっていいじゃん。隠しているわけじゃなし」
「そりゃそうだ」ピンクの髪だった女の人が笑った。
「そういう気のゆるみがよくないのよ。このぼうやだって、きっとお客さんの一人。大人になったら私たちのファンになるかもしれないのよ。私たちは、ハナダシティのスターなんだから、ちゃんとしなきゃ」
もう一人が、びしょぬれになった紫のカツラをかぶり直して、サトシににっこり笑いかけた。
「ぼうや、ごめんね。サインが欲しいなら、マネージャーを通してね」
「あらら、私たち、マネージャーなんかいたっけ？」
ピンクのカツラを持った女の人が、紫のカツラの人をからかうように言う。
「お黙り！　ボタン！　子供の夢をこわしちゃいけないわ。スターにはマネージャーがいるものなの」
紫の髪の人がむきになって言い返す。
「まあ、まあ、美人三姉妹がケンカしてちゃ、もっとぼうやの夢をこわしちゃうわ」
金色の女の人が、二人をなだめた。
サトシとしては、知らない女の人のケンカにつきあっている暇はない。
「オレ、サインなんか欲しくないよ……」

ていたらしい。

「オレが欲しいのはバッジだよ」
「あ……だったら売店の自動販売機ね」
紫の髪の人が、なぜかがっかりしたように言った。
「そういうんじゃないよ」
サトシは口をとんがらかした。
「オレが欲しいのはジムのバッジだよ。ハナダシティのジムはどこに行っちゃったんだ」
三人はきょとんとして、サトシを見つめた。
「あなた、もしかしてやっぱりトレーナー志望？」
金色の髪の人が、うんざりした顔でサトシに聞いた。
「でなきゃ……オレ、こんなところにいるはずないだろ」
「そうかあ、でも、こんなところって言い方はないわよね。まいったな」
ピンクの髪の人が、首を振った。
「ぼうや、ハナダジムはここよ」
紫の髪の人が答えた。

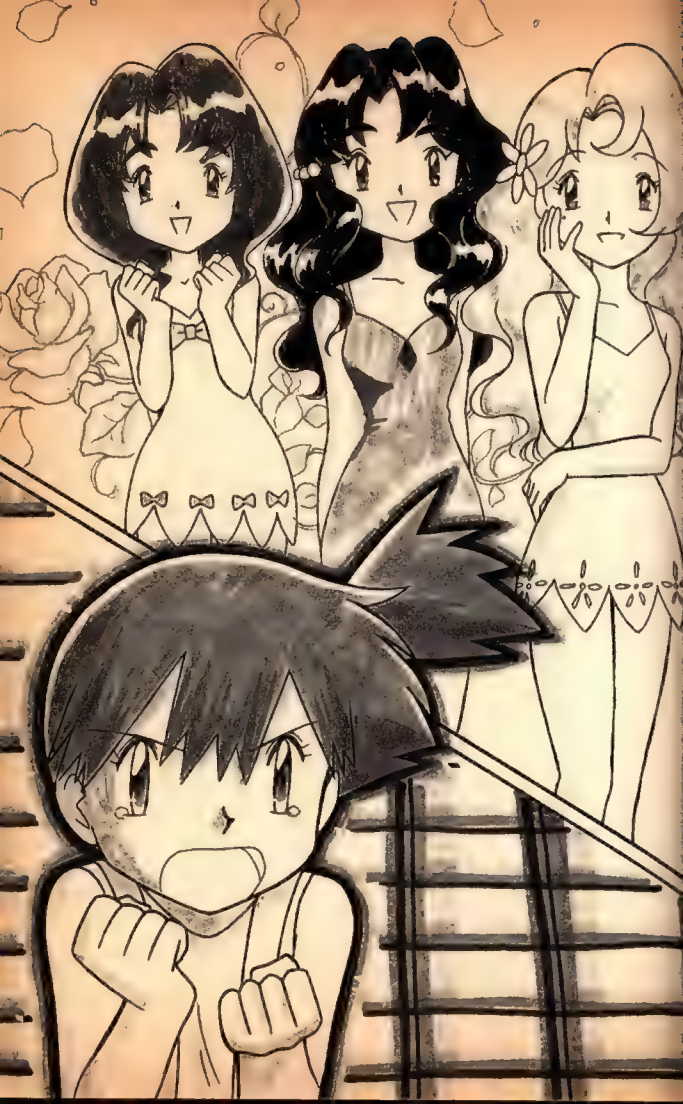
「じゃ、ジムのリーダーはどこに……ポケモンは、どこにいるんだよ」
「ジムのリーダーは私たち……私が、長女のサクラ」
金色のカツラの女の人だ。
「私が次女のアヤメ……」
紫の髪の人だ。
「三女のボタン……」
ピンクのカツラの人がひらひらと手を振った。
「正確に言えば、三人のうちの誰かがリーダー。週代わりでやるときもあれば、くじ引きでやるときもあるわ」
サトシは開いた口がふさがらなかった。
「ジムのリーダーがあんなことやるんですか？」
「あんなことって……私たちのレビューのこと？」
次女のアヤメが、少しだけまゆを吊り上げて聞いた。ちょっと、怖い。
「なんていうか……あのちゃらちゃらした水の中の泳ぎ……」
「ぼうや、あれは芸術なのよ」
サクラが、やさしく言った。
「そう、私たちはハナダシティの美人三姉妹。美しいことは芸術よ」
三女のボタンが、にっこり笑いかけた。

「そんなのなんでもいいです。オレ、マサラタウンのサトシ。オレはここに勝負しに来た。バッジを取りに来た。戦ってください」
「マサラタウンの子かあ……まいったなあ」
サクラが妹たちを見た。
「そんなにバッジが欲しいなら……いいわよね？」
ボタンが、いちばん真面目(まじめ)そうなアヤメに聞いた。
「あげるわ。バッジ」
アヤメはあっさりと言った。
「え……？　なんで？」
サトシは、気も腰も抜けそうだった。
「あなたが、マサラタウンからきたぼうやの四人目だわ。最近、よーく来るわよねえ」
サクラが、ため息をついた。
「三人、来たの？」
サトシからため息がもれた。
マサラタウンを出たライバルたちは、確実にサトシの先を進んでいた。
「ここねえ……ハナダシティはねえ、お花が名物なの。わかる？　だから私たち花の三姉妹」ボタンが、甘ったるい声で言った。
「ほとんど今は造花だけど」アヤメがぼそりと言った。

「それを言っちゃあおしまいよ」サクラが言った。
「おまけに温泉の観光地なの。ここはみなさんのお楽しみの場所なのよ。真面目にジム戦に来る人なんか、ほとんどいないわ。たまにいたって、お遊び気分。これじゃとってもまともなジムはやっていけないわ。で、もって、パパやママは私たちを置いて出ていっちゃったしね」
アヤメの口ぶりは人ごとのようだ。
「ここも出ていっちゃったんですか」
サトシはあきれた。
ニビジムにしろ、ここにしろ、子供を置いて出ていく親が多すぎる。
オレって、ママがいただけ、もしかしたら普通より変わっているのかなあ……などと思ってしまう。
「断っておくけど、親がいなくなっても、ジムを続ける限り、生活はできるわ。それに、この国は子供は十歳になったら大人……親の責任はないから、あとは、どんな自由も許される。文句を言えた義理じゃないわ。ジムを残してくれただけありがたいと思わなくっちゃね」アヤメがサトシに言った。
「けど、私たちは若い。温泉街のいいかげんなジムで一生を終わりたくない。もっと、広い世界でほかの生活をしたい」ボタンが夢見るように目を輝かせた。
「そんなとき、私たちは気がついたの。私たちは美しいってこと。私たちはポケモンジムなんかなくっても生きていける。私たちは美しさにみがきをかけて、きれいになって、この温

泉から出ていくの。私たちの美しさと得意の泳ぎで、私たちは世界一の水中ショーのスターになるの。わかるでしょ？」
「わかりません。みがいてきれいになるのは、歯みがきしか知りません」
サトシは真面目に答えたつもりだったが、三姉妹は、ぽっぽっぽっ……三つ続けてため息をついた。
「ともかく、オレと勝負してください」
「もう、いいの。あなたの町から来た三人に、徹底的にやられたわ」
「やられちゃったんですか？」
「ここは、花と温泉の街なのよ。真剣に戦うことはないのにねえ……おかげで、三つ連続して負けちゃった。最近の子供は、妙に真面目で怖いわ」サクラが四つめのため息をついた。
「オレだって真面目です」
先に行った三人が勝ったと聞いては、引き下がれない。
「だから、バッジはあげるわ」サクラは、胸のペンダントを引きずり出した。
先に、青いバッジがついている。
「はい、ブルーバッジ。ハナダジムに勝った証拠」
「でも、四つ続けて負けたら、ジムを止めなければならないんでしょ？」
「決まりはそうよね。でも、私たちは、三人いるわ。順番にやっていれば、十二回連続までだいじょうぶ。そのうち、私たち、スターになってこの街から出ていくわ」

「そういう手もあるんだ」
「姉妹があるってありがたいわよね」
「オレにはいない」サトシがぼそりと言った。
「かわいそうに……いいのよ。このバッジ持っていって……」
「でも……」
「気がねすることはないわ……人類、み～んな、姉妹ですもの」
アヤメもボタンも、やさしく微笑んだ。
サトシとしては、なんだか、申しわけない気もするが、目の前のブルーバッジは欲しい気もする。
思わず……ありがとう……と言いかけたサトシだったが……
「ちょっと待って！」
後ろで、女の子のきつい声がした。
うつらうつらしながらサトシについてきていたピカチュウも、その声にびくっと首を縮めて目を開いた。
声の勢いに、危険なものを感じたのだ。
振り返るサトシの前に、こぶしを握りしめたカスミが立っていた。
「姉さん……三人そろってなんなのよ。これは」
カスミは、三姉妹をにらみつけている。

「姉さんって……何なの、これ？」
サトシはカスミに聞き返した。
「サトシ、この勝負……わたしが相手をするわ」
「どうしてお前が……」
「聞いて驚くな……わたし、世界の美少女、名はカスミ。じつはハナダジムの末っ子なのです」
「驚いた……」
サトシは、正直につぶやいた。
美人三姉妹とカスミのいう美少女の間は違いがありすぎた。歳の差だけで、少なくとも、五歳……大人と子供の差はありそうだった。
「つまり、ハナダの美人三姉妹は、美人四姉妹だったの」
カスミは胸をはった。
「それを言うなら、美人三姉妹とそのおまけ」
ボタンがぼそりとつぶやいた。
女の子は、小さな声でも、悪口を聞き逃さない。
「なんですって……」カスミは、ボタンをにらむ。
「はっきり言うわ。私たちについていけないって、オオミエ切って家出したのは誰なの？」
ボタンの代わりにアヤメが言った。

「パパが残したこのジムをいいかげんにして、ちゃらちゃらしたスターを目指すなんて許せないわ」
カスミは言い返す。
「パパ……パパって、いつでもカスミはパパなのよね。いいこと、カスミ、パパはこのジムを残して出ていったのよ。このジムをどうしようと、私たちの勝手よね……パパは、このジムをあきらめて自分の生きる道を選んだのよ」ボタンは、遠くを見る目で、言った。
「聞きたくないわ」カスミは何度も首を振った。
「お姉さんたちがだめなら、わたしがパパのジムを守るわ」
「家出はおしまい？　さすがカスミ、四姉妹のおしまいね」
アヤメが、言った。
「カスミ草は、隅っこにいるのがかわいいのにね」
ボタンが肩をすくめた。
「わたしはハナダジムの名誉を守りたいの！」カスミはこぶしを握りしめて言った。
「わかったわ。カスミの好きにしなさい……」
サクラは、かすかに微笑(ほほえ)んでからボタンとアヤメに言った。
「このジムのことで、姉妹ゲンカなんかしたくない。そうでしょう？」
アヤメとボタンも微笑み返してうなずいた。
「ありがとう。姉さん」カスミはくちびるを噛(か)みしめてからサトシに向き直った。

「おい、こら、サトシ」
「おい、コラって……コラはないだろう……オレはサトシだ」サトシは言い返した。
「コラッタ並みのちびのくせに、コラで充分よ。それとも、あんたの実力知っているわたしとの勝負は、怖い？」
コラッタとは、ピカチュウより小さなねずみポケモンだ。
明らかにカスミはサトシを挑発している。
「ピカ……」ピカチュウが、なんとなく笑ったような声を出した。
こうなったら、サトシも怒るしかない。
「やってやろうじゃないか。ピカチュウ。頼むぜ」
しかし、ピカチュウは知らんぷりで、頰の電気袋をぽりぽりかいている。
「ピカチュウ、やる気がないみたいね。やっぱり、わたしになついているんだ。だとすると……サトシの残りはピジョンとバタフリーよね。勝てるわ。わたし」
カスミは微笑んだ。

※

「あ、ずるい」サトシは思わず叫んだ。
ハナダジムの大きな水槽の上で、サトシとカスミは向かいあっている。
ここは、カスミの地元、ハナダシティ。大きな水槽……カスミの持っているポケモンはお

そらく水系だろう。空を飛ぶピジョンとバタフリーと、水の中のポケモンでは勝負にならない。おまけに、カスミはサトシの手の内をみんな知っている。しかし、カスミの持っているポケモンで、サトシが知っているのは、トキワシティのポケモンセンターで見た、きんぎょポケモンのトサキントだけだ。

そこまで考えて、サトシは自分の不利に気がついた。

「どうしたの？　挑戦をあきらめる？　今ならやめてあげてもいいわよ」カスミの口ぶりはどこか、わざとらしい。勝つと思い込んでいるようだ。

……こうなったら、意地でもやめられない。……いいさ、相手が水系なら、空は飛べないはずだ。こっちだって、勝てないかもしれないけど負けはしないさ……

サトシはモンスターボールを投げた。

「行け、バタフリー、キミに決めた！」

モンスターボールからちょうちょポケモンのバタフリーが飛び出す。

「来たわね。それならこっちはヒトデマン！」

カスミもモンスターボールを投げる。

水面に落ちたモンスターボールから、ヒトデマンという名前が、あまりにあたりまえに聞こえるヒトデのようなポケモンが現れた。

しかし、サトシがポケモン図鑑を見ると……

「ヒトデマン……ほしがたポケモン」

……ホシガタか……星といえないこともないが、ぐんにゃりして見えるのは、ほとんど、ヒトデだ。
さらに……
「オスとメスが同じ形なので、誰とでも結婚できる」と、ある。
……つまり、父親も母親もなく、親が二人いるだけなのだ。……へえ、変わっているな。
サトシが、いくら、女の子が苦手だからって……男の子と結婚するのは、サトシとしては、やっぱり首をひねってしまう。
サトシは、ぼんやりそんなことを考えていた。
サトシはヒトデマンが空を飛べないと思い込んで、少しだけのんびりしていたのだ。
続いて図鑑を見ると……
「ヒトデマンの得意技……水鉄砲」とある。
水鉄砲?……水鉄砲って?……
いきなり、水中から、バタフリーめがけ噴水のような水が飛び出した。文字通りの水鉄砲だった。だが、おもちゃではない。消防車のホースよりも強い力で、水が吹き出している。
バタフリーは水にぶつかり、その水圧に押され、ジムの天井に叩き付けられた。
……しまった!　ヒトデマンは、空を攻撃できる……
サトシは青ざめた。
バタフリーはサトシの目の前で、いもむしポケモンのキャタピーから、さなぎポケモンの

トランセルに進化し、どくばちポケモンの攻撃から、サトシが身を挺して守ろうとし、サトシの胸の中で、トランセルからちょうちょポケモンに進化した……サトシにとっては、自分のポケモンの中で初めて進化してくれたポケモンだ。
つらい目にはあわせられない。
だが、残るポケモンはピジョンだけだ。
ピジョンも空を飛ぶとりポケモンだ。
水の中が得意なはずはない。
しかし、ほかにいないのだ。
だからといって、これ以上、バタフリーにダメージは与えられない。
「バタフリー戻れ！」
サトシは、モンスターボールにバタフリーを戻すと、とりポケモンのピジョンを出した。
ピジョンは、ヒトデマンの水鉄砲をたくみによけて飛んだ。
しかし、ジムには天井があるために高さには限界がある。
しかも、その高さは、水鉄砲の届く距離だ。
ピジョンの翼は、バタフリーの羽根よりは水に強いかもしれない。
だが、ピジョンが水の中に潜れない以上、バタフリーと結果は同じだ。
やがて、時間が来れば、飛ぶことに疲れてくる。いつかは、降りてこなければならない。
でも、水の中のポケモンはじっとしていれば、疲れない。

時間勝負では、空を飛ぶポケモンに勝ち目はない。
ヒトデマンも、むだな水鉄砲を撃つのを止めた。
時がどんどんたっていく。
ピジョンの羽ばたきが目に見えて少なくなり、羽根を広げて、滑空している時間が多くなった。明らかに疲れている。
サトシは、くちびるを噛みしめた。
そんなサトシをカスミは見つめていた。
……サトシ……もう止めて……負けを認めてタオルを投げて……タオルを投げるとは、試合を捨てることだ。
カスミは、結果がわかっていて、つっぱっているサトシが、なんとなく家を出て、つっぱっている自分を見ているようで、惨めだった。
なにより、飛んでいるピジョンが、かわいそうだった。
女の子の気持ちは気まぐれだというけれど、自分でもそうかもしれないな……？　とカスミは思う。
さっきまでのカスミは、サトシを挑発してでも戦うつもりだった。だが、今は違う。ピジョンの飛ぶ姿を見ていると、嘘のようにやる気が消えてしまった。
なぜだろう？
ともかく、試合に勝つことより、ピジョンをいじめたくなかった。

……この試合、やめようかな……カスミはそう思った。

……だめだなあ。こんなこと考えているようじゃ、ジムのリーダーなんかになれっこない。パパの残したジムの名誉は守りたかった。けれど、本当にジムを守るなら、家出などせずに、ジムでがんばればよかった気もする。

ジムを出た口実は、姉たちがなにかとお姉さん気取りで口うるさかったからだ。ジムのことよりスターになることばかりを夢見ている姉たちが気に入らなかったからだ。でも、本当にそうだろうか？　姉たちは、なんだかんだと文句を言いながら、いまだにジムを続けている。

たとえ、「美人三姉妹水中レビュー」でも、一方ではジムをやっているには変わりないのだ。……もしかしたら、わたし以上にジムのことを大切に思っているのかもしれない。

だって……ジムがいやなら、パパのように黙って出ていけばいいのだ。……わたしだってそうだった……ともかく、姉たちのいるジムがいやだった。少し歳の離れた姉たちは、ハナダシティの美人三姉妹……いや、カスミが小学校に入ったころは、美少女三姉妹と呼ばれていた……カスミときたら、いつでもカスミ草……美しい花の引き立て役……かわいい女の子とは呼ばれたが、きれいな……とか、美しい……とかいう言葉はまるでなかった。……こういうことって、けっこう、女の子は気にしてしまうんだ。

でもって、親代わりの姉たちに、さんざん逆らって、結局、家出してしまった。

そんなわたしが、ジムが大切だなんて言えるの？

……ちょっと、待ってよ……カスミは微笑んでしまった。ジムのバッジをかけて、今、戦っているというのに……こんなこと考えていていいのか？　本当にわたしって気まぐれなんだね。

それとも、ジムリーダーに、向いていないのかな。

どうしても、勝とうという気がしないなあ……

止めちゃおうかな……勝っている試合にタオルを投げるなんて、もしかして、かっこいいよね。さすが、カスミ草なんちゃって……目立とうとしない……うん、うん。

なんとなく自分を納得させて、カスミは、本気で試合を捨てようと思った。

そのときだった。

「みなさま、お騒ぎのところ、さらにお騒がせして申しわけありません」

ジムに女性の声が響いた。

水中レビューをアナウンスしたサクラの声とも、アヤメの声とも、ボタンの声とも違っていた。

そこにいた全員の感想を聞けば、少なくとも素敵な声だった。

サクラの声が、商店街のスピーカーのいい声なら、その声はローカルラジオ放送局のアナウンサーの声以上は、差があった。つまり、プロの声だった。

「誰なの？」サクラがつぶやいた。自分との違いにびっくりしていた。人によっては、弟子入りしようと思った。

「なんなの？　これは……」アヤメがあたりを見回した。
「いったい今のはなんだったの？　教えて……」ボタンがあこがれのまなざしで叫んだ。
「なんだかんだと答える前に」と、さっきの女性の声。
「やることやるのが、悪の道」と、男性の声。これも、声だけ聞くと、外国映画のヒーローのニッポン語版の声優のようにかっこいい。
続いて、轟音とともにジムの水槽と壁が揺れた。
一瞬のうちに、壁が割れ、巨大なホースが水槽に突っ込んで来る。
エンジンの回る音がしてホースがみるみる、水槽の水を吸い込んでいく。
ホースの上に、二人の人影が現れる。
「お待たせ！　この世の破壊を防ぐため」ムサシだ。
「この世の平和を守るため」コジロウである。
「愛と真実の悪を貫く」ムサシは、愛と真実の悪という部分をことさら強調した。
「ラブリー・チャーミーな敵役」コジロウがバラの花を見せた。サクラでもなく、アヤメでもなく、ボタンでもなく、まして、カスミ草でもない。トゲのあるバラ……造花ではない本物だ。
「ムサシ」いうまでもなく自己紹介だ。
「コジロウ」いうまでもなく自分の名前だ。
「銀河をかけるロケット団の二人には」普通のロケットで銀河を回るのは不可能である。今

のところ、銀河をかけるほどの高速推進エンジンは開発されていない。
「ホワイトホール、白い明日が待ってるぜ」もちろん、銀河系にホワイトホールは、まだ発見されていないし、そこで明日が見えたとしても、白いか黒いか黄色いか、明日の色や明るさが、今、わかるはずもない。
ニャースが、とどめをさす。
「にゃーんてな」
サクラが、ムサシに聞いた。
「さっきのスピーカーの声はあなたですか？」
「わかる？」ムサシは、うれしい。
「どこで、習ったんです？」
「独学ですわ」
「独学であそこまでできるなんて……」
「ちょっと、必要があったの。勉強するときはいつでも一人……他人をあてにしてはいけないわ」ムサシは、遠くを見つめるまなざしをした。
アナウンスに限っていえば、ムサシは一流だった。
十代の終りごろ、ムサシは全国放送ラジオ局のアナウンサーに変装したことがあった。
番組は、ポケモン、ベスト100……ロケット団が盗んだポケモンの値段を上げるため、人気のないポケモンを、ベスト10に紛(まぎ)れ込ませて放送した。

ちなみに、そのときのインチキベスト3は、シェルダー、パラス、コイル……。
二度とベストテンに入りそうにないメンバーだ。
放送の内容はでたらめでも、ムサシの声は誰も疑わなかった。
ムサシのアナウンスは、全国に通用するプロの声だったのだ。
だが、その日の数分間の放送のため、ムサシが、どれほどアナウンス術を練習したことか……。

その日……ある年の三月三日のポケモンベスト100……ムサシの声は全国を駆け回った。全国の人々が、ムサシの声をムサシと知らずに聞きほれた。
その日だけ、ムサシの声は、内容は造花でも、声は本当の花だった。
ムサシは、その日を忘れない。人には言えないが、ムサシが大切にしている、ひな祭りの日の思い出のひとつだった。
「と、遠い昔を、思い出すのもいいんですけど……」同じぐらいいろいろな思い出を持っているコジロウが、ムサシの肩をつついた。
「とりあえず、見つめるのは今日さ……」
「そうだったわね」ムサシはにっこり笑った。
「では、今日の目標……温泉帰りのおみやげに、何がいいかと迷ったが」コジロウが手帳を出して読んだ。
「やっぱり、我らはロケット団……ポケモン盗むのが本業で、さっそく見つけたポケモンジ

ム……聞けば水系専門とか」
「水系ならば水さえなけりゃ」
「陸に上がればすぐ干物」
「弱ったところを頂きね」
「朝っぱらから泥棒なんて……なんて大胆な……」サクラが言った。
「干物は朝ご飯が似合いよね。今日の朝食べた食べ残しのお弁当はひどかったわ」
「干物なら、朝昼晩の毎食でもいいにゃー」ニャースは舌なめずりした。
「ま、……冗談はそれぐらいにして、このジムの『美人三姉妹水中レビュー』は、夜の回のほうがお客が多いんでしょ。泥棒するならお客の少ない昼のほうが目立たない。それも、お客のいない休憩時間を狙う。泥棒の基本には忠実なわけです」コジロウが、真面目(まじめ)に解説した。
「ところが来てみてびっくりね。余計なお客がいるじゃない」ムサシがカスミにウインクした。
「忘れられない、ジャリンコギャルとジャリボーイ。我ら狙いのそこのピカチュウ」
ムサシはピカチュウを指さした。
「おまけ付きとは、うれしいな。ラッキーラッキー。これっきり。ここで会ったが百年目」
コジロウが、リズミカルにバラを振った。
「おまけって言わないで！」カスミが叫んだ。
「わかったぞ！」サトシはロケット団を指さした。
「水道局からホースと吸水エンジンを盗んだのもお前たちだな」

「お見事……よくぞそこまで推理した」推理しなくてもわかりそうなものだが、そういうセリフを言ってみたいのがコジロウだ。
「さっき、食べ残しの弁当と言ったろう……同じ日に水道局の冷蔵庫から、三日前の食べ残しが盗まれている」
「三日前の食べ残し？……そこまでは知らなかった」ムサシとコジロウは思わずお腹を押さえた。
「そうか……どうも、変な臭いがするからニャーは食べずに捨てたが、正解だったにゃー……」
ニャースがよしよしとうなずいた。
ムサシとコジロウは、同時にニャースの頭をぶったたいた。
「私たちは食べちゃったよ！」
「コジロウ……胃薬持っている？」ムサシがコジロウに聞いた。
「虫下しも持ってます」コジロウがうなずいた。
「三日前ぐらいでおたおたするにゃー。おみゃーらは、一年前の、カビ付き、五目チャーハンを食べても平気だった記録保持者にゃろー」
「あれはいまだに破られていないロケット団の新記録だったわ」
「僕たち、鋼鉄の胃袋と言われたよね」
ムサシとコジロウは、昔をなつかしんで微笑んだ。

「でも、いい子は真似しちゃだめよ」
「僕たち、悪い子だから食べちゃったけどね」
「てなこと言ってるうちに、水はほとんど吸い取ったにゃー」ニャースが水槽を指さした。
水槽の底で、ヒトデマンがぴちゃぴちゃもがいている。
「あれ……？　これだけ？」ムサシが気の抜けたような声をもらした。
サクラが、気の毒そうに答えた。
「残念ね。私たちのポケモンジム……ここんとこ負け続けで、ポケモンはみんな入院しちゃったの」
アヤメがカスミとサトシに言った。
「ジム戦をやろうにも、ポケモンがいなかったの」
ボタンはロケット団に微笑んだ。
「あなたたちも狙うんだったら、ポケモンセンターにすればよかったのにね」
ムサシは頭をかいた。
「そうはいかないんだわよ……ポケモンセンターは、トキワシティで失敗したからね。我々ロケット団は失敗を二度とくり返さない。ロケット団手帳に書いてあるのよ」
コジロウは手帳を見て付け足した。
「こういうのもあるよ。失敗を恐れるな。ロケット団はあきらめない」
ムサシは言葉に詰まったが……

「むむむ……あきらめたりしないわよ！　ピカチュウ、もらった！」
水槽の中のホースが、ピカチュウに向いた。
「逆噴射！」
吸い込んだ水が、逆流して、ピカチュウを襲った。
ピカチュウは吹き飛ばされ、壁に叩き付けられた。
びしょぬれのピカチュウは、立ち上がることもできない。
「弱ったところを、はい、頂き……逆噴射の逆」
「早い話が、吸入」
ピカチュウの体が、ホースに吸い込まれていく。
「ピカチュウ！」サトシは叫ぶだけで何もできない。
自分の体が吸い込まれないように、柱にしがみつくのがやっとだ。
そのときだった。
ぴかっ！
ホースから、火花が散った。
「え？　今のなに？」ムサシが首をひねった。
「なんか、いやな予感」コジロウは、ムサシを指さした。
ムサシの長い髪が、逆立っている。
「そういうあんたも」

コジロウの髪も針千本のようにぴんと伸びている。
ニャースの小判が、きらきら光る。
「これって、静電気の現象にゃ？」
サトシは、気がついた。
……ピカチュウが電気を出した……水は電気を通す……
サトシは叫んだ。
「ピカチュウ、最大出力！　十万ボルト！」
答えるまでもない。
ピカチュウは十万ボルトを放電した。
ホースがはじけ飛び、吸水モーターが吹き飛んだ。
これでロケット団が、平気なわけがない。
「やなかんじ――――！」
悲鳴だけを残して、消えていた。
消えたというのは、消滅したとか、死んでしまったという意味ではない。
ロケット団用語で「消えた」は、逃げたという意味に近かった。

※

「これはあなたにあげるわ」

サクラが、ブルーバッジをサトシに差し出した。
「え？……オレ、カスミにまだ勝っていないよ」
「そうよ、わたし負けていないし、それどころか、もう少しで勝つとこだったわ」
カスミは、一時はサトシに負けてやろうと考えていたことも忘れて、口をとんがらかした。
サクラはうなずいた。
「カスミの気持ちもわかるわ。でもね、ロケット団からこのジムを助けてくれたのは、ピカチュウでしょ」
ピカチュウは何事もなかったように、濡れた体の毛づくろいをしている。
「それに……」アヤメがピカチュウを見つめて言った。
「このピカチュウの電力を見ていると、私たちの持っている水系のポケモンには勝ち目がないわ。このぼうやが、最初にピカチュウを出してくれれば、カスミでなくても負けるわ」
「わたしもお姉ちゃんたちもお手上げね……」ボタンが微笑(ほほえ)んだ。
「そんなあ」三姉妹の言うこともわかるが、カスミとしてはおもしろくない。
「……いいのかなあ」サトシとしても複雑だ。
ピカチュウを最初に出せば……と言われたったって、ピカチュウはそれをいやがったのだ。
サトシの意志で、出さなかったわけではない。
ピカチュウは、出てくれなかったのだ。
「いいのよ。サトシくん」

サクラは、サトシの手を取り、手のひらにブルーバッジを置いた。
「いいわね？」サクラは妹たちに聞いた。
アヤメとボタンはうなずく。
サクラはカスミに言った。
「カスミは負けたわけじゃないわ。このバッジは私たちハナダジムのリーダー『美人三姉妹』から渡すの。いいわよね」
カスミは肩をすくめた。
「ほんと、いいのか？」サトシは、カスミに聞いた。
「わたし、ジムリーダーじゃないもん……勝手にしたら……」
「なんだかなあ」サトシは、まだ、とまどっている。
カスミが怒鳴った。
「あんた、なにぐずぐずしているのよ。女の人が、わざわざくれるというのを受け取らないなんて……サイテー、男の子として最低よっ」
「わかったよ！　ありがたくもらうよ」
それは、サトシの本心だった。
けれど、カスミに付け加える言葉は忘れなかった。
「いいか、お前にもらったわけじゃないからな！」
「誰があなたに……あげるものなんかないわよ！」

カスミは、そこまで言って、にっと笑った。
「返してもらうものはあるけどね」
「え?」
「自転車!」
それを言われると弱い。
「忘れたわけじゃないでしょうね。もらうものはもらって、返すものは返さない……それって、ほとんどロケット団……ドロボーよね……さっきの白パトさんに逮捕してもらう?」
カスミがたたみかける。
サトシは、カスミのお姉さんたちがいる手前、返す言葉もない。
「まあまあ……いろいろあったんでしょうけど……」サクラが間に入った。
「カスミちゃん。ハナダ美人四姉妹になる?」
「え?」カスミは、言葉を飲んだ。
「ふがいないお姉さんの代わりに、ジムリーダーをやってもいいのよ」
「四姉妹になれば、四かける四の十六回、連続して負けられるわけよね」
ボタンがいつの間にかポケットコンピュータを出して計算している。
「最後は、末っ子のカスミにお任せできるしね」アヤメが、ぼそりと言った。
「その頃までには、私たち三人は、水中レビューの世界的大スター……」
ボタンが、にっこり笑った。

「あ……あのう」カスミはあわてた。
確かにジムは大切だ……だけど……だけど……
カスミは首を何度も振った。
「わたし、まだジムリーダーの実力ないし——……美人というほど大人じゃないし——……あ、そうそう、サトシから自転車を返してもらわなきゃなんないし——……もうちょっと、いろいろ勉強したいし——……」
カスミは、……し——、し——、し——……を付けた理由を、四十回ぐらい使って、ジムに残るのを断った。

※

ハナダジムから出ていくサトシとカスミの後ろ姿を見送りながら、サクラがつぶやいた。
「やはり、野に置けカスミ草……か」
「それ、やはり野に置けレンゲ草……でしょ」アヤメが訂正した。
「だけど、わたしは美しいボタンの花……」ボタンが水中レビューのカツラをかぶった。
「わたしは、サクラ……」カツラは金色だ。
「わたしはアヤメ」とっくにかぶっている紫のカツラを手のひらでなでつけた。
「ハナダ美人三姉妹水中レビューは、今日も絶賛公演中！」
三人は水中レビューのポーズをとって、微笑(ほほえ)んだ。

※

その夜……

ポケモンセンターで、タケシと合流したサトシとカスミは、翌日の朝、ハナダシティを旅立った。

目的地はとりあえず、次のジムのある街だ。

一方、ロケット団も次のジムのある街を目指していた。

ロケット団の手帳にある心得「失敗を二度とくり返さない」よりも「失敗を恐れるな。ロケット団はあきらめない」のほうを選んだのだ。

この決定には、ニャースの……ばけねこポケモンがねずみポケモンに負けてたまるか……というプライドも大きく影響していた。

（四章に続く）

―三章のふろく

（……お急ぎの方は四章にお進みください。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれない情報が書かれているかもしれません）

……タケシのポケモン日記より……

×月×日

わたしが、サトシというポケモントレーナー志望と旅をともにしたのは、一匹でも多くのポケモンと出会い、さまざまなポケモンの生態と育て方を知りたいからである。
だが、今のところ、サトシの未熟さのせいか、目新しいポケモンに出会えてはいない。
出会えたといえば、それぞれの街にいるジュンサーさんやジョーイさんだが、この人たちは、誰もが素晴らしいし美しい。生態も謎が多く、育て方はおろか、おつきあいの方法もわからない。話しかけるには、「お茶を飲みませんか」というのが効果的だと、「チャート式職業別　おつきあい作法」という参考書に書いてあった。だが、なにぶん、固い石と岩の古い街、ニビシティの古本屋で見つけた参考書なので、いつの時代のジョーイさんやジュンサーさんに通用したのか……ときどき疑問に思うこともある。
残念ながらその参考書は表紙と裏表紙が破れていて、出版された年月日がわからないのだ。
だが、いずれにしろ、ジョーイさんもジュンサーさんもポケモンではなく人間である。
このポケモン日記に書くべきことではないと、ときどき、反省しているのだが、ともかくポケモンについては書くことがあまりないので……つい書いてしまうのだ。
（以下……さまざまな街のジョーイやジュンサーのみならず、ロケット団以外の十歳以上の女性なら誰のことでも書かれているが……内容は、ほとんど変わりばえがない。出会いがあって……いろいろあるにはあるが……結局、お別れをして……感想は女性が年下ならば○○

年後が楽しみだ……。年上ならば、○○年前に会いたかった……。○○は、タケシと出会った女性との歳の差が書かれている。どうやら、タケシとしては、ニビシティに残した弟や妹の母親の役目をしてくれる女性を探しているつもりらしいのだが、そんな気持ちで女性とおつきあいしようとする限り、お別れ以外の結果は望めないだろう。したがって、タケシの日記に書かれている、人間の女性についての記録は、今後、その記載を避けることにする)

×月×日

……というわけで、今日もこれといったポケモンには出会えなかった。こうなったら、身近なポケモンを観察するしかない。で、周りを見れば、意外なことに、かなり珍しいポケモンが、すぐそばにいることに気がついた。それは、ほかならぬサトシのピカチュウである。ピカチュウが珍しいわけではない。ペット用ポケモンとしては、いつも人気のベスト3に入っているし、実用ポケモンとしても、電池代わり、自家発電用としてよく使われている。当然、その生態も知り尽くされているかに見え、最近の手抜きな辞典には、「ピカチュウ……ねずみポケモン……電気を出す、おなじみのポケモン」としか書かれていないものもある。だが、よく考えてみると、我々の知っているピカチュウは、人間に飼いならされたピカチュウであり、野生のピカチュウについては、ほとんどわかっていないことに気がつくのである。
よく考えてみよう。我々は、本当に野生のピカチュウに会ったことがあるのだろうか？
もちろん、ポケモンレッドデータブック（絶滅しかけているポケモンを発表している本）

に、野生のピカチュウの名前はない。
　ポケモントレーナーの中には、野生のピカチュウをゲットして持っている人も多い。だが、そのピカチュウは本当に野生だったのだろうか。
　昔、人間に飼われていて逃げ出したピカチュウは少なくないだろう。捨てられたピカチュウもいるはずだ。それが、町中にいればドブピカチュウだが、野原や山や森の中にいて、繁殖して増えたものを我々はなんと呼べばいいのだろう。もしかしたら、それを、我々は野生のピカチュウと呼んでいるのではないのだろうか。
　たとえば、昔、イヌという動物がいた。その起源はオオカミという動物が人間に飼われるようになってイヌになったといわれている。
　そんなイヌが、人間の手から離れて野生化したものを野犬というそうだ。
　野犬はイヌである。野犬は野生に戻ったからといってオオカミではない。
　我々が、日常、野生のピカチュウと呼んでいるのは、もしかしたら、野犬になったイヌのようなものではないのか？
　本当の意味のピカチュウ。イヌにおけるオオカミのような、野生のピカチュウは、ほかにいるのではないか。
　わたしは、そんな気がしてならない。
　そして、今、そんな野生のピカチュウは絶滅しかけているのか？　それとも、絶滅してしまったのか……

そういえば、古本屋で立ち読みした昔のポケモン図鑑には（今、手元にはないが）、ピカチュウのことを数が少なく、なかなか見つからない……と書かれていた覚えがある。
わたしは子供心に、こんなに有名でみんなが知っているピカチュウが、どうして珍しいポケモンなのだろう？　と不思議に思ったことがあるのだ。
辞書と図鑑は新しいものほど正確だというが、最近の図鑑による「おなじみのポケモン」という表現とは、あまりに違いすぎる気がする。
じつは、こんな疑問を持ったのも、サトシのピカチュウを見ているからである。
サトシのピカチュウは、我々の知っているピカチュウとは明らかに違う点がある。
まず、モンスターボールに入りたがらない。もっとも、我々は、普通ポケモンがモンスターボールに入るものと思い込んでいるが、入るというのと入りたがるというのは少し違うのである。
我々は、ポケモンは、モンスターボールに入りたがる生き物だと思っているから、入りたがらないという表現をする。
だが、サトシのピカチュウは、どうやら入りたがらないのではなく、入るのが嫌いなのだ。
これは、もしかしたら、ピカチュウのみならず、ポケモン全体としても、めったにないことだと思う。
しかも、サトシのピカチュウは、ほとんど、サトシのいうことを聞かない。
サトシがいくら未熟だとしても、サトシのピカチュウの飼い主に従わない度合いは、並み

ではない。異常といってもいい。
　普通、人間に飼われているのに飼い主のいうことを聞かない生き物を、我々は頭が悪いと呼ぶ。
　しかし、サトシのピカチュウは、どう見ても、頭が悪いとは思えない。わたしから見れば、飼い主のサトシより、よほど頭がいい。
　わたしのイワークがジム戦で負けたのも、サトシの力ではなくピカチュウの創意工夫だとしか思えない。
　そして、特筆すべき点は、ポケモン同士の戦いの際のピカチュウである。
　普通ポケモンは、飼い主に従って戦う。命令以上のことはしないなし、それ以下のこともしない。
　しかし、サトシのピカチュウは、サトシ以上に挑戦的なときがある。
　かと思えば、まるでやる気のないときもある。
　相手と戦う、戦わないは、どうやら、サトシのピカチュウ自身に判断の基準があるようなのだ。
　と、なると、ポケモン愛護団体からポケモン戦に対して、しょっちゅう注意をされる……自分はなにもしないでかわいいペットを戦わせて喜んでいるのは残酷である……という批難も、サトシのピカチュウに関しては、例外ということになってしまう。
　サトシのピカチュウは、飼い主の命令に関係なく、戦うときは戦い、戦いたくないときは、

戦わないのだ。

さらに、不思議なことは、飼い主のいうことが聞きたくないなら、または飼い主が嫌いなら、サトシを捨てて逃げればいいのに、サトシのピカチュウは、それもしない。

ようするに、今のところ、サトシは、ピカチュウを自分のポケモンと思っているらしいが、ピカチュウ自身は、とりあえずいっしょにいるという感じでしかなさそうだ。

これらは、普通のピカチュウにはない特徴だ。

普通のピカチュウは愛嬌(あいきょう)があるといわれている。確かに、姿かたちはかわいいが、それ以上に、ピカチュウというポケモン自体が、人間にかわいがられようとして、ゴマをすっているような感じがなきにしもあらずだ。

いわゆる、人間に愛嬌をふりまいている。

だが、サトシのピカチュウは、そういう意味での愛嬌はまったくない。

ともかく、サトシのピカチュウは普通のピカチュウとは違うところが多い。

そこで、わたしはふと思うのだ。

もしかしたら、本来のピカチュウとは、サトシのピカチュウのようなポケモンだったのではないか……と……。

そこで、さっきの野生のピカチュウのことである。

もしかしたら、サトシのピカチュウの特徴は、本来の野生のピカチュウが持っていたものではないか……

わたしのいう野生のピカチュウは、実際にいるかどうかはわからない、幻の野生のピカチュウにすぎない。
でも、それが、今、目の前にいるサトシのピカチュウの中にあるとしたら、わたしは、日常の中で、幻のポケモンを見ていることになる。
今、幻のポケモンと呼ばれるポケモンの名は、いくつもある。
人々は、幻のポケモンを追いかけている。
でも、身の回りにいるポケモンの中に、幻のポケモンがいたとしたら、こんなに楽しいことはない。
わたしの日記には、だったら……とか、もしかしたら……とかという言葉が多い。
わたしは、その言葉を、減らしたい。
サトシのピカチュウに対しては、そんな気持ちで、ずーっと観察を続けるつもりだ。
注意…タケシは、普通の会話のとき、「自分」という表現を使いたがる。しかし、さすがに日記にまでは「自分」という言葉を使っていない。
とはいえ、「わたし」という表現も、タケシにとってはめったに使わない言葉である。
タケシにしては、ていねいな言葉すぎる気もするが、もしかしたら、この日記は、人に読まれることを意識した文章なのかもしれない。

第四章　クチバジムの対決

ハナダシティを出てから、一ヵ月以上がたった。
森を通り、山を越え、海岸を歩き、だが、サトシがゲットできたポケモンは一匹もいなかった。
通りすがりの街には、ポケモンジムのある街もあったが、ジムの得意分野を知ると、はやる心をおさえ挑戦はしなかった。
なにしろ、サトシのゲットしたポケモンは相変わらずピジョンとバタフリーだけだ。
そして、ピカチュウの三匹では、あまりにも種類が少なかった。
相性の悪い敵と戦わせて、ポケモンを苦しませるのは、トレーナーとは呼べない。
サトシは、それを口にこそ出さなかったが、ニビジムの戦いとハナダジムの戦いで、いやというほど感じていた。
だからといって、このままでいいはずがない。
お情けでもらったようなバッジが二つ。ポケモンは三匹……。
同じ日にマサラタウンから出ていった三人は、いまごろ、いくつのバッジを……いくつの

ポケモンを……持っているのだろう。

サトシは、焦りをおさえきれなくなっていた。

サトシとタケシとカスミの三人組が、クチバシティを通りかかったのは、そんなときだった。

観光ガイド……クチバシティ

港街です。

この地域ではいちばん大きな港を持ち、たまには、豪華客船もやって来ます。……クチバシティのクチバとはおそらくクチバ色……朽ち葉と書き、地面に枯れて落ちて、腐ったような葉っぱの色のことだと思われます。

とりポケモンのクチバシの色とは、たぶん、なんの関係もないでしょう。

腐ったというと聞こえが悪いのですが、赤みを帯びた黄色……けっして汚い色ではありません。

この国には古くからある風流な色で、大昔の一九〇九年には、ファッション界で大流行した色だといわれています。

では、なぜこの街に、クチバという名前がついたかには、いろいろな説がありますが、クチバシティが一九〇九年に、この国の海軍の港として作られたことを考えれば納得がいきます。

海軍といえば、海の青。ブルーやセーラー服の白い色……（セーラー服は、女子高生の制服ではなく昔は海軍の水兵さんたちの制服のことでした）を考えそうなものですが、当時の海軍は、おしゃれな人たちが多く、あえて、当時、いちばん流行していた色を選んだものと思われます。

軍港のある街といえば、堅苦しい街のように見えますが、平和なときは、海外からの窓口のひとつであることに変わりはなく、外国の真新しい文化が吹き込む街で、軍人以外の住む地域は、おしゃれな西洋風の街並みが広がっていました。

とくに、この国が戦争に負けると（この国は、外国との戦争に負けて、一時期、外国に占領されていたことがあるのです）この街に、外国の軍艦や軍人さんが大勢やってきました。

もちろん、この国は、すぐに平和的に独立し、占領軍は帰っていきましたが、港だけは、外国の軍艦の港として使われ、大勢の外国人がこの街に残り、住み着く人も大勢いました。

そんなわけで、今も、この街には外国人相手のお店が多く、その街並みのかっこよさに、多くの若者たちが、やって来るようになりました。

けれど、全世界が不景気な時代がやってきて、外国の海軍の大きさが縮小されると、不要になった空母や潜水艦が港に置き去りにされました。

さびつくままの船を、放ってはおけず、ほとんどの船が分解されましたが、空母や潜水艦のエンジンだけは、処分できませんでした。空母や潜水艦のエンジンを動かす燃料を捨てる場所がなく、さらにエンジンが出した燃料の燃えカスを捨てる場所もほかになかったからで

す。

そこで、エンジンを街の発電に使うことになりました。

それ以来、この街の電気代はエンジンの手入れ代だけ……この国でいちばん電気代の安い街のひとつになりました。

電気が使い放題ですから、クチバシティの別名は電気の街ともいわれます。

その代わり、燃料の燃えカスは、この街の地下に埋められることになりました。

自分で使ったものは自分で責任を持て……ということです。

この街には、外国の軍隊が残した外国風の街並みも含めて、さまざまな名所がありますが、なんといってもいち押しはエンプラビルでしょう。

港に来ればひと目でわかる巨大な建物です。

昔、世界一の空母といわれたエンタープライズ号（宇宙船ではありません。海を進む空母）を、そのまま港の先に固定して、総合ビルとして利用している建物で、電気まんじゅう（エンジンの蒸気で蒸かしたまんじゅう）や電気パン（電気トースターで焼いたトースト）などを売るおみやげ屋から、ホテル、ポケモンジムまで、何から何までそろっています。一度、その中に入れば、二度と外に出なくても一生すごせるといわれているほどです。

ただ最近、船体外部のサビが激しく、いつ崩れるかわからないという専門家もいて、見学をするなら今のうちです。

※

見れば見るほど大きな建物だ。
「昔は、こんな大きなものが、海を走っていたんだなあ」
タケシが地図を見ながらため息をもらした。
サトシたちは、今、クチバシティのエンプラビルの前にいた。
「この中にポケモンジムがあるんだ……」
ジムに挑戦したかった。
しかし、今のメンバーで勝てるのか？……
「なんか、さっきから髪が気になるのよね……なんなの、この天然パーマ」
カスミが短い髪をなでつけながら言った。
カスミの髪の毛が、ぱらぱらと逆立っている。
「なるほど、カスミちゃんは感じやすいんだな」タケシが言った。
「え？　何のこと？」
タケシは、地図に書いてあるガイドを読みながら言った。
「その髪はたぶん静電気のせいだろう……あのビルは何から何まで電気で動いている。昔、空母だった船のエンジンがいまだに発電しているんだ。その電気がいたるところにたまっている。もちろん、しっかり絶縁はされているが、人によっては、たまに感じるらしい。もっ

とも、その気分は、電気あんまのように、心地いいらしい……カスミちゃん……いい気持ち？」
「そういえば、なんだか、胸のあたりがジンジンしびれて……こういうのがいい気持ちなのかな？」
「ぴか！」
それに答えるように、いきなり足もとでピカチュウが鳴いた。
電気を感じるなら、当然、カスミ以上にピカチュウだ。
さっきから、心地よさというより、気の遠くなるようないい気分だった。
ピカチュウにとって、エンプラビルは夢のお城のように思えた。
「おい！　ピカチュウ、どこにいくんだ！」サトシが叫んだ。
ピカチュウは、誘われるように、エンプラビルに向かって駆けだしていた。
こういうとき、何を言ってもピカチュウは止まらない。
サトシたちは、ピカチュウのあとを追うしかなかった。

※

船の横腹を大きく開けた、エンプラビルの正面門をくぐり抜けたピカチュウは、ホールにあるおみやげ屋には、目もくれず、地下へ行く階段を降りていった。
サトシとタケシも追いかける。

「ちょっと、待ってよ」
二人のあとを付いてきたカスミの髪の毛が、いきなり針千本のように逆立った。
「きゃ！　どうしちゃったの」
階段の下り口に、看板がかかっている。
「……クチバジムはこちら……強電界地域ですが、人体には影響ありません。髪の毛などの乱れが気になる方は、二階のエンプラヘアサロンが、おすすめです」
……………ここが、クチバジム……人体に影響ないならいいか……なんとなく、気持ちよくなってきたし……
カスミは、体中の髪の毛の先を震わせながら、階段を降りていった。

※

「あー、あいつらだわ」
おみやげ屋の店員の一人が階段を指さして叫んだ。
「とうとうここまでやってきたのか」
客に電気まんじゅうを売っていたもう一人がうなずいた。
ムサシとコジロウである。
「ニャーも目が覚めた」
売り場で実物大のポケモンのヌイグルミに混じって、うとうとしていたニャースが、むっ

くりと動きだした。
ロケット団の二人と一匹は別に、サトシたちを待ち伏せしていたわけではない。
ハナダシティを逃げ出したロケット団は、やっとのことでこの街にたどりついたが、次の給料日までは、無一文だった。
仕方なく、二人は、一週間前から、アルバイトをしていたのである。
食費も売れ残りの電気まんじゅうを食べていれば、節約できる。
だが、偶然としても、今や宿敵となったサトシたちが通り過ぎたとなっては、本来の使命がむくむくと沸き上がってくる。
二人は、売店を抜け出して、サトシたちのあとを追った。

※

階段は長かった。
五階分ほど地下に降り、そこに広いフロアがあった。
「こんなのありかよ」
フロアを見て、荒い息を吐きながら駆け降りてきたサトシは、がっくりした。
エレベーターが四台もあったのだ。……ピカチュウ、エレベーターで降りればいいのに
……
だが、ピカチュウは、サトシの気持ちなどおかまいなしで、フロアの奥に入っていく。

「ピカチュウ、どこに行く気だ」
ネオンで飾られた奥の入り口には、……ウェルカム　クチバジム……外国語とヒラガナで、書かれている。
「クチバジム……」
夢中になってピカチュウを追いかけていたサトシは、初めてそこがクチバジムだと知った。
「あの……ごめんください」
サトシは、入り口からのぞき込むようにして言った。
いきなりネオンが点滅して、スポットライトが、サトシとピカチュウにあてられた。
「ウェルカム、クチバジム」
外国人の声がして、目の前の壁が降りていく。
壁の向こうに、サトシたちが入ってきたエンプラビルのホールより広い客席とグラウンドが現れた。床は、人工芝のようなものが敷き詰められている。どうやら、床は電気を通さない絶縁体でできているようだ。
「これが、噂のクチバジムか……」
タケシが、ため息をもらした。
「昔、このビルは、飛行機をたくさん積んでいる空母だった。このジムは、飛行機の格納庫のひとつを、利用したものらしい」
これも、地図に書いてある説明の受け売りだ。

「ここ、たまんないわ」
体を小刻みに震わせて、うっとりとした表情のカスミがつぶやいた。
ジムの天井から壁、床、全体から電気を感じるのだ。
ほとんど体は、電気マッサージ椅子(いす)に乗せられたような状態だ。
ピカチュウはうっとりという表現を通り過ぎて、酔っ払ったように体をゆすっている。
「ウェルカム……ボーイ。入門者は、この書類にサインをしてくださーい」
少しなまった発音で、金髪をした外国人の男が現れた。
ボディビルでもしているのか、トレーニングシャツからあふれ出るような筋肉がムキムキだ。
男はにっこりと微笑(ほほえ)みながら、申し込み用紙を出す。
「お月謝は、年払いだと一割引きでーす」
「オレ、入門に来たんじゃないです」
あわてて、サトシは答えた。
「オレ、トレーナー志望です。バッジだって、二つ持っています」
「バッジを二つ？　ってことはぼうやはチャレンジャー……ちょうせんしゃ？」
ここまで来たらサトシも引き下がれない。
「ま、そんなもんです……」
「ぷーふあふあふあ！」

いきなり、男は吹き出して笑った。

「なにがおかしいんだ」

「身の程知らずもいいとこだ。やめておけ、ぼうや」

サトシは頭に来た。持っている二つのバッジが、サトシとしてはすっきりと勝って取ったものではない焦りもあった。

「ジムは、挑戦されたら受けて立つのが決まりだろう！」サトシは叫んだ。

男は肩をすくめた。

「そこまで言われたら仕方ないな」

男は携帯電話をかけた。

「リーダー……チャレンジャーです。なんと、挑戦者のポケモンはピカチュウのようです」

「ぐあはははは……」

いきなり、高笑いがジムの全体に響きわたった。

床の一部が開き、大男が腰掛けたソファが上がってきた。ソファには、電線やコイルやネオンが巻き付き光っている。ほとんど、電気椅子だ。

「わたしが、このジムのリーダー、マチスでーす」やはり、どこか外国なまりがある。

大男が立ち上がった。さっきの男の二倍近くもある外国人だ。胸の筋肉も二倍はある。

「うちのジムには、入門者以外のピカチュウは立ち入りを断ってます。だから、ぼうやを入門者と間違えた」

「ピカチュウの立ち入りを断っている？　なぜ？」
「弱すぎるからでーす。クチバジムは、電気系のジムでーす。電気系で挑戦するなら、弱いねずみポケモンでも、せめて、これでなくっちゃ」
ソファの後ろから、のっそりとだいだい色のポケモンが現れた。
「ピカチュウの進化形、ライチュウでーす」
「……ピカチュウの進化形……」
その姿はピカチュウに似ているが、背丈は二倍、胴回り四倍、体重は五倍以上ある。
「ライチュウの電撃は並のピカチュウの十倍……やめるなら今のうちです。ぼうやのかわいいピカチュウは、せめて、ライチュウに進化させてからチャレンジしてくださーい」
確かに、ピカチュウとライチュウでは、見比べただけでどちらが強いかわかる。
姿かたちが似ているだけに、誰の目にも明らかだ。
ライチュウは二分の一の背丈のピカチュウを見下ろした。
「ライ、ライライ　ライチュウ……」うなるような声を出した。この電気の城は……お前のようなチビの来るところではない……ここはわたしの領域（なわばり）だ……
ピカチュウは、ライチュウの言葉を理解してはいない。だが、こんなときに発する意味はわかる。
ライチュウは、鼻でせせら笑うと、ゆっくりとしっぽを巻いて見せ、さらにしっぽの先で出口を指した。

ねずみポケモンが、しっぽを巻くのは、相手に負けた証拠だ。……あなたにはかないません、許してください……ごめんなさい……の意味だ。

つまり……今の場合、ライチュウの言いたいのは………とっとと、しっぽを巻いて出ていけ！……だった。

「ぴか？」……なんだと……

ピカチュウはライチュウをにらみ返した。頰の電気袋が、かすかに光った。

ピカチュウは研究所育ちだけにまだまだ世間知らずだ。

だが、これだけは本能的に知っている。

生物の領域（なわばり）を決めるのは、実力だ。自分の領域から追い出すか？　追い出されるか？　は、力が決める。

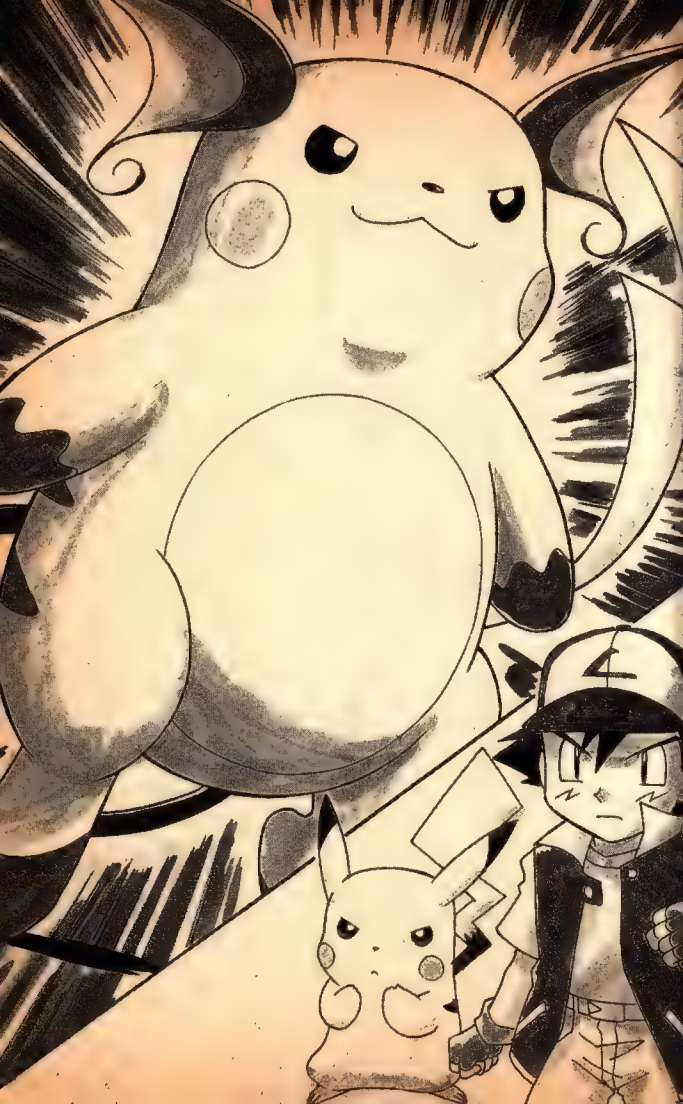
そして、ここは電気に満ちあふれている。気持ちのよい場所だ。

事実、ねずみポケモンのピカチュウやライチュウは、ここに限らず発電施設の近くには多く繁殖しているという。

ピカチュウはもう少し、ここにいたかった。

それにライチュウが、自分の進化形で、二倍の背丈があったとしても、ニビジムでは、比べものにならないほど大きなイワークに勝った覚えのあるピカチュウだ。

勝つか負けるかやってみるまでわからない……と思っている。

マチスがサトシに言った。

「それとも、ぼうやのピカチュウを、このライチュウの弟子にしますか。このクチバジムなら、一カ月で、丈夫で長持ち、立派なライチュウに進化させてやりまーす」
「なんだと」サトシは、悔しくて、くちびるを噛みしめた。
ライチュウは、ピカチュウを鼻でせせら笑った。もう一度、これ見よがしに、しっぽを巻いた。それから、しっぽの先で、からかうようにピカチュウの鼻を突っついた。……いいか、出ていくときに、忘れずしっぽを巻いて出ていくんだぞ……
ここまで馬鹿にされて、黙っているピカチュウではなかった。
「ピカ!」
いきなり、電撃が走った。
ライチュウは、ピカチュウの電撃を浴び、火花と光の渦に包まれた。
サトシは、あわてた。試合開始の合図もないうちに攻撃してしまったのだ。
「あ、あ、よせ! ピカチュウ。それって不意討ち……」
だが、マチスは肩をすくめて微笑んだ。
「なかなか元気のいいピカチュウでーす。それだけは、認めてやりまーす。バット(しかし)、パワー不足」
火花と光の渦がおさまった。ライチュウは、何事もなかったように、指の先で、頬の電気袋をぼりぼりとかいていた。
マチスは、サトシに言った。

「パワーの差を見せないと、あきらめてくれないようですね」
そして、ライチュウに命じた。
「ライチュウ！　本物の十万ボルトを見せてやれ」
ライチュウから閃光が走った。
ピカチュウは身構えた。いや、身構えたつもりだった。
だが、そのままの姿で、後ろに吹き飛ばされた。
体の中にたたき込まれた電気が、みるみる膨れ上がっていく。ピカチュウはまるで光の玉だ。
ピカチュウが覚えているのはそこまでだ。意識を失ったピカチュウの体は、ジムの入り口から、フロアのエレベーターの扉に激突し、さらに跳ね返って、五階分の階段を上がり、一階のおみやげ屋のヌイグルミ売り場まで、後ろ向きに吹き飛ばされた。
止まったときには、ほかのピカチュウのヌイグルミと見分けがつかなかった。ぴくりとも動かなかった。
マチスは、ぼう然と立ちすくんでいるサトシに言った。
「この街のポケモンセンターは、港の見える丘にある。あのピカチュウ、運がよければ助かるだろう」
「急げ！　サトシ！　カスミ！」
タケシは、動けないでいるサトシの腕と、これまた、電気にしびれて動けないカスミの腕

を引きずるようにしてジムから飛び出した。

※

「あらら、一発でやられちゃったわ」
始めから終わりまでジムの出来事を、物陰から見ていたムサシもあっけにとられていた。
「あれが、我らロケット団のエリートを、日夜悩ませ続けてきた宿敵の、本当の姿だというのか」
コジロウが、手帳の日記を確認しながら言った。
「この日も、あのピカチュウは強かった。この日も強かった。あの日も、あのときも、したたかに強かった。だからこそ、我々は、あのピカチュウを珍しいポケモンだと信じたのに……」
ニャースが肩をすくめた。
「ライチュウに負けるのは並のピカチュウ。……ちっとも珍しくないにゃー」
「じゃー、お前さん、私たちがあのピカチュウを捕まえようとしていたのは、むだな努力だってーの」
ムサシは、ニャースの首根っこをつかんで食いつくようにわめいた。
「待って！　まずいニャー」息を詰まらせながらニャースが答えた。
「まずい？　いくら、お金がなくてお腹が減っていても、お前なんかを食べようなんて思わ

ないわよ！　煮ても焼いても食えないくせに」
ムサシは、ニャースを放り出した。
「ちがうにゃ！　まずいのは……ロケット団のボスに知られることにゃ。珍しくもない普通のピカチュウのために、大切な勤務時間をむだに使ったとにゃったら、給料を前借りまでしているおみゃーらは……」
ムサシとコジロウは絶叫した。
「やーなかんじ――――！」
二人と一匹にとって、サトシのピカチュウは絶対に珍しいポケモンでなければならなかった。

※

マチスに言われたとおり、港の見える丘にあるポケモンセンターに、サトシたちはピカチュウを運び込んだ。
体中、かすり傷だらけだったが、さいわい、命には別条がなかった。
このポケモンセンターのジョーイさんは、ハナダジムのジョーイの従姉妹だそうだが……ピカチュウがいくら電気系の体だとしても、ライチュウの十万ボルトを、これだけ、もろに浴びて、失神ですんだのは奇跡だと言う。
「クチバジムのトレーナーのご先祖は、戦争帰りで失業した軍人さんだから、何かと荒っぽ

くてね。手加減を知らないの。ライオンはネズミを倒すにも全力をつくす……なんちゃって……。ま、この場合は大きなねずみポケモンが普通のねずみポケモンを倒す、だけれどもね……ともかく試合で、やりすぎが多いのよ。さっそく、わたしから注意するわ」
「いえ、いいんです」サトシは、断った。
「え？」ジョーイが聞き返した。
「ともかく、いいんです。はい」
あれは、試合にすらなっていない。
まさか、ピカチュウのほうから、先に手を出したケンカだったとは言えなかった。
あれでは、どんな目にあっても文句は言えない。
そして、ピカチュウが目を覚ましたのは、次の日の午後だった。
寝かされている救護カゴのある病室の窓から、港の埠頭にあるエンプラビルが霧にかすんで見えた。
今にも、雨の降りそうな空だ。
だが、ピカチュウの胸の中は、惨めさですでに小雨が降っていた。
「よかった。目が覚めて……オレもムチャな奴だけど、お前もそうとうムチャだよなあ」
サトシがやさしく声をかけた。
ピカチュウは何も答えずエンプラビルを見つめている。
サトシには、ピカチュウの気持ちがわかるような気がした。

……悔しくて、悔しくて、悔しくて……オレだって同じだ……でも、あのライチュウに勝てるはずがないのも確かだ。
「ピカチュウ。今回はあきらめよう。もっと、もっと力をつけて、いつかきっと再挑戦しような」
ピカチュウは、ゆっくりと首を振った。
「いやだ？　いやだっていうのか？」サトシが聞いた。
ピカチュウは、うなずいた。
そして、窓の外のエンプラビルを指さしするどく鳴いた。
「ピカピー！」
ピカチュウはサトシを見上げた。
ピカチュウの目は真剣だった。
頬（ほお）の電気袋が、ちりちりと火花をあげた。
怒りと闘志がみなぎっていた。
「まさか……お前……今？　今日、挑戦するっていうのか？」
ピカチュウはうなずいた。何度も何度もうなずいた。……オレだって同じさ。試合にもならないうちにやられて、すごすごとあきらめるなんていやだ。こっちも不意討（ふいう）ちだったけど、あっちの十万ボルトだっていきなりだった。
ケンカには負けたかもしれないけれど、まだ試合に負けたわけじゃない。……

しかし、サトシは思った。
……これは、へ理屈だ。
これほど力の差を見せつけられて、それでも、試合に挑戦するのはただの意地っ張り……
いや、信じられない意地っ張りだ。ほとんど馬鹿そのものの意地っ張りだ。
ポケモントレーナーは、自分のポケモンを戦わせる。育てる。でも、守るのも大事だ。
サトシの中に、少しだけ、トレーナーの自覚のようなものが生まれていた。
サトシはピカチュウに首を振った。
「だめだ。勝ち目のない試合に、お前を出すわけには行かないよ。オレは、これ以上、お前を、傷つけるわけにはいかない」
ピカチュウはじっと、サトシの目を見つめた。
頬の電気袋から火花は消えていた。先刻の怒りは消えていた。
ピカチュウの瞳は、少し悲しそうで、それでも、しっかりとサトシの目を見つめていた。
……ボクの気持ちをわかってくれないの？　このまま逃げたら、ボクは卑怯者だ。ボクをしっぽを巻いて逃げる負けピカチュウにしたいの？　ボクは、まだ、しっぽを巻いちゃあいないのに……
サトシにはピカチュウの瞳が、まるで、そう言い続けているような気がした。……自分のポケモンの本当にやりたいことを、やらせてあげるのもトレーナーにとって大切なことなのかもしれない……。まして、それが、ピカチュウのプライド（誇り）にかかわることならば

……

「どうしても、挑戦したいのかい？」

ピカチュウはうなずかなかった。

だが……目を見ればわかるでしょう？……と、言いたげだった。少なくともサトシはそう思った。

「わかったよ……」サトシは、うなずいた。

そして、大きくため息をついた。

「けど、今のままじゃ勝てないことも確かだ。ぼろぼろにやられちゃうことも、たぶん確かだ。オレ、そんなピカチュウを、見たくない……だから、今のオレにできることは……」

サトシには、たったひとつだけ、心当たりがあった。

サトシは、ポケットをまさぐった。

小石を取り出した。

ニビシティの博物館で老人からもらった石だ。

「ちょっと、それって！　雷の石でしょう？」

サトシとピカチュウの後ろにいたカスミが叫んだ。

今まで、珍しく黙っていたのは、エンプラビルでのしびれが、取れなかったからかもしれない。

だが、雷の石を見せられたらしゃしゃり出るしかない。

「ああ、雷の石さ……」サトシは元気なく言った。
「ピカチュウをライチュウに進化させる気？」カスミは信じられないとでもいうように首を振った。

※

「ひえっ！」
病室の窓の外から、小さな悲鳴がした。
窓辺の花びんに盗聴器が仕掛けられていて、窓の見える木の枝の上で、ロケット団の二人とニャースが、ヘッドフォンをつけて盗聴していたのだ。
「ちょっと、ピカチュウがライチュウになっちゃったら……」悲鳴を上げたムサシが、コジロウの首根っこをゆすった。
「ムサシと同じで……強くてあたりまえ」息を詰まらせながらコジロウが答えた。
「ますます、普通のポケモンにゃ……」ニャースがぽっとため息をついた。
そして、顔をよせてつぶやいた。
「ほとんど、完璧、やなかんじ――！」

※

「そりゃ、ライチュウになれば、ライチュウには負けないかもしれない。でも、それってど

ういうことか、あんたにわかってんの？」カスミはサトシにつめ寄った。
「……一度進化させたら、元のピカチュウには戻れない。言われなくてもわかってるさ！」
サトシが吐き捨てるように叫んだ。
「それに……」タケシがサトシの気持ちを落ち着かせるように言った。
「急激にライチュウにすると、体が電気に付いていけないかもしれない」
「それはどうかな？」
病室のほかのポケモンを見回っていたジョーイが、サトシたちに振り返って言った。
「え？」
「ごめん、話が耳に入っちゃった。そのピカチュウは、ライチュウの十万ボルトを浴びても気絶しただけだったわ。強い電気に耐えられる体質なのかもしれないわ」
「わたしが電気に弱い体質なように？……」カスミが聞き返した。
「たぶん、あなたは電気に弱いんじゃないわ。電気に感じる体質なの。人間だっていろいろな体質がある。ピカチュウにだっていろいろな体質があって当然よね。何事も教科書どおりにはいかないわ」
「ともかく、オレは……」サトシが言った。
「ピカチュウが好きだ。ピカチュウのままでいてほしい。けど、ピカチュウはライチュウと戦いたい。オレはピカチュウを傷つけたくない。オレのできることは、これしかない」
サトシは、一気にそこまで言って、帽子のひさしを深くかぶった。

人に見られたくないものが、目から出てくるような気がしたのだ。
サトシは、雷の石をピカチュウの前に出した。
「ピカチュウ、これ、使っていいよ」
いきなりしっぽで雷の石を見つめた。
ピカチュウは雷の石を、窓の外へはじき飛ばした。
「え？」サトシはピカチュウを見つめた。
ピカチュウはサトシの顔を見上げ、首を振りながら、早口で鳴き始めた。
「ぴかぴかぴかぴかぴかぴか、ぴかぴかぴかぴかぴかぴか……」

※

ムサシの顔面に、ピカチュウのはじいた雷の石がぶつかった。
「いてててて……顔は女性アナウンサーと声優の命なのにい……わたし、泣くわ」
ハナダシティで、三姉妹にあこがれのまなざしで見られてから、アナウンサー気分が持続していたらしい。
ニャースはムサシのことなどまるで取りあわず、ヘッドフォンを押さえて涙を流している。
「にゃー！　あいつ、ネズミのくせに偉い奴にゃー。ニャーを泣かせるニャー……ピカチュウは、こう言ってるにゃー。ライチュウに勝つには、ピカチュウのままでなきゃだめだ。ピカチュウのプライドを守るには、ピカチュウのままで勝たなけりゃ意味がない……」

「ピカチュウのまま挑戦するっての？」コジロウがニャースに聞いた。
「今どき、珍しいピカチュウにゃ」ニャースは自分のことのようにうなずいた。
「さすが、わたしの見込んだピカチュウ、いい男だねえ」ムサシもとっくに泣いていた。
そこまで感激してみて、ふと、ムサシとコジロウは気がついた。
「ニャース、あんた、ほかのポケモンの言葉がわかるの？」ムサシが聞いた。
「いろいろ勉強したニャース。にゃーは、今どき、珍しいニャースにゃ」ニャースは遠くを見る目で、つぶやいた。
「お互い、みんな、苦労したんだねえ」
二人と一匹は、木の枝の上で抱きあって、おいおい泣いた。

※

港の見える丘の小道を、サトシとピカチュウが降りてくる。
「サトシとピカチュウだけで行くって言うのか？」
ポケモンセンターの玄関でタケシが聞いた。
「これは、オレとピカチュウの問題なんだ」
サトシは、タケシが付いてくるのを断った。
「本当にだいじょうぶ？」
ポケモンセンターの門の前で、カスミが念を押した。

「今日だけは、オレたちのわがままを通させてくれ」
サトシが答えた。
「あんたに聞いてないわ。わたしはピカチュウに聞いてんの」
カスミにそう言われて、サトシは少しだけよろけた。
しかし、ピカチュウはしっかりした足取りで……「ぴか！」と、カスミに、うなずいた。

※

どこかで、雷の鳴る音がした。
ポケモンセンターにいたときから雲行きが悪かったが、サトシとピカチュウが港の街角に来たころには、空は真っ暗になり、ぽつりぽつりと雨が降りだした。
そして、雨はすぐにどしゃぶりになった。
それでも、サトシとピカチュウは、前方にかすむエンプラビルをにらみつけるようにして歩いていった。
街路灯の下に、傘を差した二人の人影がいた。
ぽっくりをはいた芸者さんと、げたをはいた着物の男だ。
サトシとピカチュウが通りかかると、二人が、そっと傘をさしかけた。
「何も言わねえでください。あなたさんにゃ、何の縁もゆかりもございませんが、これも、通りがかりの義理、そこまでお供させていただきます」

着物の男……それは、変装したムサシだった。
「大切な勝負の前に、風邪をひいちゃいけませんわ」芸者さんはコジロウの変装だった。
「暗い足もとを、うちの座敷ワラシが照らしましょう」雨がっぱを来て懐中電灯を持った子供が、道を照らしながらちょこちょこ歩いている。もちろん、ニャースの変装だ。
大きな声ではいえないが、ロケット団としては、さりげない応援のつもりだった。
だが、サトシは何も答えなかった。
クチバジムの試合のことで、頭がいっぱいで、雨も傘も見えていなかったのだ。
サトシとピカチュウを雨から守るロケット団の傘は、街から、ふきっさらしの波止場にできた。
エンプラビルはすぐそこだ。
どかーん！
近くで雷が落ちた。
「あらら……雷に二本の傘、あたりに高いところもエンプラビルだけ。ちょっとこれ、まずくない？」ムサシがコジロウにささやいた。
「どうして？」コジロウが聞き返した。
「馬鹿ね！　私たち、ほとんど避雷針状態……」
「避雷針？」
「雷が落ちやすいところよ」

頭上で雷が走った。目の前に近づいたエンプラビルの屋上に雷が吸い込まれていく。
どかーん！
「ひえええええ」ムサシとコジロウは、傘を投げ捨て、すくみ上がった。
「次に落ちるのはニャーたちかも……」ニャースは懐中電灯を放り出した。
「では、ごいっしょはここまで」
「おたっしゃで！」
転がるように逃げ出した。
どかーん！　どかーん！　どかーん！
雷が、三回、波止場に落ちた。
雷というものは、逃げれば逃げるほど追いかけるもののようである。
そのときの雷が、波止場のどこに落ちたかは不明だが、
「やなかんじ――――！」という悲鳴が、かすかに三回、聞こえた。
だが、目の前のエンプラビルをにらみつけて歩くサトシには何も聞こえなかった。
ただし、その日から、売店に勤めていた怠け者のアルバイトが、二人いなくなったのは確かである。

※

「遅いわねえ……」

カスミの髪の毛はやっぱり逆立っている。
「この雨じゃ濡れねずみだぞ。同じ電気系じゃ、水に濡れたって、ちっとも有利じゃない」
水を使って、ピカチュウにイワークを倒されたタケシが肩をすくめた。
ここはエンプラビル。クチバジムの客席には、タケシとカスミが、とっくに座っていた。
「誰の助けも借りないって、意気がっちゃってさ」
「ポケモンセンター発、波止場行きってバスがあるのにな」
「一人歩きしたい年ごろなんでしょ。結局、子供なのよ」
そのときだった。
「たのもう！　先日お預けになったジム戦、対戦をお願いする」
びしょぬれになったサトシとピカチュウが、入ってきた。
「本気なのかーね。ぼうや」
床がせり上がって、マチスとライチュウが出てきた。
「本気って？　オレは二つのバッジを持つマサラタウンのサトシだ。冗談で人のジムなどに来ない」
「そこのミニレディ（小さな婦人）とミドルヤング（中年少年）から話は聞いた」
マチスが客席のカスミとタケシを指さした。
「いつの間に……」サトシはぽかんと口を開け、はっと我に返ってからカスミたちに聞いた。
「余計なこと、言ってないよな」

「余計なこと？」カスミが聞き返した。
「たとえば、相手がピカチュウだから……手加減してくれなんて……」
「手加減はしませーん！」マチスが、ぴしりと言った。
「しかし、本当に、ピカチュウでいいんですーね？」
「いくら、いつもは弱いから断っているピカチュウだからって、挑戦者のピカチュウまで、断る法律はないはずだろう」サトシが言い返した。
「そのとおりです。ただ、わたしの胸が少し、ブロークン……痛むだけでーす」
「同情はいらない。オレには作戦がある」
「あの子に、作戦なんかあったっけ？」カスミが首をひねった。
「作戦？　ピカチュウがライチュウに勝つ作戦？」マチスは少しだけ興味を持ったようだ。
「よろしーい。チャレンジ受けましょう。使用ポケモンは一体でーす。ライチュウ、お相手しろ！」
ライチュウが、のっそりと進み出た。
「ピカチュウ。がんばれよ！」
ピカチュウは、うなずいて身構えた。
試合開始の汽笛の音が鳴った。
建物のもともとが、船だっただけに、開始の合図もそれらしい。
「ピカチュウ、オレの作戦は……思う存分、お前の好きにやれ！　オレは何にも命令しな

い」

ピカチュウは、いきなりジムのグラウンドを走りだした。

「お前の好きにやれって……それが、作戦なわけ？」カスミがため息をついた。

「まあ、サトシなら、何も命令しないほうがましかもしれないなあ……うん、これはいい作戦なのかもしれない」タケシは自分を納得させようと何度もうなずいた。

ピカチュウは、電撃を武器に使わなかった。ピカチュウは体にある電気エネルギーを、すべて、自分の動きの速さだけに使った。

ライチュウの足の間を駆け抜け、頭上を走り抜け、スキを見つけては、しっぽの先でライチュウの目を、耳を、鼻をたたき続けた。

目をやられればかすんでくる。耳をやられれば聞こえなくなる。鼻をやられればピカチュウの匂いがわらなくなる。

「ええい！　ちょこまかとうるさい奴。十万ボルトだ！」

ライチュウが、十万ボルトを発射する。

ピカチュウはよけなかった。

「ピカチュウ、なぜ！」

サトシとカスミとタケシは息を飲んだ。

ピカチュウは十万ボルトの直撃を受ける寸前、一瞬速くしっぽを直立させ、ドリルのように回転させた。

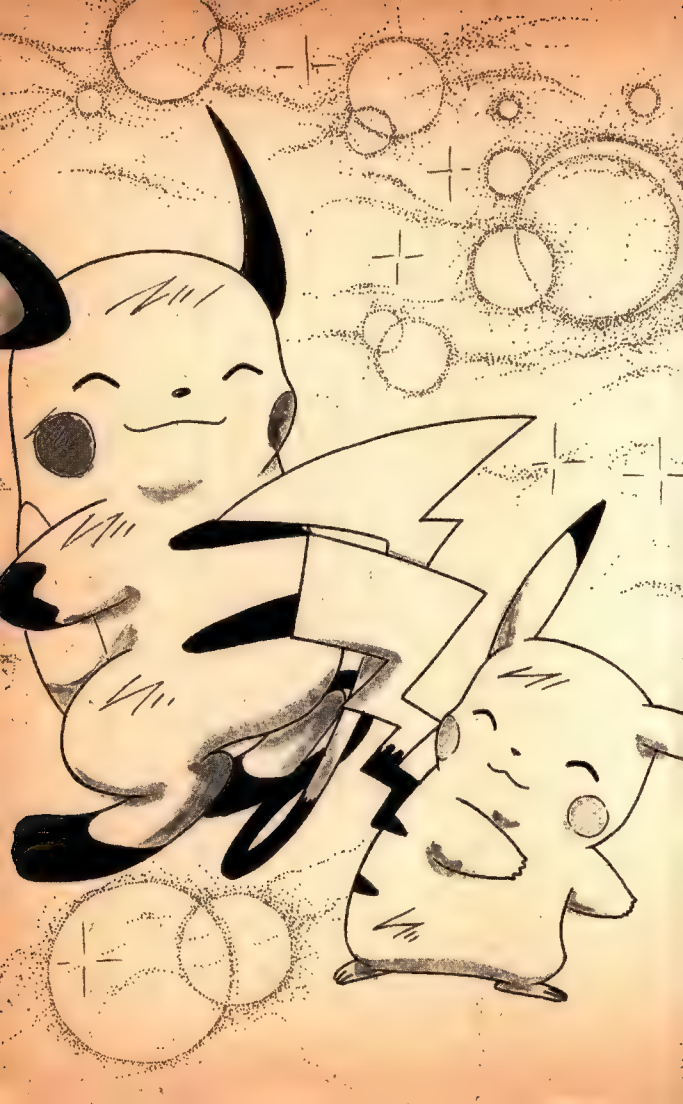
床に穴が開き、下の金属にしっぽが触れた。
元は空母だったエンプラビルの船体だ。
ピカチュウの頭から降りかかった十万ボルトの電気が、巨大な船体に逃げた。
ビル全体が、かすかに光ったが、十万ボルトなど、エンプラビルのエンジンが発電し続ける電力に比べたらわずかなものだ。
逆に発電機の電力と交じりあい、吸収されてしまった。
もちろん、ピカチュウ自身の体に、異常もなかった。
「そうか！　ピカチュウは自分の体を、避雷針にして、電気を受け流したんだ」
タケシが興奮して説明した。
「なんだか知らないが、すごいぞ！　ピカチュウ！」サトシはガッツポーズだ。
ライチュウは二度、三度、十万ボルトをくり返すが、結果は同じだ。
そのたびに、ビル全体が少し光るだけだ。
「でも、これってけっこう、効くわ……いい感じ」カスミが体を震わせてつぶやいた。
このジムの中で、ライチュウの十万ボルトを感じているのは、カスミだけらしかった。
ライチュウは、十万ボルトを放電するたびに、荒い息になってくる。
放電の間隔も長くなってくる。足ももつれてきた。
「ライチュウが疲れてきた。充電時間がかかるようになってきたぞ。ピカチュウは……サトシは、勝てるかも！」

タケシは、自分が戦っているような気持ちになって、こぶしを握りしめた。
マチスが、じれて叫んだ。
「ええい。ライチュウ！　電気がだめなら、お前の巨体でピカチュウを押しつぶせ！」
ライチュウは、かすむ目でピカチュウめがけ、巨体を投げ出した。
だが、素早いピカチュウが押しつぶされるはずもない。
ライチュウの巨体は、空を切って、床にぶちあたった。
これでは、自分で自分の体を痛めつけているようなものだ。
それでも、ふらふらと立ち上がり、ピカチュウがいるはずの壁をめがけ、床をめがけ、体当たりをくり返す。
ピカチュウの体にはかすりもしない。
タケシは、頼まれもしないのに解説をはじめた。
「これが、クチバジムのライチュウの弱点だ。エンプラビルがいくら大きいといっても、グラウンドの広さは限られる。電気は豊富だから訓練すれば力は強くなる。しかし、素早く動き、速く走る練習には限度がある」
サトシにも、ピカチュウの戦い方が理解できた。
「ピカチュウ、そこを右だ。そこ、上！　いいぞ、高速移動だ！」
ピカチュウの動きに合わせ、動きと技を口ずさむうちに、まるで、サトシ本人が、指示しているようにタイミングが合ってきた。

「そして、電光石火……体当たりだ！」
サトシの声にぴったり合わせるように、ピカチュウの体当たりが、ライチュウの腹に食い込んだとき、ライチュウは気絶した。
ライチュウはゆっくりと仰向けに倒れ、動かなくなった。
「おーう！　信じられなーい！」
マチスは、頭を抱え絶叫した。
ライチュウが失神しているのを確認したピカチュウの体から、やっと力が抜けた。
疲れた体に、エンプラビルにあふれる電気が、心地よかった。
でも、そこはもう、ピカチュウがあこがれた夢のお城には思えなかった。
サトシが、帽子のひさしを下げて、顔を隠して立っている。
サトシが、何を隠したいのか、ピカチュウにはわかっていた。
サトシとこれから行く旅の先に、ここよりもっと素敵なところがあるような気がした。
ピカチュウは、サトシの足もとに駆けていった。

※

さっきとは、うって変わったにこやかな表情でマチスが、バッジをサトシに渡してくれた。
「おめでとう。サトシ、アンド、ピカチュウ。わたしとわたしのライチュウは全力をつくした。この敗北に悔いはなーい。これが、クチバジムのオレンジバッジ……クチバ色よりちょ

っと明るいオレンジ色ね。きっと、キミの未来は明るいね」
「ありがとう。サンキュー、メルシー」
サトシは、ありとあらゆる国の言葉で、ありがとうをいいたかったが、思い付いたのはそれぐらいだった。
サトシにとって、初めて勝利の実感があるバッジだった。
もっとも、それはピカチュウの勝利だったかもしれない。
しかし、ピカチュウは、サトシのバッジにはまったく関心をしめさず、目を覚ましたライチュウの傷を気にしていた。
ライチュウは、伸ばしたしっぽをそっと、ピカチュウの前に出した。
それは、ねずみポケモンが、相手の力を認めている証拠だった。
けっして、しっぽを巻いたわけではない。だが、クチバジムのライチュウは、今まで、目もくれなかったピカチュウの存在を初めて認めたのだ。
ピカチュウもしっぽを伸ばして、ライチュウのしっぽを軽くたたいた。
進化前と進化後……しかし、それぞれ、別のポケモンが互いを認めあってそこに立っていた。
マチスはサトシと握手しながら言った。
「わたしもグッドな勉強になったが、わたしのライチュウにも勉強になったようだね」
「オレも勉強になった……でも、ともかく、オレンジバッジ……ゲットだぜ！」

「そうさ、ぼうや」
マチスがウインクした。
タケシの顔も、電気にしびれまくったカスミの顔も、なんとなく微笑んでいた。

※

人気のない、海辺の砂浜に、体をうずめた首が三つ並んでいる。
「こうやったら、本当に電気のしびれがとれるの？」ムサシである。
「確か、これでいいんだよ」コジロウがうなずく。
「にゃんか変だニャー？」ニャースが首をひねった。
いうまでもなく、砂の中に体を埋めたからといって、電気のしびれが取れるはずはない。フグを食べてしびれたときの毒の取り方に、これに似たものがあるそうだが、あまりあてにならないそうである。
しかし、三人とも、今は悪い感じではなかった。
ピカチュウとライチュウの勝敗の結果を、三人はまだ知らない。
「でも、あのピカチュウ、やっぱり、ただもんじゃないわよ」
「ロケット団がつけ狙っていい、珍しいポケモンだよね」
「決まってるわ。ああ、お仕事、続けられてよかった」
「並みのピカチュウでなくてよかった」

「にゃみといえばあのにゃみ」
「え？」
「あの波？」
「さっきより、近づいてにゃーか？」
「今、満ち潮？　引き潮？」
「あ、確かめてない」
波の音に、三人の悲鳴は聞こえなかった。

※

マサラタウンのサトシの母、ハナコはサトシの声を聞いた。
「ママ、三つめのバッジ、ゲットしたよ。じゃあね」
それは、やっぱり、留守番電話の録音だった。
素っ気ない電話だったが、声の調子を聞けば、サトシが今までいちばん喜んでいる姿が目に見えるようだった。
……なのに……大騒ぎしていないというのは……
「旅は、子供を大人にするってことなのかな……」
ちょっぴり、ハナコはさみしかった。

※

サトシたちは、次の街を目指し山を越えていた。

サトシの連れているポケモンは、ピカチュウ、ピジョン、バタフリーの三匹。ゲットしたバッジは三つ。

三匹で三つ。

誰もまだ気がついていないが、サトシは今のところこの地域で、もっとも少ないポケモンゲット数で、もっとも多いバッジをゲットした記録保持者だった。

それが、ポケモントレーナーを目指すものとしてほめられていいことかどうかはわからなかったが、少なくとも、さまざまな人たちといろいろなポケモンとの出会いが、まだまだ、目一杯、待ち受けていることは、期待できそうだった。

ポケットモンスター　THE ANIMATION　VOL．3に続く

付録（あとがきにかえて）

（……お急ぎの方はここで二巻はとりあえずおわりです。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれないお得な情報が書かれているかもしれません）

わたしの家には、かせきポケモン、カブトの着ぐるみがあります。

ほとんど本物に近い精密な着ぐるみです。表面には、本物の化石をちりばめてさえあります。

着ぐるみとは、普通、テレビのお子様向きの番組やショー、怪獣ものの特殊撮影などに使われる大きなヌイグルミのことで、中に人間が入って動かします。

だからといって、わたしは、テレビやショーに出るために、カブトの着ぐるみを持っているのではありません。

わたしは、人々の寝静まった深夜、とくに星の降るような夜は、カブトの着ぐるみの中に入って、じーっと考えているのです。

ほとんど、動きません。

もともと、かせきポケモン、カブトは海の底でじーっとして、ほとんど動かないポケモンだったといいます。

カブトは、大昔に絶滅したポケモンだといわれています。でも絶滅したポケモンだとしても、心はあったはずです。

いったい、彼らは海の底で、何を考えていたのでしょう。

ポケモンがどんな気持ちでこの星を生きていたか、知りたくて、着ぐるみの中に入って考えているのです。

そんなことが、何になるの?……とお笑いになる人もいるでしょう。

でも、しばらくすると着ぐるみの中のわたしは、とても落ち着いた気分になって、いつしか、カブトとわたしが、一体になったような気分になります。

大昔に絶滅したポケモンと同じ気分になる。

少なくともそんな気分にさせられるとはどういうことでしょう?

この星ができて四十六億年……さまざまな生き物が生まれ、それぞれが、いろいろな思いを持ってこの星を生きてきたはずです。

でも、生き物として、どこかで、同じ思いを持っていたのではないでしょうか。

それが、わたしの気持ちを、落ち着かせるのです。

現在、この世界で知られているポケモンは百五十匹を超えています。もちろん、これは、人間に知られているだけの数で、密林の中で、野原の中で、砂浜の中で、誰にも知られてい

ないポケモンはまだまだいっぱいいるはずです。そんな数知れぬポケモンにはそれぞれの生き方があり、それぞれの思いがあるのです。

しかし、大昔に絶滅したカブトの……しかも、着ぐるみの中ですら、一体感を持てるのです。

現存するポケモンと人間が、どこかで一体感を持てぬはずがありません。

その一体感がどんなものであるか……その謎を説き明かすことができれば、四十六億年、続いているこの星の生命とはなにか？……ポケモンとはなにか？……しいては人間とは何か？　までわかる気がするのです。

この世界には、幻のポケモンという言葉があります。

ポケモンを知る者の誰もが一度は、幻のポケモンを追い求めます。

幻のポケモンってこの世にどれぐらいいるのでしょう。

人の見る幻は数限りなくありますから、わたしたちの見る幻のポケモンも数限りなくいるのかもしれません。

でも、もしかしたら、たったひとつのものを、幻のポケモンと呼んでいるのかもしれません。

それは、わたしたちすべてに、この星に生まれたという一体感を持たせてくれるもの。

それが、幻のポケモンだと呼ばれているものなら、もはや、わたしは、幻のポケモンを幻とは呼べません。

なぜなら、それは、この世の中に、確かに存在していると信じているからです。
今、人間はさまざまなかたちで、ポケモンにアプローチしています。
ポケモントレーナーは、さまざまなポケモンを捕まえ、その扱い方、つきあい方を学んでいます。
ポケモン学者は、さまざまなポケモンを科学的に調べています。
それは、それでけっこうなことです。
でも、わたしはこの星に生きているポケモンという生き物の意味を考えています。
それは、わたしたちが、人間がなぜここにいるかを考えることにもなると思うからです
……
さて、もうこんな難しいお話はやめにしましょう。
あなたも一度、深夜に、ポケモンの着ぐるみの中に入ってみませんか?
素敵な一体感……あなたを、きっとやすらかな眠りに誘い込んでくれるでしょう。

安眠ポケモン着ぐるみふとん振興会
現在百種類
ペアでお買い求めになるとお得です。
安眠ポケモンまくらもおすすめです。

注意…これは、まぎらわしい宣伝である。
　前半部は、わたしの文章からの無断ばっすい。後半はポケモン哲学者たちの言葉を切り貼りしている。本文中の最後の四行だけが業者の書いたものである。
　当然、厳重な抗議をしたら、お詫びのしるしにと、さなぎポケモン、トランセルの形をした安眠まくらを送ってきた。まったく、世の中を勘違いしている連中としか思えない。
　困ったものである。

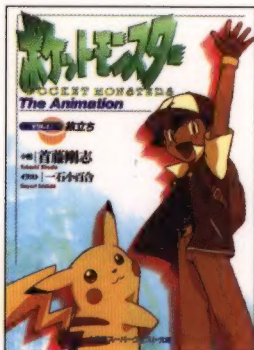
ポケモンアナリスト（分析家）　ソネザキマサキの回想メモよりばっすい

スーパークエスト文庫
ポケットモンスター THE ANIMATION VOL. 2

編集／
荒木洋平（新企画社）
中村公紀（小学館）

協力／吉川兆二

1999年11月1日　初版第1刷発行
定価はカバーに表示してあります。

著者
首藤剛志
発行者
河井常吉
発行所
株式会社　小学館
〒101-8001　東京都千代田区一ツ橋2-3-1
編集 03(5283)2650　販売 03(3230)5739
印刷所
共同印刷株式会社

ISBN4-09-440542-9

ISBN4-09-440542-9

C0193 ¥524E

定価：本体524円＋税

オレ、サトシ。マサラタウンを出て三日目、ニビシティに着いた。この街で、初めてのバッジをゲットしてやるぜ！

と意気込んだものの、ニビジムで現れた対戦相手は、ピカチュウの電撃も通用しないいわへびポケモン、イワークだった！　大興奮のテレビアニメ原作ノベル！